

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集 (4)

「愛知大学 1960 年代後半期 (1967～1970) における法経学部 法学科、経済学科
(豊橋校舎、名古屋校舎) 卒業生の在学状況とその後の軌跡 (前編)」

1. はじめに

愛知大学名誉教授 (地理学)、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長

藤田 佳久

本稿は、愛知大学東亜同文書院記念センターが 4 年前から開学時以降、少しずつ行ってきた愛知大学卒業生について、1967 年から 1970 年までの在学時の状況とその後の軌跡について明らかにするための個別アンケート調査について、第 4 回目の結果報告である。なお、アンケート対象は、法経学部の豊橋校舎、名古屋校舎の法学科、経済学科、経営学科の卒業生、同 2 部、および、文学部 (豊橋校舎)、そして大学院 (豊橋校舎、名古屋校舎)、専攻科 (豊橋校舎) この時期に存在していた各校舎夜間短大については、すでに前号で紹介したので、それを参照していただければ幸いである。

今回のアンケート調査は、2023 年の 3 月に実施した。回答者の年齢は、ほぼ 70 歳代後半で、年長者は 80 歳代にも及ぶ高齢域の方々である。すでに亡くなられた方々も多く、また高齢のために体調不良の方々も多く、回答のむづかしい方々が多かった。それだけに、前号でも述べたように、実施が 10 年遅れたと反省している。

しかし、回答をお寄せいただいた方々は、愛大時代と社会人時代をしっかりと記憶され、ご自分の人生を振り返りつつ、人生への思いと愛知大学への思いと期待、そしてご提案までいただいた。その思いに我々は応

えるべく、それぞれの方々からの知恵の中の「温故知新」をくみ取りたいものと願っている。あらためてご回答にご協力いただいた卒業生各位に心から厚くお礼申し上げます。

今回の 1967～1970 年の卒業年次生たちの学生時代は、1960 年代から始まった日本経済の高度経済成長の波にのった時期であった。入学前の新幹線開通 (1964) や東京オリンピック (1964) はまさに日本経済の序章的發展のシンボルであった。所得増とインフレが始まり、大都市のさらなる人口集中による都市化が進み、輸出も伸びて経済発展を支えた。そのため、大学への進学率は高まり、高等教育の大衆化と言われたりした。そして当時その急増する大学進学者の多くを私学が受け手となった。しかし、校舎不足や学生への対応の遅れ、カリキュラム改革、教授法などの課題も噴出し、各私学は財源に悩み、それが授業料の値上げにつながり、学生との紛争が起こった。1970 年ごろのデータでは、379 大学のうち 139 校でいわゆる大学紛争が生じ、国立大学も 88% に当たる 66 校で紛争が見られた。大学が大きく変質せざるを得ない中で旧体制が学生たちからの批判を浴びた。東大医学部紛争はその象徴であり、それは東大安田講堂の紛争に

至っている。

愛知大学でも前述のごとく 1970 年には総学生数は 1960 年の倍増となり、1 万人に達した。受験競争の激化の中での対応であった。当然教室、学生施設、教員などの不足、カリキュラム整備などなどに問題が生じ、従来からの学生自治会との協議により授業料アップの決定が困難になり、前年からの学費値上げ反対運動、また名古屋校舎では学生組織が不安定化した紛争、さらに、折からの国による大学立法化への反発も加わり、両校舎でストライキも行われた。この時期、世界でもアメリカでのベトナム戦争への反戦、フランスでの五月革命、中国での文化大革命などの学生運動が幅広く生じ、注目された。

一方、このような動きの中で、愛大では、前年 (1966) には創立 20 周年を迎えたあと、両校舎で校舎、研究館、学生会館などが次々に建設され、『中日大辞典』の刊行、生協設立、文学部史学科に地理学専修設置など、キャンパス整備の進展も見た。

いずれにせよ、この時期は愛大内外でのダイナミックな動きがあり、愛大自体もそのような環境変化に対応した。一方、学生として在学した今回の卒業生たちは、このような時代の転換変化の中でどのように生き、自己を育んだのかは一つの大きな注目点といえそうである。

また、卒業後は高度経済成長期の好況の中で就職し、新規の事業や幅の広がった経済活動の中へ飛び立ったが、1973 年 (昭和 48 年) には石油資源をめぐる欧米資本とアラブ産油国の対立から、産油国側の産油量規制から「オイルショック」が世界を駆け巡り、日本もその中で苦境に立たされた。庶民

は品不足のうわさから、チリ紙や洗剤、砂糖など日用品の買い占めに走ったりして、大騒ぎになり、日本国民全体が、日本経済も世界のシステムの一環に巻き込まれていることを痛感させられた。それは高度経済成長期の波に乗って就職したこの時期の卒業生にとっても、仕事に慣れ始めた時期にあたり、初めての試金石になったはずである。それにどのようにこの時期の卒業生たちは対応し、クリアしたかも注目される点である。

2023年度アンケート調査 発送および回収数

新制学部															豊橋校舎				法経学部合計										
豊橋校舎 詳細															名古屋校舎 詳細				文学部										
13.5学科				14.経済学科				15.経営学科				13.法学科				14.経済学科				15.経営学科									
卒業生 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数		フットボール 数			
学	1967	42	27	4	445	227	20	156	72	6	143	61	9	381	191	11	132	65	5	79	42	4	1456	715	5	5	5	5	
園	1968	43	3	7	457	228	23	141	59	6	126	63	6	328	147	10	106	49	4	82	51	6	1400	665	6	6	6	6	
粉	1969	44	9	7	556	284	23	101	57	9	121	58	6	370	182	12	85	35	2	151	87	11	1548	793	7	7	7	7	
争	1970	45	18	14	403	233	24	267	146	8	143	70	4	263	141	6	123	68	3	192	104	9	1609	886	6	6	6	6	
計				657	339	34	1860	972	90	671	334	29	553	252	25	1342	661	39	446	217	14	504	284	30	6013	3059	26	26	26

		法経学部二部										法経学部二部合計			
		豊橋校舎					名古屋校舎								
		311法学科		321経済科			312法学科		322経済科						
		卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数	卒業生 フットボール 数	フット ボール 回数
愛大	西暦 和暦														
学	1967 42年	35	25	2	63	30	2	202	100	5	235	80	4	535	235
園	1968 43年	42	26	0	67	36	1	181	96	2	191	74	4	487	222
粉	1969 44年	49	34	1	59	31	3	207	89	6	187	73	6	496	237
争	1970 45年	76	45	4	87	45	3	169	81	3	152	60	3	484	231
計		202	130	7	276	142	9	759	366	16	765	287	17	2002	925

		院・専攻			
愛大	西暦	和暦	卒業生		
			人数	送数	収数
学	1967	42年	37	19	0
国	1968	43年	42	21	0
紛	1969	44年	41	24	2
争	1970	45年	33	20	2
計			153	84	4

※同窓会名簿をもとにアンケートを発送

※データ処理の都合上、多少の誤差が生じる場合もございます

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集 (4)

「愛知大学 1960 年代後半期 (1967～1970) における法経学部 法学科、経済学科
(豊橋校舎、名古屋校舎) 卒業生の在学状況とその後の軌跡 (前編)」】

2. 調査の方法と回答者

愛知大学名誉教授 (地理学)、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長

藤田 佳久

調査の方法は、1967 年から 1970 年にかけての卒業年次生である法経学部 (豊橋校舎、名古屋校舎)、文学部 (豊橋校舎)、法経学部 2 部 (豊橋校舎、名古屋校舎)、大学院 (豊橋校舎、名古屋校舎)、専攻科 (豊橋校舎) の該当者を対象として、卒業生名簿に従って郵送方法によった。その郵送者数と回答者の数は前ページの表に示した。前述したように、回答数は多くないが、この時期には対象者が高齢化し、70 歳代の後半であり、物故者や体調不良者も多く、後述したように記述中心のアンケートの記入の回答が困難であったケースが多くなっていたこと、また、郵送先は同窓会名簿を利用したが、多くが住所不定で戻りが多く、移転先が同窓会に伝えられておらず、本人へ届かなかったケースも多かったことによる。この時期の卒業生は日本経済の好調な時期とそのあとのオイルショックなどで、かなり転勤が多かった影響だと思われ、その時代を表しているとも解釈できる。

調査内容はアンケートによる記述式を中心とした。その内容はアンケート表を添付して示したのでご参照いただきたい。その内容は、(A) 入学時の出身地や入学先、卒業年次など、本人の基本的状況、(B)

在学中の学業状況、(C) 在学中のクラブ、サークル活動、(D) 就職状況、(E) 愛知大学卒業生としての意識、などである。なお、アンケート用紙は各学部ごとに若干差がある。それぞれの整理については、高木秀和氏 (本学非常勤講師)、森田亮子氏、梶原純子氏にサポートしていただいた。

ただし、今年度の結果報告については、スペースの関係で、法経学部の 2 学科 (法、経済) (豊橋校舎、名古屋校舎) までとし法経学部経営学科 (豊橋校舎、名古屋校舎)、文学部、法経学部 2 部 (豊橋校舎、名古屋校舎)、大学院、専攻科は【後編】として次号に収録させていただく。ご容赦いただきたい。

では以下、その結果についてみていくことにする。

アンケートの回答をお願いいたします。[] の中で該当する番号に大きく○をつけてください。複数回答でも結構です。また、自由記載へのご協力をお願いいたします。記入欄が不足の場合は別用紙への記載も可能です。よろしくお願いいたします。

A. あなたの入学時のことなどを差し支えない範囲でお答え下さい。				
1	お名前 ()		性別 [①男 ②女]	
	入学年次は (昭和 年)		卒業年次は (昭和 年3月)	
	生年月日は (昭和 年 月)		現在 (2022.1.1) (歳)	
2	入学前のお住まい (県都府道)		市郡 町村)	
	入学後のお住まい (県都府道)		市郡 町村)	
	それは [①寮 ②下宿 ③アパート ④自宅 ⑤ほか ()]			
3	入学される前の学校 [①国内 ②国外] 高校名またはその他()			
4	本学への入学は [①卒業後 ②編入]			
	②を選んだ方：編入前の学校名 ()			
5	どのように本学を知りましたか ()			
6	本学のあなたの入学先は [①豊橋 ②名古屋(車道)] キャンパス			
	(学部	学科	専攻)
7	本学へ入学した理由は			
8	本学へ合格した経緯は			
	[①入試 ②推薦 ③面接 ④ほか ()]			
9	授業料はどのように工面しましたか			
	[①親から ②親戚・縁者から ③奨学金から ④アルバイトから ⑤ほか ()]			
10	生活費はどのように工面しましたか			
	[①親から ②親戚・縁者から ③奨学金から ④アルバイトから ⑤ほか ()]			
11	途中で転学部、転学科、転専攻した場合 [①豊橋 ②名古屋(車道)] キャンパス			
	(昭和	年に	学部	学科 専攻) へ
	その理由は			
B. あなたの在学中の学業は				
1	学業の位置は [①学業が主 ②どちらかといえば学業 ③学業はまずまず ④学業は従]			
	その理由は			
2	興味をもったり、面白かった学業分野や授業は			
3	印象に残った先生とその理由は			

4	ゼミを選択していた方は、どんな内容で、担当の先生は
5	卒業研究を行った方は、その研究テーマは、その理由は
6	先生との交流はありましたか。その交流内容は
7	図書館を利用していましたか。図書館をどのように活用されましたか
8	在学中の全体としての満足度は [①大いに満足 ②まずまず満足 ③まあまあ ④あまり満足していない] その理由は
9	学業の成果がその後の人生に与えた影響は [①大いに影響 ②まずまず ③まあまあ ④あまり] どのような影響でしたか
C. あなたのクラブ・サークル活動は	
1	クラブ・サークル活動に参加していた方は、クラブ・サークル名は ()
2	よく参加しましたか [①よく参加した ②まずまず ③あまり参加しなかった] どのような活動内容でしたか
3	クラブ・サークル活動をやってよかった点は or クラブ・サークル活動をしなかった理由は
4	クラブ・サークル活動はその後の人生に影響がありましたか [①大いにあった ②まずまず ③まあまあ ④あまりなかった] その理由や、良かった点は
5	学外のクラブ・サークル活動をされた場合、どのような活動でしたか
6	その後の社会参加との関わり合いがありましたか
D. 就職、就業について①	
1	卒業時に就職活動をされましたか [①かなり積極的 ②やや積極的 ③普通に ④あまりしない ⑤全くしない] その理由は
2	あなたの卒業時の就職環境は [①かなり厳しい ②やや厳しい ③普通 ④あまり厳しくない ⑤全く厳しくない]

裏面へ続く→

D. 就職、就業について②	
3	卒業時に就職先、分野を決めていましたか。なぜその分野でしたか
4	希望した分野の職種、企業、機関名、組織へ就職できましたか [①はい ②なんとか ③意識せず ④意に反して] それが可能であった理由は
5	差し支えなければ、就職先の企業名、機関名、組織名をお答えください (所在地)
6	就職のさい、お世話になった方は [①大学就職課 ②愛大卒業生 ③知人、友人 ④自力 ⑤就職先 ⑥ほか ()]
7	就職先では「愛知大学卒業」という経歴は、意識したことはありましたか [①はい ②少し ③特になし] その理由は
8	転職をされていれば、転職先をお答えください。 ①(会社名: /業種: /所在地: ②(会社名: /業種: /所在地:
9	定年後、再就職されていれば、就職先をお答えください。 ①(会社名: /業種: /所在地:
10	就職先や社会人として、愛大卒業生は他大学出身者と比較してどのように評価できると思われますか
11	愛知大学卒業生を他大学卒業生と比較すると、どのような点に特徴がありますか (ありましたか)
E. 愛知大学卒業生として	
1	愛知大学の設立主旨は、「世界平和と日本文化への寄与を根幹とし、国際的教養をもつ人材育成、地域社会文化への貢献」であり、さらに「知を愛する真理の探求」、湧き上がった「自由、受難」などが掲げられています。これらの大学の理念が、あなたにどのように反映されたかについてお教え下さい。
2	愛知大学のルーツは上海にあった「東亜同文書院」にあり、そのため愛知大学は戦後旧制大学として設立認可されました。当初、書院生や他の学校からの編入、入学生も多数にのびりました。あなたは、そのような愛知大学創設期の歴史を知っていましたか [①よく知っている ②少し知っている ③知らない] ①②の方は、どのようにして知ったのですか
3	皆さんの在学中、あるいはその前後にいわゆる「愛大事件」があり、本間学長は最後まで学生の弁護に徹しました。この事件に対して、あなたは知っていますか [①よく知っている ②少し知っている ③知らない] 「愛大事件」を知っている方（上記①②の方）は、どのように感じられましたか

4	あなたは母校としての愛知大学に [①大変関心 ②多少関心 ③普通 ④あまり関心ない] その理由は
5	あなたは愛知大学の情報を何から得ていますか [①テレビ、新聞 ②大学のホームページ ③「愛大通信」 ④さまざまな会合 ⑤受験雑誌 ⑥同窓生 ⑦同窓会報 ⑧愛大新聞（豊橋、名古屋） ⑧ほか（ ）]
6	愛知大学にどのような情報を期待しますか
7	昭和40年代には他大学と同様に「学園紛争」がありました。愛知大学の場合、契機は何だったとお考えですか
8	愛知大学での「学園紛争」をあなたはどのように把握していましたか
9	その「学園紛争」はその後の大学生活や同窓会活動・就職、社会などに影響はありましたか。あれば具体的に
10	あなたは同窓会（支部活動も）に参加していますか [①はい ②よく ③時々 ④いいえ] その理由。また、先輩や後輩とどのようなつながりがありましたか
11	同窓会の魅力をどのようにアップしたらよいとお考えですか。要望や提案があればご自由に
12	今日の愛知大学をどのように見ておられますか。要望や提案があればご自由に
13	愛知大学の後輩の学生に伝えたいことをご自由に
14	人生をふりかえって、あなたは [①大いに満足 ②まずまず満足 ③普通 ④少し不満 ⑤大変不満足]
15	満足度と、愛大卒業生との関係は [①大いに関係 ②多少関係 ③普通 ④あまり関係ない ⑤全くない]
16	最後にあらためて、あなたが愛知大学から得たものは何ですか。あれば座右の銘もお答えください
17	あなたが、あなたの人生経験や研究をまとめ、自費出版も含めて刊行したものがあればご紹介ください
18	あなたの愛大時代の印象的な思い出がありましたらご記入下さい

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集 (4)

「愛知大学 1960 年代後半期 (1967～1970) における法経学部 法学科、経済学科
(豊橋校舎、名古屋校舎) 卒業生の在学状況とその後の軌跡 (前編)」】

3. 愛知大学「法経学部」(法学科、経済学科) 卒業生たちの 在学時代とその後の軌跡

愛知大学名誉教授 (地理学)、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久

第 1 章 豊橋校舎「法経学部 法学科」卒業生の場合

A. 生年、卒業年、出身校など

(1) 生年、卒業年、出身校

ここでは豊橋校舎の法経学部の法学科の卒業生へのアンケート結果から見ていく。法経学部のコンセプトは、法学と経済を完全に分離せず、両者も融合しつつ学べる環境をめざしたところにあった。しかし、法学はまさに法律を学ぶという特殊性もあり、法学科入学生は法学部へ入学した気分であったと思われる。しかも、法学の教授陣は学長の本間先生が、戦後の最高裁の事務局長に就任して、最高裁の民主化を進めた実績もあり、そのほかの教授も日本学術会議に選ばれるほどの力量を持っており、法学科への入学は日本経済の発展と、日本社会のダイナミクスの中で価値ある分野だと思われていたといえる。

表 1-A-1 は 1967 年から 1970 年の卒業生たちの生年を示した。このアンケートの中では、1941 年から 1948 年まで広がり、1947 年、1948 年あたりから増えていて、戦後のベビーブームにつながっている。愛大でも学生数が増加した時期で、この時期の後半は大学進学率も高まった時期である。

表 1-A-2 は、入学生の出身県を示したもので、豊橋校舎に近接する、東西三河と尾張が多くを占める。しかし、愛知県以外もその合計は愛知県出身者と近い数を示し、中部地方に広がっていたことがわかる。これはキャンパス内の旧陸軍兵舎が学生寮として安い寮費で提供されており、その影響もあったためと思われる。石原裕次郎と三船敏郎が主演した映画「黒部の太陽」にはこれら多くの寮生のうち 1、2 年生が中心になって出演し、黒四ダム建設の工事人夫としてトンネル内に突如あふれ出た大量の地下水に追われ、混乱する肉薄の演技に、観客の眼を釘付けにした。

表 1-A-3 は判明分の出身高校の一覧である。

(2) 愛知大学の認知と志望動機

表 1-A-5 は本学を知った理由である。地元校であるという回答が最も多く、この時期、本学がこの地域で知られるようになっていたことがわかる。旧制大学としてスタートした本学は、進学資料でも広く注目され、高校教員による推薦も多く、すでに愛大

卒の教員も推薦者になっていたことがわかる。一方、後発の新制大学も各地に誕生して、これまでのこの地域での人文社会系の独占という状態は緩くなった。

表 1-A-7 は、実際に愛知大学へ入学した理由である。最も多いのは授業料の安さであり、通学の至便さであった。終戦直後に開学した愛大は、戦後の焼け野が原の中で、戦時下で果たせなかった学びを熱望する青年や大人たちのために、各教員が東海地方各地の都市で働く勤労青年たちも意識して「土曜講座」を開催し、すぐに 1 万人を超える受講生を数えた。NHK 浜松放送局は毎週土曜日に「愛大土曜講座」を放送してくれたほどであった。それが愛大に新たな夜間 2 部を誕生させる原動力になった。したがって、愛大は勤労青年たちの学習の場を提供するためにも授業料の安い大学づくりも目指した。愛大の安い授業料の伝統はこの方針からきている。当初は国立大学の授業料とほぼ同じ程度であった。それだけに、愛大当局は学長自ら寄付金集めに走り、それを知った当時の愛知県知事桑原幹根は自らそのリーダーになって、県下の企業や様々な組織、一般人からの愛大への寄付集めに力を入れたほどであった。この時期になると、経済も上向きになっていくが、それでもアルバイトなどで授業料や生活費を工面する学生は多かった(表 1-A-9・10)。そのほか、本命の法律を学びたい、愛大の環境、学風なども入学理由に挙げられている。また、愛大を滑り止めにしたケースも見られるが、親や高校教員から強く愛大を進められ入学したとの回答もある。

B. 学生生活と満足度

(1) 学業のウェイト

次は学業生活と在学中の満足度についてである。

表 1-B-1 は、在学中の学業のウェイトについて示したものである。それによると、「学業が主」であったとする回答が全体の 53%を占め、さらに「どちらかと言えば学業」という回答も加えると 76%が学業を中心に学んだことがわかる。法学は各分野の関係法を習得する必要がある、それが学業中心の生活になっていたものであろう。

表 1-B-2 は、その関心分野の回答である。憲法、民法、刑法、法社会学などを中心に、各人の関心の広がりが見られる。また、専門課程とともに教養課程も学んでおり、人文、社会科学、語学などの科目があげられている。

(2) 印象に残った先生たちや講義、ゼミ

表 1-B-3 と B-4 は印象に残った先生たちと、自分が属したゼミについての回答である。まず B-3 では教養課程の分野も含め多くの先生があげられている。もっとも多く名前が挙げた先生は、黒木三郎先生であるが、所属ゼミの最も多いのも黒木先生であり、これら両表はゼミとの関係が見られる。所属ゼミでは次いで木田、浜田、前田、柳沢、神谷、胡麻本とつづく。黒木ゼミでは、法社会学という戦後に浮上した新たな分野に対して、入会林野の問題に取り組むフィールドワーク共同研究があり、座学だけではない臨場感の体験が、先生の温厚な人柄の魅力とともに受講学生に人気であったことが読み取れる。回答から先生への寸評を若干示すと、温厚誠実な浜田先生、講義内容も話し方も秀逸で格調高い山中先生、そして

高桑先生、合宿指導と大学史に詳しく、温厚で指導力も優れていた神谷先生、誠実で研究熱心な柳沢先生、熱心で司法試験を進めた前田先生、熱心な夏目先生、自由でユニーク、ユーモアもあったドイツ語の板倉先生、コンパの交わりの英語の千葉先生、興味深い講義の木田先生、ハゼ釣りも教えてくれた本間忠彦先生などなどである。集中講義であったが碧海純一、川島武宣両先生の特別講義も。

尚ゼミのテーマは、黒木ゼミでは入会林野、婚姻慣行など法社会学実践、家族法、浜田ゼミでは民法、不法行為、民法債権債務、神谷ゼミでは国際連合憲章など国際法、本間忠彦ゼミでは手形・小切手法、権利の移設、川島武宣ゼミでは法社会学の購読、柳沢ゼミでは国際政治法の分析手法、前田ゼミでは民法の判決研究、木田ゼミでは刑法と判決をめぐる討論、胡麻本ゼミでは労働法、酒井ゼミでは憲法、三田高三郎ゼミでは民事訴訟法、など。(なお、ここではあくまで回答があった分のゼミだけを示した)。

(3) 卒業論文

以上から、自己の総決算ともいえる卒業論文のテーマを示す。(忘却も多いが、回答分のみ)。

1967 年

「共謀共同正犯の理論」(当時の過激デモに対する国家の圧力への批判)、「協議離婚」、「借地借家法 1 条の 2 について」、「戦後日本における労働運動史」(学生運動が盛んであったことからの関心)。

1968 年

「無罪と有罪の限界」、「人事訴訟手続

きの考察」、「公害」(当時の社会的問題と法的根拠)、「違法立法審査権について、一外国との比較をふくめての考察一」

1969 年

「売り主の瑕疵担保責任の研究」、「養子法について」(家族の近代化との関係)、「兵庫県田島地区農村の出稼ぎ実態」(杜氏を中心に)、「北方領土と問題点」、「(テーマ忘却)」

1970 年

「植木枝盛の男女同権論」(学会賞受賞)、「(民法関係)」、「中近東の空の下で」(中東戦争に関心)、「根抵当権について」、「ベトナム戦争」(ライブの国際情勢を追う)、「入会林野の現代的諸問題—入会権の近代化—」(学会賞受賞)、「志摩地方(越賀)における足入れ婚について」(婚姻の現地調査)、「憲法、裁判官の心理的裁量」、「心臓移植に関する刑事学的一考察」(和田教授の事例から)、「(労働基準監督官試験を受験するため)」、「不作為犯の一考察」(作為的でない悪事研究)

それぞれのゼミ活動と時代性が反映しているように思われる。

(4) 先生との交流

年次別に挙げる。

1967 年

ゼミで「伊豆の一泊旅行。ゼミ後には豊橋市内でいわゆるコンパ」、「コンパあり」、「早朝の工程でゴルフうちの胡麻本先生の球拾いをして、お宅で鍋をぐちそうになった。」

1968 年

「夏には佐久市までゼミ合宿、ほかのゼミ生の参加も」、「ゼミ、コンパのほか、終戦時まで判事であった時の先生の活談などを拝聴」、「コンパの交流会アリ」、「先生宅でゼミ生と懇親会あり」

1969 年

「地域の実態調査研究の時の交流」、
「ゼミ合宿、そして卒業後も懇親会、先生を就職先へ講師として招いた」、
「先生のご逝去までで交流。就職や結婚の世話もしていただいた。ご著書の出版時のたびに校正などをお手伝いした。還暦や傘寿記念論文集刊行時も」、
「ゼミ合宿、愛大公館での夏季講習、愛大山の家（津具村）での合宿」

1970 年

「先生が早稲田に移られた後も東京でお会いした。都知事選前にも」、「自分が東京へ就職したあと先生宅へ訪問した。」、「年2回の合宿と、先生宅への訪問など」、「愛法会（司法試験受験講座）では前田、夏目先生に夏休み中もご指導を受けた。」、「数回出版パーティに参加し、たびたび情報交換も」、「黒木ゼミや法社会学研究会では、津具村や三重県でよく合宿した。」、「先生宅への訪問と奥様の手料理とのコンパ」、「先生とのコンパ」、「卒論提出後、先生から題材がよかったとほめられた」、「木田、夏目、神谷先生の講義後は会食をした」

（5）図書館利用

ゼミや卒論研究には図書館が利用されたが、その利用状況である。

1967 年

「司法試験や卒論執筆に利用した」、
「参考書を探しに」、「関係書の借りと管内利用をした」

1968 年

「ゼミ発表の判例集をよく利用した」、
「卒論に活用」、「一人活用」、「新聞をよく利用」、「ほとんどなし」

1969 年

「卒業研究で」、「常に利用していた」、
「卒論の資料収集で」、「利用せず」、「行ったことなし」

1970 年

「講義の合間によく利用。閲覧、新聞、貸出」、「授業の間に準備を含め利用」、
「ほかの先生のテキストを読むために」、「あまり利用しなかった」、「存在を知らなかった」、「授業の予習、判例集はよくつかった」、「卒論作成に」、「卒論作成と資料収集に」、「授業内容の調査、労働基準監督官試験の受験勉強に」、「授業の合間にほとんど毎日利用した」

以上、回答者の個別記述を示した。全体としては利用している状況が見られたが、一部には利用してない回答もあった。

愛知大学にとって、図書館は大学の根幹とする考えがあったが、当時はまだ予算も限られ、施設も旧陸軍の木造建物を利用する形で不十分であった。しかし、この時期の直前の1966年に4階建ての研究館と2階建ての図書館が建設され、大学の基本的基盤の充実が図られた。いわばこの時期が本格的な図書館の出発点となり、次の1970年代から飛躍的な発展に向かうことになる。回答はその直前の状況を示したものといえる。

(6) 在学中の満足度と人生への影響

まず表 1-B-8 は、在学中の満足レベルについての回答である。それによると「大いに満足」全体は 47% でほぼ半数の回答者の満足度が高い。それに「まずまず満足」のレベルを加えると、全体の約 80% が満足していることになり、全体としては回答者が愛知大学に納得していたということになる。

その満足の理由を見ると、その多くに優れたそして個性豊かな教授陣が揃い、その教授陣との交流も盛んで、色々な考え方を身につけられたこと、多様な学友たちとの色々な活動を通してのつながりができ、その後の人生に友を得たこと、ゼミ活動から職も得たこと、などを挙げている。

表 1-B-9 は、愛知大学での学業がその後の人生に与えた影響についての回答を示した。それによると、「大いに影響があった」とする回答は 35%、それに「まずまず影響があった」とする回答を加えると 62% になる。一方、「あまり影響を受けなかった」という回答は 18% あり、それに無回答分を加えると 25% があまり影響がなかったということになる。前 B-8 表に比べると卒業後の社会人となってからの影響力が低めになっている。しかし、その 25% の回答者その理由を見ると、すべてが無記入になっていて、理由は明らかでない。法律関係以外の職業に就いたということかもしれない。というのは「影響があった」とする回答者の理由を見ると、例えば「法的な思考、政治、経済への批判的な精神、社会問題のとらえ方ができるようになった」、「地方行政の仕事に法的知識が大いに役立った」、「仕事で法曹関係や学者との付き合いができるようになった」、「在野精神が養われた」ほか、県警や司

法畑で大いに役立っている、などとする回答が多いからである。

いずれにせよ、法学科を卒業し、その関係の職業に就いた卒業生は満足度が高いということであろう。

C. クラブ、サークル活動

次は、「クラブ、サークル活動への参加活動状況」である。この時期になるとクラブやサークルもだいぶ増え、愛知大学全体でも活況を帯びていった。

表 1-C-2 は、クラブ、サークルへの参加状況である。回答者だけの状況であるが、全体としてみると、「よく参加した」と「まずまず参加した」グループと、「あまり参加しなかった」と「なし」の無回答との数は 19 対 15 になり、前者のクラブ、サークル派とでもいうべきグループの方がやや多いといえる。この前者のグループうち、社会文化系では、その参加理由に「目標を持ち、互いに競えられる」(愛法会)、「先輩、仲間との交わりや刺激しあい、そしてコンパに楽しみ」、「理論と現実の理解ができる」、「色々な体験ができる」(新聞会)、「個展の開催」(美術)、「自分の趣味の範囲を広げ、音楽出版への就職を狙い達成」(男性合唱団)、「友人ができ、発表会も」(中国語会話同好会)、「多くの友人と一生の友」(法学研究会)、「友人ができた」(ジャズ)。

一方、スポーツ系クラブでは、「先輩、後輩、OB とのつながり」(ヨット)、「友人ができた」(剣道)(軟式野球)、「集中力、姿勢、精神力を売る」(剣道)、「ペアを組んで友人ができた」(軟式テニス)、「仲間ができた」(少林寺拳法)、など。

人文社会系、スポーツ系とも友人を求め

ていたこと、またそれが実現したことが強調され、お互いの付き合い仲間を生み出していったことがわかる。

なお、回答者のクラブ、サークル名は表 1-C-1 に示した。法学部の所属だけあって、法学研究会、愛法会、法社会学研究会のメンバーが目立つ。

そして表 1-C-4 は、クラブ、サークル活動の影響レベルをまとめた。無回答はこれらに加入していないとみなして除外すると、「大いにあった」と「まずまずあった」を合わせると 64%、それに「まあまあ」を加えると 77% になり、その多くが評価していることがわかる。一方、「あまりなかった」とする回答者はその理由が無記入であった。

D. 就業状況と人生

こうして最終学年に至ると就職活動が始まる。この時期、高度経済成長期へ突き進んでいったため、就職問題はそんなに深刻ではなかった。

表 1-D-1 は、そのような状況下での就職活動をどの程度したかの回答である。それによると、最も多いのは「普通」だとする。それ以上の「かなり積極的」と「やや 6 名は積極的」と合わせて 2 割に過ぎない。一方、「あまりしない」、「全くしない」は併せて 12 人で 35% であり、あまり、積極的に就職活動をする雰囲気は緩かったといえる。それは表 1-D-2 に示す就職時の環境にも表れており、一般的にはそんなに問題ではなく、特定の資格を有する職場などの場合は間口が狭かったということであろう。当時の一般企業にはまだ大卒は少なく、経済成長発展の中で、大卒需要は増え、就職希望者はほぼ希望通りの就職先を得たといえる

(表 1-D-4)。また、当時は現在のような大学側の手取足取り的な就職指導もなく、自ら自力で就職したケースが多く (表 1-D-6)、その際、愛知大学卒を自信とプライドを以て意識した (表 1-D-7)。

表 1-D-5 は回答していただいた就職先の一覧である。一般企業、建設企業、鉄道、報道、金融、公務、教員、法令会社の順に示した。回答によれば、その多くは希望した職種、職場が示されたことになる。全体としては、全国的な一般企業と公務員が多い。うち、全国的な一般企業は東京を中心に全国に広がっており、求めた希望職種を選んだということであろう。したがって就職した企業で初めての愛大卒生だと回答したケースも見られる。全国的な金融機関に就職したケースでは、英語では名大生にも負けなかったと、就職の裏側を開陳している。自ら自分の手で切り開いた職場であった。その一方、地元金融機関、豊田市役所、愛知県警にはすでに多くの愛大卒生が就職していた。例えば、豊田市にはすでに 30 人以上の愛大卒生が就職していたとある。教員はここでは 3 人だけだが実際にはもっと多い。公務員についても同様で、地元奉仕型の職場で、法学部卒の戦後の新しい職場だといえる。

表 1-D-8 は転職先である。この時期企業では終身雇用制が一般化していたが、何らかの事情で転職するケースはよく見られることである。それを見ると、その多くが東海地方の企業であり。それ以前に愛大卒として全国へ飛び立った卒業生が、家の都合などで里帰りのこの地域へ帰ってこられたといえそうである。卒業後の 1973 年にはバブルの崩壊があり、その影響もあったかもしれない。

なお、表 1-D-9 は、定年後などの再就職で、いわば、現役時代の実績の評価だともいえる。定年後も元気で、なお仕事に精出して頑張ってきた愛大卒生の特徴ともいえる。

最後に、職場での愛大卒生の評価についての回答は、記述ゆえに定量化しにくい、大学評価としては「中部の名門といわれ」、「南山と競い合っていた」などが回答されているが、職場では、愛大卒生が多いところでは「卒業生が多く力強い」、「地元の評価は高いが、地元以外ではあまり知られていない」、人物としては「専攻分野でまじめに習得する」、「実力的にそんな色ないが、技術系は東京圏が重用される傾向」、「自己の信念の強さ、仕事への熱意あり」、「派手さはないが真面目で忍耐強い」、「物事へのまじめさと人の好さは各段」、「愛大生としてのプライドをもっている」、などの特性を示す回答のほかに、「社会ではあくまで人物本位なのでそれを考えたことはなかった」という回答は複数あり、「とくに意識したことはない」という回答も複数あった。職種とか役職とか、地域とかで認識に差があるように思われる。全体としては愛大卒生が積極的に職場で奮闘している姿が伝わってくる。

E. 愛知大学卒業生として

(1) 愛大設立趣旨の回答者への影響

愛知大学は、1901 年、戦前の中国上海に設立された東亜同文書院を継承する形で、最後の東亜同文書院大学(旧制大学)学長の本間喜一(愛大 2、4 代学長)の下で豊橋に設立された。戦後の新制日本にふさわしくその歩みゆく道も示しつつ、世界平和への希求の下で、「国際人の養成」と大都市以外に初めて設立された旧制大学として「地域

文化への貢献」を目指した。この理念を卒業生たちはどう受け止めたかの回答である。回答は記述式なので、卒業年次別に紹介する。

1967 年

「地域社会への貢献として、総務省行政相談員を 27 年、社会福祉協議会会長を 14 年間務めた。」、「反戦、平和、自由、平等などの思想、思考に大いに影響を受けた」

1968 年

「自由・受難」が大きい、組織の中で「なにくそ」と思った」、「自由に学習ができた」

1969 年

「自分の人生に大変参考になった」、「より幅広い判断ができたと思っている」、「すべての人は平等を貫いてきた」、「理念は自然と消化して自分のなかに血肉化している」、「まさに私の授業内容の根幹をなしている」

1970 年

「戦前の日本に時計の針を戻してはならないという信念」、「外国旅行をして視野を広げた」、「特にないが、憲法で学んだ人権自由が大切だと知った」、「自由、受難は社会へ出てから感じるものがあつた」、「知を愛す。いまでも教壇に立っている」、「自分のためだけでなく、人のため、社会のために皆が幸せに暮らせるための道徳を痛感」、「働く際に多少、意識している」、「生涯にわたって学ぶ姿勢を身に着けた」

など、強く影響を受けたとする回答が多く、愛大卒生の精神的根幹をかなり形成し

ているということがわかれたが、「合唱団で繰り返し校歌をうたったが、それに気づかなかった」とする回答や、「意識しなかった」という回答も複数見られた。

(2) 東亜同文書院の認知について

上海にあった東亜同文書院は、敗戦によって閉校となったが、最後の学長であり院長であった本間喜一の機転で敗戦前に、富山県元呉羽紡績内に分校を設置し、最後の入学生を確保したほか、上海の本校舎から学徒出陣して帰校した学生(書院生)や、工場などへ学徒動員され、書院や上海の日本人収容所に収容された学生(書院生)、全体で書院生約 500 人が、翌年天皇の裁可を得て旧制大学として設立された愛知大学へ編入することになった。そのほか帰校先がなくなった外地にあった大学や高専の学生や東京空襲で大学の復旧が困難な東京の大学生の一部、戦後 GHQ によって取り潰された神宮皇学館大学の一部の学生なども加わって愛知大学へ編入された。こうして愛知大学は書院大学を中心にしたまさに「引揚げ総合大学」あるいは「東アジア大学」として誕生した。編入生がほとんどであり、予科 3 年、学部 3 年の合計 6 学年同時オープンという前校史をそのまま継承する前例のない形の出発であった。多くの編入生たちは、豊橋校舎のキャンパス内の膨大な兵舎の後を利用した寮に入り、学業を再開した。彼らはまさに愛知大学の原点となったのである。

これらの書院生は、今回の愛大卒生の時代にはすでに卒業しており、直接大学で共学するチャンスはなかったが、この書院生たちの歴史、遺構、伝承がどう継承されたか

の回答である。

表 1-E-2 は、書院生への認知レベルの回答で、それによると、ほとんどは知っており、全体の 3 分の 1 は「よく知っている」としている。その情報源は、愛知大学の出版物、図書館の関係本、両親から、愛大卒生や在学生から、同窓会情報、新聞、テレビ、『東亜同文書院と愛知大学』から、『東亜同文書院大学史』から、入学時の知識から、リーフレット、浜田先生、寮の先輩、のちの記念館見学、受験案内本、中国法制の教授、などで、そんな中で「本間先生と会食した時の話、また、ご子息の忠彦先生からも聞いた」という幸運な卒業生(1969)もいた。また先輩から、すごく優秀な先輩たちだと教えられた、など、色々なチャンネルで知識を得ており、みな多大な関心を持っていたことがわかる。

(3) 愛大事件の認知について

1952 年(昭和 27) 5 月 7 日の深夜、豊橋キャンパスに侵入したふたり組を見つけた学生が捕まえた事件で、学生にとっては手柄だったのに、その二人が警察官だったことから、学生が逮捕されるということで紛争となり、大学の自由と国家権力の対立ということになり、学生の言い分を信じた最高裁事務総長を 2 年間つとめ帰ってきたばかりの本間学長が弁護に立ち、最高裁まで長期の裁判で無罪を勝ち取るという大事件があった。メディアの過熱報道によって愛大は赤い大学としてレッテルを貼られ、地元からの寄付金がなくなるなど多大な迷惑を受けた。しかし、本間学長の正義論の実在化が学生や多くの支持を得て、愛知大学が大学当局と学生が初めてのスクラムを組んで共有化できた出来事でもあった。この時

期の卒業生はこの事件後 15 年ほど経過している。それだけにそれがどのように卒業生の中で共有化され、あるいは風化されたかについてのアンケートである。

まず、表 1-E-3 は、この「愛大事件」の認知度の回答である。回答者 34 名のうち、知っているのは 70% で、知らない、あるいは無回答が 30% であり、まだこの事件が昨年のこの調査同様に認知されていることがわかる。そこでここでは、認知している卒業生の、その認知内容の回答を年次別にみてみる。

1967 年

「学長の信念と学生への愛情を感じた」

1968 年

「学問の自由が侵された感あり、当時の学生の行動は当然だ。ただ実情が世間には伝わっておらず、愛大への印象が悪くなった」、「酒井先生の憲法の講義が心の残った」、「大学の自治は守るべきだ」複数

1969 年

「学長の精神とその情熱はすばらしい」、「東大のポポロ事件とともに、警察権力によって脅かされそうになった。本間先生は本当に立派だと思った」、「現在から見ると考えられない事件だ」

1970 年

「本間先生、夏目先生、天野さんの感動した、『愛知大学 20 年史』で知った」、「良く学生と話し合いをしていたのが印象的」、「愛大は最後まで学生を守ったのは誇りに思う、地元の人には嫌われたかもしれないが、我々のころは「愛大と学生さん」と良くしてもらい、我々は豊橋の人と街が好きになった」、「学

長のすばらしさを感じる」複数、「警察に非があると思う」、「警察が何しに学内に入ったのか、不思議。でっち上げではないか」

全体としては、本間学長の体を張った正義を貫いた姿勢に卒業生たちは共感している。一方、「詳細がわからない」や「ばからしい」との回答もあり。事件の詳細を伝えていくことは重要であると思われる。

(4) 母校愛大への関心とその理由

次は母校愛大への関心である。表 1-E-4 は、その関心度の分布を示した。それによると 70% 以上が「多少以上の関心」を持ち、「普通」という人数も加えると 90% 以上が関心を持っていることがわかる。その理由を見てみる。

1967 年

「中国研究が突出」、「南山と並ぶ大学でいてほしい」

1968 年

「母校だから」複数

1969 年

「近年の行政を巻き込む地域活動を知ったから」、「今でもゼミの交流がある」、「現役や後輩の行方に強い関心あり」、「母校」、「転職先の企業に愛大卒生が沢山いるから」

1970 年

「学生課「愛知大学の名をたたえよ」への思い」、「卒業生としての誇りあり」、「今も愛着あり」、「学生生活が人生で最高だったから」、「少数者の自負」、「資本主義社会で今日まで行きてまなび、その中で自らの生き方を学ぶ」、「自分

には地元愛知で経営センスがあると思っている」

(5) 愛大情報の入手源

では愛知大学の情報をどのように入手しているのか。その回答を表1-E-5に示した。それによると、最も多いのは、やはり「同窓会報」で、実数34名の回答者の20名と約6割を占めている。次いで「愛大通信」で、約30%である。この二つが突出し、それを追ってテレビ、新聞のメディアである。大学のホームページは10%台に過ぎない。年齢からみて、電子媒体よりは紙媒体の方が適しているということであろう。ただし、もっとも多い「同窓会報」は年1回の発行であり、同窓生が愛大ファンだとすれば十分な回数ではない。スマホの普及を見るとそれによる情報提供と活用をさらに進める必要があるだろう。

ところで、この時期の愛大卒生はどのような情報を愛大に求めているのかについてである。それを次に示した。

1967年

「研究成果とその内容」、「現在の学生たちの活躍や就職状況、また、優秀な教授陣の活躍状況」、「法科大学院の成果」

1968年

「司法試験、公認会計士試験、税理士試験の合格者数、政治家、会社経営者の活躍状況」、「テレビ、新聞などへの露出度が少ないのでは」、「大学と社会とのかわり、活動状況を」

1969年

「教授陣の論文発表、発信力の強化(特に中国問題など)、学生の学業、文化、スポーツなど諸分野での活躍状況」、

「社会出活躍する愛大卒業生を」

1970年

「学生募集要項の内容」、「社会で活躍している人材の紹介」、「愛大がデリバティブで損失した情報は同窓会には報告されていない。卒業生としては心配した」、「地元や海外企業との合併事業情報(特に中国、台湾)」、「学生に対する学問研究分野の強み情報」

以上のように、卒業生は愛大の教員学生、卒業生の研究、社会への発信力とその内容に強い関心と期待を持っていることがわかる。特に教員の研究内容情報については前回以降も含め、関心が高い。以前、全教員の年度ごとの研究成果は「大学通信」に掲載され、それぞれの研究内容もわかり、外部への発信力にもなっていた。それをまずは復活することを提案したい。卒業生の要望に対応できるように思われるし、教員間の相互理解も進むものと思われるからである。

(6) 大学紛争について

本稿の巻頭でもふれたように、今回の卒業生の在学時期は日本の多くの各大学での学園紛争期、さらに愛知大学における学園紛争期にあたる。1960年代から始まる日本経済の高度経済成長は、社会構造の上でも「1億総中流意識化」を実現した。1960年当初にはまだ大学進学率が10%台にとどまり、大学進学者はまだ「エリート階層」的な存在であったし、大学自体もまだ特権的な存在として君臨していた。しかし、所得向上とともに戦後のベビーブーム世代を中心に進学率が高まり、急激に「大学の大衆化、マスプロ化」状況が生まれ、その増加分は当初

私学が受け入れる状況となり、各大学では急には校舎、設備、教員、カリキュラム改革が進まず、特権的雰囲気が残る大学に対して、あふれる学生から不満の声が上がり、やがて叛乱が生じた。折しも、アメリカ学生のベトナム反戦運動、フランスの五月革命、中国の天安門事件など、世界からの刺激も加わり、1968年には東大での医学部学生の無報酬診療問題の紛争が、ほかの国公立大学へも波及し、翌年には安田講堂の攻防戦に至り、東大入試の中止などに波及した。そのため、国はさまざまな立法措置で対応し、以降大学行政に強く関与することになった。

愛知大学も1970年には全学部の学生数が1万人に達し、1965年の2倍となった。その学生増加傾向の中、1966年から授業料値上げの学生自治会との交渉が始まった。それまでの誇りは、授業料値上げは大学側と学生自治会との協議事項であった。それは勤労学生にも学問をという戦後からの信念によるものであったが、この時期の高度経済成長と猛烈なインフレで全国的にも授業料の安さを知られたこの仕組みが、増大する学生の受け入れとそれに見合う施設、教育の充実にはなお年額2万円の授業料値上げに抑えながらも値上げをせざるを得ず、ついに学生との団体交渉は決裂し、名古屋校舎の学生から反対の声が上がり、豊橋校舎でもバリケードが組まれ、両校舎での紛争へ広がった。折しも名古屋校舎側の自治会が成立せず、学生運動は自治会中心から一般学生も組み込んだ共闘体制が組まれた。これは愛大だけでなく大学紛争化した大学ではかなり共通化した。それだけ一般学生もこの問題に意識を高めた大学問題への当事者意識が共有されたということであった

と思われる。

今回のアンケートでは、まさにこの時期に大学紛争の渦中にあった卒業生が対象となり、それについてのその契機、紛争把握、その影響についての見解などを回答してもらった。以下、その見解を年代順に示す。

1967 年

「その契機は、はしかみたいなもの」

1968 年

「大学自体、真実は何かということでしょう」、「流行病」、「よくわからない」

1969 年

「学費値上げ」、「学園紛争ではなく社会紛争の大学への飛び火である」、「学費値上げ反対」をスローガンに、一般学生を広く巻き込み、自治会の主導権争い（保守、既成左翼、新左翼）に利用したものであるとも、「学費を下げよ」というキャッチコピーが一番気に入っていた。契機については知らない、「無関心だった」

1970 年

「学費の値上げ、大高の土地活用、マスプロ教育など、他に安保条約、沖縄返還、ベトナム戦争」、「学生自身が目標を以て大学生活を送らねばならない。学生に問題がある」、「学内的には学費値上げ」、「授業料値上げ、70年安保、ベトナム戦争反対」、「権力への反逆の風潮」、「日本中が政治的出混乱した時代、学生も同様に、政治に関心を持ち、学生なりに真剣に考え、行動した結果である」、「早大の中核派に影響を受けて過激になった印象（授業料値上げだった）」、「民青と革マルの争いのように思った」、「学園紛争の把握」

1967 年

「授業料値上げに対する抗議活動。当時は貧困学生が多かった。社会人として入学した人も多く、入試も困難化し、浪人が過半数を占めていたかも」、「学校内だけのこと」、「ノンポリでした」

1968 年

「無関心」、「よくわからない」、「迷惑な話」、「記憶になし」

1969 年

「集会に参加」、「社会紛争に参加していた組織の一部が学内に存在していたということ」、「民青の活動に協力する者は企業や公共団体の側からは反社会的勢力として睨まれていた。就職に不利になるかと遠のいていた」、「一部の学生が活動しているのみと思っていた」

1970 年

「思いも共有できる部分もあったが、スト、団交、ゲバ棒、ヘルメットは全く相容れるものではありませんでした。」、「学友とは話し合いをした」、「自治会の諸君は全国的に燃え上がった全共闘運動に引っ張られていたように思う」、「革マルの拠点があったが、そんなに過激なものではなく、大衆団交も平穏だったように思う。夜おにぎりが出たことも」、「青年期のはしか」、「生協（日共）、自治会（革マル）として認識していた」、「部室が自治会に近くだったので、立て看板で知った」、「学問をするうえで実りのない活動だと理解」、「わからない」、「無関心」、「その影響」

1967 年

「影響なし」、「教員採用試験に落ちたのは、影響があったかどうかわからない

いが、自分一人でした。企業ではあったかも」、「トヨタ本社へは入れなくなった」

1968 年

「授業が休校になり不満だった」、「特になし」4 件。

1969 年

「就職時面接で問われたが、直接関ないと」、「教員採用試験で問われ、どう思ったかとも質問あり」、「全くなし」

1970 年

「高度経済成長下で就職環境もよく、過激でない限り問題はなかった」、「なし」4 件、「就職に影響した」、「全く影響はなかった。自分としては「それなりにやった」自負があった」、「銀行試験で質問されたように思う」、「大学生活では授業が減少した以外は全く影響なし」、「警察の公安に就職したので影響はあったといえそう」

以上、法学の卒業生だけに多面的な関心もあり、一方学びに徹して無関心もあったということも言えそうである。

(7) 同窓会とのつながり

愛大卒業生はそのあと同窓会に参加することができる。ここは先輩、同輩、後輩との交流の場でもある。愛大の同窓会は開学以来古い歴史を持ち、途中からは東亜同文書院の同窓会も合流している。ではこのような同窓会とのつながりを見してみる。

表 1-E-10 はアンケートした時期に同窓会への参加状況を問うた結果である。それによると 34 名中 20 名の多数が参加しておらず、時々も含め参加者は 14 名にとどまっ

ている。そこで参加レベルごとの理由について試みる。

まずは「参加」組の回答

「地域に友人を作り、仕事にも還元できている」、「母校の隆盛発展を期待し、会員相互の交流を進め、ブロック長、支部長、同窓会副会長として組織的活動にも従事」、「定期的に旧交を楽しんでいる」、「各地区ごとの会に出席し、新たな交流への発展も」、「時々参加」、「在職中は「愛大会」も組織され深い交流あり、ゴルフも盛んだった」、「年賀状のやり取り、訪問も」

一方、「不参加」組の回答

「現在あまり活動がない」、「何か役員が各支部の飲み会に行っている感じがしてきた」、「地元支部へ」、「参加していない」、「案内がない。ゼミの先輩とは時々」、「同窓生とのつながりが作れなかった」、「一度だけ支部は出席。あまりプラスにならなかった」、「卒業生が少ないので、先輩後輩とのつながりができない」、「以前は支部活動もしていたが、人間関係で」、「サークル活動の方でつながっている」、「参加する気がなかった」、「東京時代はよく参加した。今はホームカミングデイ参加くらい」、「高校の同窓会で手いっぱい」、「若い時は参加。転勤後参加できず」、「10年ほどは参加、仕事の関係で出席できず。つながりはある」、「広い東京で生きるのが精いっぱい。時々声掛けはいただいた」

以上から、「参加していない」多くの卒業生も同窓会にかかわりを持っていたことが浮かび上がってくる。今後の高齢化の中で

人とのつながりはより重要になるだけに、健康に気をつけてほしいと願う。

次は「同窓会の魅力づくり」の回答

1967 年

「最近支部長から盛り上がらないとの話。OB の力量不足か」、「むつかしい。リーダーがいない」

1968 年

「若い人も顔を出せるように」、「参加者をどう増やすか」

1969 年

「地域組織の地道な活動。名古屋キャンパスを活用するイベントも」、「重心が名古屋へ行ってしまい豊橋が薄れてしまっていて少し寂しい」

1970 年

「参加しやすい雰囲気づくり。同じ年誘い合う」、「短大も含め、各地からのキャンパスツアーを」、「市議会選挙に力を入れても活動報告がない」、「全国各地の情報をもっと流す」

(8) 大学への要望、提案

1967 年

「傑出したモノ、こと、人を前面に PR して特徴を」、「笹島校舎のごとく有名校として発展を」、「かつては南山がライバル、今は他校にも負けそう。実績を上げて」、「末長い発展を」

1968 年

「入試難易度のアップを」、「司法試験の合格者増を、研究成果を公表し、知名度のアップを」、「法曹関係、中国関係で特色ある大学を」、「豊橋に本部を置くくらい、豊橋校舎の充実を」

1969 年

「地味で目立たない。存在意義、存続発展の要件の再確認を。現中学部の特色を」、「豊橋校舎の充実を」、「昔に比べると学生の質がアップしていると聞くが」

1970 年

「理系・情報・教育各学部の増設を。また附属中学高校の設立も」、「発展してほしい」、「この項は同窓会報からのみの情報しかない」、「かつては中国問題に愛大がコミットしていたのに、今は全くない。どうしたのか。」、「地方の学生を集める努力がない。メディアでとり上げられるスポーツ、学術もない」、「以前は東亜同文書院の流れで中国関係研究が売りだったのに、むつかしくなったのか。笹島校舎を活用開放利用し、地域社会文化への貢献を」、「18 歳成人になったからもっと早くから専門教育を始め、人により巣立ちを変えたらどうか」、「政治に関心なく、規制の個人主義、利己主義化に問題を感じている」、「もっと PR を」、「全国から優秀な学生を集めてほしい」、「学問研究体制が悪い。もっと著書の発刊を多くし、全国的ブランドを確立してほしい」

(9) 後輩の学生たちへ伝えたいこと

1967 年

「目標を定めて人生設計するプロになれ」、「勉学、スポーツに励んでほしい」、「みな頑張っていると思い

1968 年

「しっかり勉強し、資格も」、学んだことに自信を」、「とにかく勉強を」、「人生は勉強の連続、学生時代はその基礎固め」

1969 年

「4 年間は優。時間を大切に」、「目標を持ちその達成感を」、「愛大の自由や工夫を十分に生かせ」

1970 年

「愛大卒は一生ついて回ることを肝に」、「物を言う人間に」、「生き方に芯と新年を持ちたい」、「自信と誇りを」、「破天荒な学生が出ることを」、「誇りを」、「自然豊かな豊橋の知で勉学を」、「自由、活発に」、「日本人としての誇り他国に飲み込まれないように」、「建学の精神とその発展を」

(10) 愛知大学から得たもの

1967 年

「知を愛する心と友情。あきらめない」、「学生生活が人生にプラスになった」、「常に批判的精神を持てた」(カントの教え)、「グローバルな視野」

1968 年

「憲法も法なり。論理的思考を」、「山本五十六のやってみせ、言って聞かせ、させて見せ、褒めやらねば人は動かじ」、「入学式の学長の言葉「人生は恥のかきどおし」、「自由、受難、個の確立」、「自律、自ら進んで取り組む、温故知新」

1969 年

「自主自立」、「良い大学、良い学生、良い仲間(先輩、同輩、後輩)。偶然は偶然を喜ぶものだけに起こる」、「自由、闊達」、「自由と忍耐」

1970 年

「大學設立趣意書」の精神、「柳沢栄次郎先生のまじめに研究に取り組む姿。社会への奉仕活動」、「DO YOUR BEST」、

「政治的混乱の中で色々なセットの考え方を学び、勉強になった。自分は自分及び人のために何が出来るか」、「自由に学ぶ。アルバイトもしながら」

(11) 刊行物など

市原正隆『吾亦紅』市原青緑 句集
 山川孝吉『地理 10 分間テスト』山川出版社
 小野田哲「岡崎まちづくり論文で中日新聞賞」
 日笠羽司名『社会福祉法人の決算監査』清文社

(12) 人生の満足度と愛大卒業との関係

最後に、これまでの人生の満足度についての回答である。表 1-E-14 はそれを示している。それによると、「大いに満足」と「まずまず満足」が全体の 76%を示しており、すべては「普通」以上を示している。それぞれがそれぞれの道で努力し、満足を得たということであろう。では、その人生の満足度と愛知大学卒業との関係はどうであるか。それを示したのが表 1-E-15 である。「多少以上」でも「関係あり」とする回答は 53%で過半を占める。特に「大いに関係有り」とする回答は全体の 30%を占め、「愛大から得たもの」との関係は深く、強く満足度に寄与したことがわかる。

(13) 愛大時代の思い出

(次ページ参照)

法 豊橋校舎「法経学部 法学科」(13) 思い出

<思い出>

1967

①4年間南栄町のアパート「芙蓉荘」の2階で暮らした。6畳一間で学習塾(生徒3名)は今につながっている。今でも当時の生徒から年賀状が届く。②4年生の半年間は卒論に集中し、「共謀共同正犯の理論」は学会賞を頂いた。

豊橋駅から超満員のスクールバスで通学した思い出があります。

最高にまぶしい光輝く新鮮な時代。私の人生の原点と思う。母子家庭で農業を母と二人で守った頃。学生運動がはげしかった。いつもポケットに地球を入れて、目がキラキラしていたと思う。

ヨットと社会勉強(アルバイトを通じて)

1968

木田純一先生が亡くなられた時速達で連絡が来たこと。ゴルフの試合結果で朝日新聞に名前が載ったこと。

ゼミは勉強になりました。学生同士の交流競走もあり、充実した時間でありました。

1969

新聞会の活動

ゼミで実態調査をした事

特別の印象的な思い出なし。

4人の仲の良い同窓生とはいまだに年賀状の交換をしています。良き友を得た事が最大の思い出です。

1970

創立20周年事業。図書館・研究官の新築。愛大事件免訴。中日大辞典の創刊。渥美線の愛大前駅が出来たこと。文化大革命ハンガーストの学生に対し前田教授が牛乳をもって涙ながらに説得している姿に、教授と学生の距離の近さを感じたものでした。

特になし。

大学4年の時、ロシアに旅をしたこと。青春時代を過ごした4年間は尊い。

応援団活動

学食を含めて福利厚生がひどかったと思う。貧乏大学に貧乏学生(私も含めて)の印象があった。

寮祭(20周年)でみんなと寮歌を歌ったこと、学会賞を受賞し表彰されたこと

浜田ゼミの合宿をよく覚えています。車山高原の涼しいところで、団体生活を送り、毎朝おいしい朝ご飯をいただいたことが鮮明に残っています。残念なことは卒業のその日から同窓生との交流が無くなってしまったことです。在学中から県人会とか同級会の組織があればと今になり、思う。特に地方出身者には…。

青春の一時期、つ●からず己の意志で行動できた。

何を置いても先見性のあるいい先生方だったということでしょう。

寮で4年間、友と生活した思い出は懐かしい。寮での飲食、タコおどり、大学からは松山さん・細迫教授。

宿の際、敷地北辺に兵舎跡があり、泊った事が一度ありました。又クラブハウス東辺に有り、松林のに2階建ての木造校舎様で、毎日入り浸っていました。電車、美なギョーザ屋、etc.

色々な友達が作れた。特別な活動もしていました。

学生と教授および大学職員の方々と仲良く、会食や旅行をともにしたり、大変楽しい大学生活を送ることができました。資格取得の際の教授の指導は今も忘れることができません。

表 1 系

A-1 法経学部法学科 豊橋校舎（昭和42～45年卒）

卒業年 生年	S42	S43	S44	S45
	1967	1967	1967	1967
昭和16年	1			
昭和17年				
昭和18年		1	1	
昭和19年	2	1		
昭和20年	1	3	2	
昭和21年		3	4	1
昭和22年				5
昭和23年				8
昭和24年				
昭和25年				
昭和26年				
無回答		1		
合計	4	9	7	14

A-2

出身地

東三河	豊橋	2
	豊川	1
	新城	3
西三河	岡崎	4
	豊田	1
	幸田町	1
	西尾	1
	高浜	1
尾張	名古屋	2
	一宮	1
	小牧	2
知多	半田	1
静岡県	磐田市	2
	静岡市	1
岐阜県	各務原市	1
	谷汲町	1
	美濃市	1
三重県	海山町	1
長野県	木曽川市	1
	千曲市	1
	塩尻市	1
その他	福井県	1
	滋賀県	2
	山口県	1
合計		34

A-3

出身高校

東三河	国府	2
	新城	3
	豊橋市立	1
西三河	安城	1
	岡崎北	1
	岡崎	1
	西尾	1
名古屋	一宮	1
	小牧	2
	名古屋市立北	1
	惟信	1
尾張・	尾張高校	1
知多	日本福祉大学付属	1
静岡県	磐田南	2
	静岡工業	1
岐阜県	揖斐	1
	岐阜東	1
	武儀	1
三重県	尾鷲	1
長野県	桔梗ヶ原	1
	木曽西	1
	屋代	1
その他	岩国（山口）	1
	鯖江（福井）	1
	高島（滋賀）	1
	八日市（滋賀）	1
	無回答	3
合計		34

A-5

本学を知った理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
地元（愛知県内）	8
大学案内、進学資料	5
雑誌	1
高校で見た資料	2
高校教員（うち2人は社会科教員で卒業生）	5
兄（卒業生）	2
先輩	3
在学生（うち1人は親類）	2
知人	1
出身地ではないが豊橋で勤務していたため	1
薬師岳の遭難事故	1
愛大事件	1

A-7

入学理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
私大では授業料が安かった	10
自宅通学が可能、通学に便利	5
法律を学びたかったから	4
親類の勧め	1
親・兄弟（卒業生）の勧め	2
豊橋は生活費が安かった	1
高校教員（卒業生）の影響	1
優秀な教授陣	1
高名な法学者による講義が受けられる。	1
環境がよかった	1
中国語の授業の充実	1
県内私大の中では評価がまずまず	1
公務員志望のため	1
より良い就職のため	1
商社への就職希望のため	1
自分の成績から	2
合格した大学の中では学風が安心	1
他大学に落ちたから	6
国立大学を落ちたから	1
大卒の資格をとり公務員か教員を希望	1

A-9・10

授業料・生活費の工面 ※複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	32	30
2. 親戚・縁者から	0	1
3. 奨学金から	5	7
4. アルバイトから	4	11
5. 給料から	0	0
合計	41	49

表 1 系

B-1 学業の位置

	人数
学業が主	18
どちらかといえば学業	8
学業はまずまず	5
学業は従	1
無回答	2

B-2 興味

※複数回答

	人数
労働法	1
憲法	5
民法	5
刑法、刑事訴訟法	4
法哲学	1
法社会学	3
民法（家族法）	2
法律学全般	3
国際法	2
国際政治	1
公法	1

文学（久曾神先生）	1
哲学	1
社会科学概論	1
中国語	1
地政学（なくて残念）	1
なし	2
無回答	8

B-3 印象に残った先生

※複数回答

	人数
黒木三郎	5
木田純一	3
浜田 稔	3
神谷龍男	3
麦倉達生	3
柳沢英二郎	2
前田耕造	2
高桑純夫	2
夏目文雄	2
川島武宜	2
碧海純一	2
胡麻本篤一	1
山中康雄	1
酒井吉栄	1
三田高三郎	1
久曾神昇	1
鈴木泰山	1
本間忠彦	1
鈴木拓郎	1
今泉潤太郎	1
千葉孝夫	1
田中(刑法)	1
生物の先生（大内義郎か）	1
その他（学生課の浜田先生、 応援団の先生）	2
無回答	2

B-8 在学中の満足度

	人数
大いに満足	16
まずまず満足	11
まあまあ	4
あまり満足していない	0
まあまあ、あまり満足していない	1
無回答	2

B-9 学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	12
まずまず	9
まあまあ	4
あまり	6
無回答	3

B-4

ゼミ

	人数
黒木三郎(家族法、民法、法社会学)	7
木田純一（刑法）	5
浜田稔（民法）	5
前田耕三(民法)	3
柳沢英二郎（国際政治法）	2
神谷龍男（国際法）	2
胡麻本篤一（労働法）	2
三田高三郎(民事訴訟法)	1
酒井吉栄（憲法）	1
本間忠彦（手形・小切手法）	1
板倉ゼミ？	1

表 1 系

C-1

参加していたクラブ・サークル名	※複数回答あり
	人数
新聞会、新聞部、愛大新聞	1
応援団	1
剣道部	2
水上競技部	1
弓道部	1
少林寺拳法	1
ヨット部	1
軟式野球同好会	1
軟式テニス部	1
ゴルフ部	1
ワンダーフォーゲル部	1
美術部	1
ジャズ	1
男声合唱団	1
法学会、愛法会、法社会学研究会	8
中国語会話同好会	1

C-2

クラブ・サークル活動の参加状況

	人数
よく参加した	14
まずまず	5
あまり参加しなかった	9
なし、無回答	6

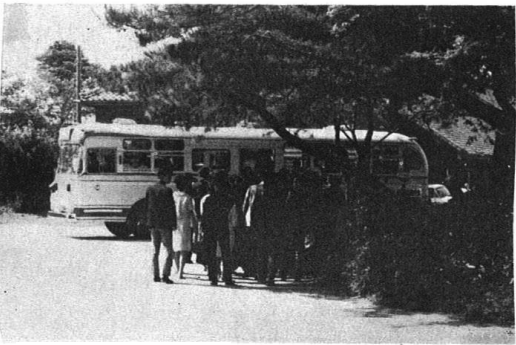


昭和 43 年当時の豊橋校舎の様子

C-4

クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	12
まずまず	2
まあまあ	3
あまりなかった	5
無回答	12



通学バス（豊橋）

学制改革により 1949(昭和 24)年に新制大学が認可され、従来の法経学部文学部が加わった。1952(昭和 27)年度までの 4 年間、旧制・新制が併存したが、1953 年度からは新制大学として、地域との関わりを一層深めていくことになる。大学院の法学研究科と経済学研究科が設立され(ともに 1953 年)、文学部にも史学科および哲学科が置かれ(1956 年および 58 年)、国文学の専攻科もできた(1956 年)。創設期のユニバーシティ・エクステンションに始まった名古屋地区への進出は、学部教養課程の昼間授業開始(1955 年)について、法経学部第 2 部(夜間)の設置となった(1956 年)。

表 1 系

D-1

就職活動をしたか

	人数
かなり積極的	4
やや積極的	3
普通に	14
あまりしない	6
全くしない	6
無回答	1

D-2

卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	3
やや厳しい	6
普通	14
あまり厳しくない	6
全く厳しくない	1
自分にはかなり厳しい、一般的には普通	1
無回答	3

D-6

就職活動でお世話になった方 ※複数回答あり

	人数
大学就職課	5
愛大卒業生	0
知人、友人	4
自力	13
就職先 (OB、知人)	0
ほか (教授、親、縁故など)	6
なし	1
無回答	7

D-7

愛大卒を意識したか

	人数
はい	12
少し	9
特になし	9
無回答	4

D-4

希望した分野への就職

	人数
はい	13
なんとか	8
意識せず	5
意に反して	2
無回答	6

D-5

就職先

名称	所在地	人数
三菱機器販売 (株)	島根県	1
東洋ラジエーター (株)	東京・滋賀県	1
(株)カワイ楽譜	東京都	1
(株)極東機械製作所	広島県	1
日通商事(株)太洋日産自動車販売部	東京都	1
大同製鋼(株)	名古屋市	1
富士化学工業(株)	東京都	1
日立化成工業(株)	東京都	1

(株)野田建設	岐阜県	1
鉄建建設	東京都	1
徳倉建設株式会社	名古屋市	1

名古屋鉄道	名古屋市	1
近江鉄道	彦根市	1

読売新聞 西部本社編集局	北九州市	1
--------------	------	---

岡崎信用金庫	岡崎市	1
協和銀行	東京都	1

愛知県警	愛知県	2
岡崎市役所	岡崎市	1
豊田市役所	豊田市	1
豊川市役所	豊川市	1
蒲郡市役所	蒲郡市	1
半田市役所	半田市	1
岐阜県勤労福祉センター	岐阜県	1
塩尻市役所	長野県	1

愛知県立高校教員	愛知県	2
佐織町立小学校教員	佐織町	1
神奈川県秦野市立大根小学校	神奈川県	1

経済法令研究会	東京都	1
---------	-----	---

表 1 系

D-8

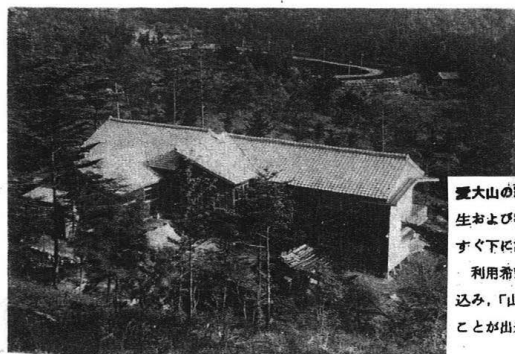
転職（各1）

名称	業種	所在地
イチハラビジネス研究所	経営コンサルタント（自営）	岐阜県
ガステックサービス（株）	LPガス販売	西尾市
東興産業(株)	輸入器機販売	名古屋市
大和ハウス工業(株)	営業	名古屋市
アオイ化学工業(株)	土木建築資材	広島県
(株)河合楽器製作所	企画・事務・教室運営	浜松市、東京都
(株)マーチ	玩具専門店	岐阜県
富加建設	建設業	岐阜県
医療法人宝美会	医療(介護含)業	豊川市
三栄ニチエム	内装材料	名古屋市

D-9

再就職（各1）

名称	業種	所在地
岐阜大学医学部附属病院		岐阜県
豊川市国際交流協会	団体	豊川市
竹中製作所（自営）	自動車関連	滋賀県東近江市
サーラE&L 名古屋	LPガス販売	西尾市
岐阜県東濃新興局	産業労働課	岐阜県多治見市
8の②で65才まで就業	事務職	
おのだ鍼灸院	鍼灸・マッサージ師	岡崎市
①(株)セノン	①警備	①東京都世田谷区
②(株)ダイワライフネクスト	②マンション管理	②東京都新宿区
さかい労働安全相談事務所（自営）	労務・安全事コンサルタント	小牧市の自宅
民間6社	顧問・参与	東三河・名古屋
定年後は子会社へ。また別会社の嘱託など。		



愛大山の家「清風荘」 愛知県北設楽郡津具村上津具に愛大山の家があり、本学学生および教職員のリクリエーションの便宜を計っています。夏は大変涼しく、冬はすぐ下に津具スケートリンクがあって可成りの人に利用されています。

利用希望者は、本学庶務課に「山の家利用申込書」と同時に利用料金を添えて申込み、「山の家利用券」の交付を受け、それを山の家の管理人に提出して利用することが出来ます。利用料金は階上が200円、階下が100円です。

E-2

東亜同文書院

	人数
よく知っている	12
少し知っている	18
知らない	3
無回答	1

E-3

愛大事件

	人数
よく知っている	8
少し知っている	16
知らない	8
忘れしました	1
無回答	1

E-4

母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	13
多少関心	12
普通	6
あまり関心ない	2
無回答	1

E-5

愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	8
2. 大学のホームページ	4
3. 「愛大通信」	10
4. さまざまな会合	2
5. 受験雑誌	1
6. 同窓生	7
7. 同窓会報	20
8. 愛大新聞	1
9. ほか	0
無回答	0

E-10

同窓会に参加しているか

	人数
はい	6
よく	0
時々	8
いいえ	20
無回答	0

E-14

人生をふりかえって

	人数
大いに満足	8
まずまず満足	15
普通	10
少し不満	0
大変不満足	0
無回答	1

E-15

満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	10
多少関係	8
普通	10
あまり関係ない	3
全くない	0
普通、あまり関係ない	1
無回答	2

第2章 名古屋校舎「法経学部 法学科」卒業生の場合

はじめに

それぞれの前文は前の各章で書き示したので、この章以下は回答を中心にみていく。この回答者の前年の1961年に名古屋校舎でも法学、経済の専門課程が設置され、名古屋校舎で教養、専門併せて4年間在学することが可能になった。

A. 生年、卒業年、出身校など

表2-A-1はこの対象時期に名古屋校舎法学科への入学生の属性の内、入学、卒業の各年次を示した。最古参の入学生は戦前の昭和17年生まれ。入学時は20歳を超え、戦後向学心に燃えていたのであろう。アンケートの回答時点では81歳。そのほかの入学生は戦後のベビーブームが始まる直前までの入学である。回答総数は24人と多くはないが貴重な回答を寄せてくれた。

表2-A-2は出身地を示し、表2-A-3は出身校を示した。校舎のある名古屋を中心に尾張、岐阜、三重に広がるが、豊橋校舎よりは隣接県だけに集まっている。それまでは専門課程は豊橋校舎だけだった影響が見られるように思われる。

表2-A-5は、愛知大学を知った理由である。身内や高校などの関係者からの情報で、通える地元の大学だなど、新たな専門課程の設置情報を知ったからであろう。

表2-A-7は、実際に入学した理由である。通学に便利、授業料の安さ、滑り止めなどの利便性があげられている一方、学びたい学問、校風、書院以来の伝統など、愛大の個性、学風に入学理由を挙げている点も目立っている。戦後の開設ながら、愛大の存在が知ら

れるようになってきたといえる。

表2-A-9・10は、授業料や生活費の工面についての回答で、授業料の安さはベースにありながら、アルバイトや奨学金で頑張る学生も一定数いたことがわかる。その点にも愛大生のパワーの根源があったように思われる。

B. 学生生活と満足度

(1) 学業のウェイト

表2-B-1は学業のウェイトについての回答である。全体には「学業を主にしていた」回答が40%と最も多く、「どちらかと言えば学業」という回答者を含むと、60%になる。これらの回答者は「とにかく学びたい」、「司法試験を目指したい」「アルバイトもせずに学んだ」、「公務員を希望していた」、「社会人経験から入学したので、知識や知見を得たかった」、図書館をフルに使い勉強、「3年生になって、ようやく世界の動きに関心を持ったから」、などの個別回答が見られた。一方、「学業はまずまず」派や「学業は従」派は、その多くが「アルバイトで学業を支え」たり、「バイトが中心に移行した」などが多く、その他「クラブ活動」や「学生運動」、「もっぱら旅行を楽しむ」など幅のある生活を中心にした回答も見られた。

表2-B-2は、学業の中での興味を持った分野についての回答である。

まず、法学では、民法をトップとして各分野に広がり関心が広がっていたことがわかる。教養課程の科目では、国文、世界史、日本史、中国語などの語学や体育、時事問題に

も関心が広がっており、教養課程科目が学生にとって意味を持っていたことがわかる。

それに関係して、表 2-B-3 は、「印象に残った先生たち」への回答である。やはり民法の黒木先生がトップで、民法系の先生たちが上位にあげられている一方、広く各分野へのちらばりもわかる。民法の黒木先生や山中先生たちは、法社会学という戦後の新しい分野を切り開いたパイオニアであり、漁村の漁場や山村での林野の入会関係の伊勢、志摩など現地での実態調査が座学だけとは違って、学生たちに新鮮な関心をもたらしたのであろう。

それは表 2-B-4 のゼミの選択先についても同様な傾向にあることがわかる。黒木ゼミでは民法、家族法、浜田ゼミの民法、鈴木ゼミでは先生が優れた研究者であり、日本史を踏まえ、貴重な戦時下の厳しい体験も語った。川崎ゼミの国際法、柳沢ゼミのベトナム戦争、酒井ゼミは学生との合宿対話、山中ゼミのわかりやすい債権法、などが注目された。

(2) 卒業論文

それらとの関係で、次に卒論研究のテーマの回答を示した。

1967 年

「家族制度論」、「家族制度復活論」、「金分奏属性の重要性」、「教育における理論的諸問題」、「ベトナム戦争」

1968 年

「国際法と日本との関係」、「貸担保責任、故意、過失、建物などの移転発生」、「自衛隊について」

1969 年

「東春日井郡 48 ケ町村地租改正反対

運動」、「復帰前の沖縄の労働運動」、「民法第 5 編法廷婚主義と事実婚の法的保護」、「中華人民共和国刑法総則の和訳」、「アルゼンチン刑法の和訳」、「土地取引」

1970 年

「基本的人権に関する一考察」、「中高年の就職状況」、「人権の 2 大制約原理」、「意思表示の錯誤」(学会賞受賞)

(3) 先生との交流

「先生との交流」については、以下の回答あり。

1966 年

「サークル活動で」、「黒木ゼミの同窓会へ 5~10 年間出席した」、「黒木先生とはフィールドでの実態調査や先生宅での懇親で大きな影響あり。平成 12 年から 3 年間母校愛大で教員採用試験講座の講師」も担当させてもらった」

1967 年

「卒業後、何度も裁判所でお会いした」、「授業のみ」、「なし」

1968 年

「奥山方広寺での合宿」、「ゼミ中心の討論」、「ない」2 件

1969 年

「少人数で発表回数が多く、大変でした。全員先生を尊敬し、卒業後も交流した」、「大林、野村両先生、生協からの理事長をされていた」、「卒論テーマを相談し、テーマも進められ、学会賞をいただいた」、「ない」2 件

1970 年

「卒業時に先生宅を訪問し、畳の上まで本が積まれていてびっくりした」、

「ゼミ中心」

以上、回答分では、先生たちとのつながりは多様な形で充実していたように思われる。ただし、「ない」というケースも一定数はあったようだ。そんな場合でもゼミではつながっていたようだ。

(4) 図書館利用

1967 年

「もっぱら新聞。卒論時にはよく利用」、
「鶴舞図書館で歴史資料をよく読んだ」、
「あまり、時に」2 件

1968 年

「好きな本を借りた」、「利用していた」、
「時に」、「ない」2 件

1969 年

「比較的活用。名古屋校舎の図書館は狭く、蔵書も少なかったように思う」、
「本を買う金がなかったので、よく利用した」、「三重県内の図書館を利用した」、
「公共の図書館のほうを利用した」、
「あまりない」2 件

1970 年

「憲法ゼミで、テーマが決まると関連図書を何十冊も読んだ」、「卒論でよく利用した」、「ほとんど利用していない」

この時期の名古屋校舎の図書館は、その直前まで学部でも名古屋校舎が前期 2 年間であったため、図書館の規模は小さかったが、そんな中で利用者のレベルは大きな差があったようだ。

(5) 在学中の満足度と人生への影響

表 2-B-8 は在学中の満足度の回答であ

る。

①大いに満足は全体の 28%だが、②まずまず満足 を加えると 84%を占める。

1967 年

[大いに満足]

「素晴らしい先生方や先輩との交流がふかまったから」、「知識が増加したから」

[まずまず満足]

「高校だけだったら味わえない友人関係の人脈ができた」、「バトミントンクラブで楽しく充実」

[まあまあ満足]

「軽音楽に入りたかったが、バイトが多忙でできなかった」、

1968 年

[大いに満足]

「大学生活を自由に謳歌、満喫した」、
「法律の知識を十分に吸収できた」、
「生協活動を通じて友人が沢山できた」

[まずまず満足]

「教授が熱心だった」、「新しいことに触れた」、「クラブ活動メンバーや友人との交流」無記入複数

1969 年

[大いに満足]

「家の都合で商業高校へ進学したとき、親が大学進学も許してくれ、本学へ進学。その過程で、法律や簿記も学び、行政書士と宅地建物取引主任の資格も取り、それを生かす形で関係機関に就職し、活躍できた。学生時代に身につけた姿勢が大いに役にたった」

[まずまず満足]

無記入 2 件

1970 年

[大いに満足]

「企業出総務を経験したが、不良債権の回収を担当し、企業の中で社内講師となり、新入社員、中堅社員、新任課長などの研修講師を長年務めることができた」

[まずまず満足]

「公務員になり、行政法、民法の知識が役立った」、「地方公務員は法律、条令に沿って公務を遂行するのに役立った」

[あまり満足していない]

「社会へ出てから学問が活かされたことはほとんどない」

表 2-B-9 「学業の成果が人生に与えた影響」

それらをまとめると、次のような表になる。それによると、「大いに影響」は 11 人（全体の 44%）、まずまずの 8 人を加えると、全体の 76% が与えた影響はあったとしている。

C. クラブ、サークル活動

次はクラブ、サークルの活動についてである。

表 2-C-2 は、その参加、加入状況をまとめたものである。全体としては、それらのレベルは分散的で、無回答は参加、加入していないとみなすと、半数近くがそれに該当する。この時期前はクラブ、サークルは黎明期から離陸期に入り、クラブ、サークルは増加傾向にあり、学生たちにも余裕が出てきた時期だといえる。この時期、過半数が何らかの形でクラブ、サークルに参加するようになり、発展の兆しが見え始めたといえる。

1967 年

A. [よく参加した活動理由]

「愛知学生選手権ダブルスに優勝（バドミントン）」、「弁論活動」

B. [まずまず参加した活動理由]

「他の女子短大と合宿して楽しかった」（卓球）、「編集、広告取り、記事執筆をした」（新聞部）、「他大学と時々合同演奏会を行った」（ギター）

1968 年

A. [よく参加した活動理由]

「無記」（ブルースターズ）

B. [まずまず参加した活動理由]

「馬の世話とか競技会への参加」（馬術）、「ダンス競技中心だが、パーティが中心になっていった」（ダンス）

1969 年

B. [まずまず参加した活動理由]

「油絵の経験、自由な絵」（美術）、「山歩きに参加」（ワンゲル）

1970 年

A. [よく参加した活動理由]

「男性のみだったのでパートナー校から女性を招き、段数パーティの企画、運営を行った」

表 2-C-1 は、どのようなクラブ、サークルがあったかを回答 C から一覧にしてみたものである。すでに表 2-C-2 でその概況はお分かりと思う。ここでは体育会系 7 クラブ・サークル、文科系 6 クラブ・サークルが計上されている

質問 C-3 より、以上のような部活で得たものは、

1967 年

「人間関係がうまくできた」（卓球）、「自信を持てた」（弁論）、「母校愛と友

人を得た」(バドミントン)、「人脈の増加」(新聞部)

1968 年

「人とのつながり」(馬術)、「仲間が多く気分が晴れた」(ダンス)

1969 年

「友達ができ、展覧会へ行くようになった」(美術)、「女子がいなかったのは残念」(新聞)

1970 年

「マネジャーとしてマネジメントを学んだ」、ほかに、通学に時間がかかり、残念ながら部活に参加できなかったという回答もあった。

C-4 クラブ、サークル活動の影響

これについては、表 2-C-4 に示した。ほぼ半数が無回答なので、クラブ、サークルにははいていなかったと思われる。一方、それに入っていたグループは、それぞれのかかり度合いのランクに分かれている。非加入者も含め、色々個人的な状況が影響したものと思われる。回答から見ると、クラブ、サークルにかかわったグループほど人生への影響も強かったといえそうである。

C-5 クラブ、サークルの人生への影響

1967 年

「全日本シニア 70～74 歳で第 3 位と現在も継続中」(バドミントン)、「最近まで関係する先輩、後輩たちと年 1 回飲み会を」(新聞会)、「音楽が人生に豊かな潤いを与えてくれた」

1968 年

「日本の馬術界での立ち位置が確立された」、「日本のトップを目指した」、「対

人関係がスムーズに」(馬術部)

「自信ができ、大きなホールでもこなせた」(ダンス)

1969 年

「今も絵筆をとっている」(美術)、「あまり熱心ではない」(ワンダーフォーゲル)

1970 年

「企画、運営力」

回答者の多くは、その後の人生にも十分に影響しているように思われる。

C-6 社会参加への状況

1967 年 「児童養護施設でのボランティア」(バドミントン)、「クラブはできなかったが就職後に音楽活動開始」

1968 年

「多くの人と関係ができた」(馬術)(ダンス)

D. 就業状況と人生

次にいよいよ学卒となって、社会へ出ていったあとの軌跡である。

表 2-D-1 は、卒業時の就職活動についての回答を示している。前章でもふれたように、この時期は高度経済成長期のまっただ中であり、就職は特に選ばない限り、自由に選択できた。この表でも「普通」との回答が最も多く、また縁故による就職も多く、ほとんど就職活動をしなかった卒業生も多かった。そのような中で「積極的に取り組んだ」のは、当時多かった「縁故先」がなかったり、縁故とはかわりない、公務員志望、「早く決めてしまいたい」、「女子の就職口は少なかったから」という回答者であった。いっぱ

う、ほとんど就職活動をしなかったのは、「好景気なので、どんな仕事に就くかも考えていなかった」、「父が就職先を確保してくれていた」、「アルバイト先から声がかかった」などのタイプが多い。逆に「就職活動をはっきりとしなかった」のは、「大学院進学」、「体に障害があり」（後で就職決定）、「卒論に夢中になり、応募に遅れたが2次で銀行にセーフ」、「公務員試験準備」（数件）などがあげられている。

表2-D-2の就職環境を見ると、表2-D-1と関連し、大企業、司法書士、教員、営業、商社、事務、物流、自動車、新聞印刷、公益団体、生協、銀行、農業の継承など、幅広い希望職種とも関連している。

表2-D-4は、希望職種への就職ができたかどうかの回答である。それによると「はい」と「何とか」を合わせると、ほぼ70%の卒業生が希望通りに就職できたことがわかる。「希望通りでない」卒業生は10%台で、募集がなかったミスマッチも影響した。

その際、就職でお世話になった人を表2-D-6で見ると、「自力」が半分を占め、「大学就職課」をかなり上回っている。これもゼミの先生たちの斡旋であり、当時は今日とは異なり、大学就職課の斡旋は微力であった。ゼミの斡旋も含め縁故が多かったことがわかる。

また、就職に際し、「愛知大学の卒業生であることを意識したかについては、表2-D-7に示すようにほぼ半々であった。すでにこの時期、各企業には愛大卒生が就職しており、またいろいろな大学からの出身者もいる職場もあり、意識もした卒業生もいた。公務員では愛知県庁は愛大卒生が多く、名古屋市役所には名大卒生が多かった。一方、意

識しない卒業生も半分を占めた。大卒がまだ少ない当時、初の愛大生の就職というケースや、出身校で評価は決まるのではなく、仕事をキッチリできるかどうかだという冷静な回答も見られる。

そして就職先の回答を表2-D-5①・②、転職先を表2-D-8、再就職先を表2-D-9に示した。

まず、表D-5①は民間企業で、メーカー、自動車関連、金融、商社、運輸、観光などと幅広い。経済成長期の初期の勢いが見られる業種がならんでいる。表D-5②は、公務員関係の職場で、県庁や市役所、教員など法学部卒生の特徴が出ている。回答数が限られているため、これで全貌がわかるわけではないが、その片鱗をうかがうことはできる。

次いで表D-8は、転職先で、落ち着き先でもある。当初の就職先よりさらに経済成長が進み、1973年のオイルショック後の職場であり、建設系が増加し、大型商業施設の登場など、2、3次産業のダイナミックな変化への表れを確認でき、愛大法学卒業生がそれらの先端産業も担い始めたことがうかがわれる。

そして、表D-9、定年後の再雇用の就職先であり、60歳代以上の職場になる。すべての卒業生が再雇用に臨んだわけではないが、それまでの仕事の実績が評価されて雇用される場合も多いことからすれば、愛大卒生が高齢化社会の進行の中で、それまでの実績が評価されたということもできる。その多くは、実務のマネジメント分野の職場が中心で、メーカーなどの現業はみられない。また、大学の教員もみられ、専門職で経験を生かしている卒業生もいる。

最後に、職場での愛大生の評価への回答

である。

1967 年

「ボーイッシュで、男らしい」、「元気がよい」、「国公私立と比較しても遜色ない」、「バイタリテイに富んでいる」、「芯が強い」、「東京の一流どころと比べれば二流どころだが、仕事は実力がモノをいう」、「就職先、取引先で優秀なひとが多かった」、「中庸でバランスの取れた人が多いと評価」、「あまり意識したことなかった」

1968 年

「真面目で普通に仕事をこなしている。先輩が現町長。父も町長経験者」、「職場は有名大学ばかりだが、それは問題にならない」、「派閥は作らず、おとなしい」、「先輩が多いし、動きやすいし、努力家が多い」、「解が少ない」

1969 年

「誠実に仕事に取り組むだけでなく、自己主張もできる人が多い」、「真面目、頑張っている」、「副知事まで出世した方がおり、評価は高い」、「真面目に努力している」

1970 年

「名古屋市役所では、愛大卒生の評価は高いとは思わない」、「優秀な人がいる。副市長や市の幹部になっている」、「筑波大学大学院で 2 年間学んだ時、東大、京大、阪大、北大卒業生と一緒に経済学を学んだが、彼らと対等に学べました」

では、愛大生の特徴をどう見るかの回答は以下の通り。

1967 年

「何事も積極的なところがよい」、「野武士的であったが、最近ではその良さがなくなっている」、「自分の考えがしっかりしている」、「自由な校風をもちあわせている」、「勤勉、堅実な人が多かったと思う」、「中庸なバランスの取れている人が多いと思う」、「よくわからない」

1968 年

「真面目」、「真面目で控えめ」、「バイタリテイと幅広い気質」、「なし」

1969 年「真面目、意欲的」、「真面目、

「努力された方は出世されていた」、「特に意識はしていない」

1970 年

「むづかしい質問ですが、仲間意識の絆は他大学に比べて強いようです」、「わかりません」

E. 愛知大学の卒業生として

(1) 愛知大学設立趣旨の回答者への影響

この点については、過半数の 16 人が、以下のようにそれをかなり積極的に受け止めた回答を寄せている。

1967 年

「教育はもちろん、地域社会での諸活動(連合自治会長、社会福祉協議会長など)に取り組む際の基底になっていた」、「正義感が強くなった」、「フィロソフィアのもと、自由な発想や考え方」、「正義、正論がわかる人には信用された」、「知を愛し、真理を探究する理念は素晴らしい」

1968 年

「国際人としての生き方」、「着実に威張らず、地味にこなすことができた」、

「すべての面で自由があり、自分で考えるようになった」

1969 年

「仕事を取り組むうえで、色々な幅広い知識、見識を広げ、色々な角度から考え、行動する思考を大切にしたい」、「一生大切にしてきた」、「憲法の規定、理念が大学教育ではぐくまれた」

1970 年

「平和を探究することはよいこと」、「愛知県にあるから愛知大学ではなく、知(ロゴス)を愛するからだと思っていきます」、「29歳の時に、ドイツのミュンヘン市の都市計画を調査した。大学1年の時に習ったドイツ語だけで話をし、東京で発表した。第2外国語は大学で基礎だけ学べば、社会人になったときには、さらに学習しやすくなることを発見した」

(2) 東亜同文書院の認知について

愛知大学は戦後の旧制大学として豊橋市に開設されたが、開設にあたっては中国上海にあった東亜同文書院の存在がベースになっている。その点の認識の回答を以下に示す。まず、全体の認知を表2-E-2に示した。それによるとほとんどが認知しているが、「少し知っている」が多数を占めている。在学していた書院生が卒業した後、その認知レベルが低下しつつあることがわかる。では、具体的な情報源はどうであろうかを以下に示す。

1967 年

「入学前に先生や友達から聞いていた」、「同窓会報から知った」、「高校の先生や先輩から知った」、「愛大新聞会

の過去の資料より知った」、「愛大発行の資料より」、「入学案内より」複数3件。

『東亜同文書院大学と愛知大学』の小冊子より」

1968 年

「自分の祖父の兄弟が東亜同文書院に入学していたと聞いた」、「書院入学の先輩が会社にいた」

1969 年

「愛大の大学史から」、「在学時代、大学と自治会の共通理念であった」、「愛大の設立史から」、「愛大入学後、同年生から」2件

1970 年

「学生便覧や同窓会報から」、「大学から届いた文書から」、「かつて中日新聞に掲載されていたこともあり、図書館の資料からも」

以上、やはり入学年の早い方が情報を得ているようだが、大学当局の発信力の弱さが見えてくる。

(3) 「愛大事件」の認知について

次は1952年に発生した「愛大事件」の認知レベルである。表2-E-3はそれを示している。前項の東亜同文書院の認知と同様な傾向を示しているが、この時期、本間学長の学生への弁護がつづいていたことからすれば、関心がやや低下したともいえる。その具体的な認知を次に見てみる。

1967 年

「立派な学生たちだった」、「愛知大学新聞」に自分の意見や事実関係を掲載した」、「学問は自由であるべき。正義のために権力と戦った学生、そして学

生を弁護された本間先生の信念を感じる」

1969 年

「『大学自治を守る』先生の行動。大学の生命を守るため先頭に立たれた先生たちに敬服する」、「戦後も戦前の特高警察のような卑劣な監視がされていた。大学と学生が一致して反撃していた。本間学長は大学を愛した。大学の自治を守り、国家権力を排除する気骨のある先生だと尊敬する」、「反権力思想が強いと思いました」、「大学としてのポリシー」

1970 年

「学内に警察官が入ってきて、大学の自治が脅かされ、あつてはならない事件だと考えている」、「国家権力が大学へ侵入してきた」

以上、本間先生への尊敬、共感が強く感じられる。回答の中には、この事件は柔道部が起したものだという誤解や、この事件の意味を問う回答も見られた。

(4) 母校愛大への関心とその理由

ここでは次に卒業生の「母校愛大」への関心についての回答をしてみる。それをまとめて示したのが、表 2-E-4 である。この回答から見ると、全員が関心を寄せており、特に強い関心を 40%の卒業生が持っていることがわかる。その理由を卒業年次別に以下に示す。

1967 年

「就職先に『愛友会』という OB 会という組織がある」、「孫が二人愛大に在学中である」、「出身母校だから」、「愛

大と後輩の活躍に関心がある」、「愛大に誇りを持っている」、「愛大の行く末と発展に関心がある」、「名古屋周辺地域ではもっとも立地が良く、卒業生も多くなった」

1968 年

「発展してほしい」複数、「同窓会、多くの大会や会合を期待」、「私の子供や甥、姪のだれも入学できないほどの学力の高い大学になった」、「名古屋校舎に期待」

1969 年

「私の人生の原点だから」、「愛知大学で学んだのだから」複数、「愛知大学の母校としての誇りは強い。しかし、大学は◎◎的（ママ）と考えている。よりよい大学として発展してほしいが、卒業後は各々の過ごし方が大切だ」

1970 年

「国会議員、地方の首長、県会議員、社長などの出身校が愛大であるのがうれしいし、誇れる」、「母校として、中部地域での存在感をもっと発揮してほしい」、「入学時は名古屋市内の私立大学では、愛大のレベルは高かったが、今は他大学とほぼ同レベルになってしまい、残念だ」

以上、卒業生からは、ほかの学科の卒業生も含め、真に愛大の発展を望む声強い。それはそれに対応しきれていない近年の愛大側への配慮と応援歌のようにも読める。

(5) 愛大情報の入手源

では、卒業生たちは愛大情報をどのような方法で入手しているのだろうか。表 2-

E-5 はその回答をまとめたものである。

それによると、最も多いのは「同窓会報」である。これは卒業生にはほぼ年 1 回配布される確実性の高い情報誌であるからであろう。それゆえに情報の内容、量をめぐって後述するように要望は強い。次いで「テレビ、新聞」で、教職員経営による愛大にとっては弱い部分であり、卒業生からの教職員発信への期待感は強い。近年は高齢者の方々も使用するようになったスマホによる「大学のホームページ」のアクセスは多くない。ここは未開拓の分野であり、早急な対応が必要であろう。また、同窓会を必ずしもカバーしていない「愛大通信」がその次あたりに並ぶが、「愛大通信」をスマホでも見られるようにすることも可能であろう。

では、法学科の卒業生は、どんな情報を求めているかである。それを次に示す。

1967 年

「卒業生たちの就職情報」、「後輩の活躍情報」、「活躍している卒業生や学生諸君のサークル」、「教員の研究や活躍情報」、「愛知大学がなにを目指すかの将来像」、「海外支部の活動状況」

1968 年

「愛大のレベルアップ」、「同窓生の社会活動状況を」、「野球部などの再度の活動を」

1969 年

「愛知大学の研究成果を社会へ発信してほしい」、「エクステンションの復活を」、「学生の動向」、「就職先情報」、「今のままでも」

1970 年

「学部学科専攻の構成などの情報」、「大学院も」、「国会議員、首長などの紹

介」、「学部 3、4 年生の就職にも参考になる卒業生の活躍情報を」、「三重県に」と愛知大学の情報は新聞上にも掲載されない。そこで東海版などの利用で、広い範囲への情報発信の工夫を」

以上、色々参考になる提案があるように思われる。

(6) 大学紛争について

この時期の卒業生の前には 1960 年代前半に日米安全保障条約改定をめぐる紛争があり、大学だけでなく広く国民を巻き込む紛争があった。それは次の 1970 年代に生じる本格的な大学紛争への序曲的なところもあった。それについて、①その契機、②それへの認識、③その影響への各回答である。

①その契機のキーワード

1967 年

「安保反対」、「若者の情熱」、「学費問題と社会情勢」、「学費値上げ」、「学生自治会」、「他の大学からの影響」、「なし」、「知らなかった」、「わからない」複数

1968 年

「安保問題」、「一部の学生」、「平和と民主主義の会の友人」、「東京や他の大学との連動」、「ベトナム戦争」

1969 年

「安保」、「過激派学生の介入」、「大学のマスプロ化、授業料値上げなどの説明不十分、全共闘との関連は不明」、「よく理解できず」複数。

1970 年

「学園内のセクト争い。他大学からの影響」、「当時の社会、経済状況」、「無関心」

②それへの認識のキーワード

1967 年

「自分の人生観、教育観に合わないから、あまり関心なし」、「賛成」、「クラスに運動家がいたが、仲良くやっていた」、「応援団が新聞会へなぐりこんだようだ」、「全く覚えていない」

1968 年

「若者の特権」、「知らない」複数

1969 年

「大学人が方向性でまとまっていなかった。自分は自治会の自主性は大切だと思うが、学園破壊や閉鎖などには賛成しない」、「過激派学生の学生運動への分断行為」、「テレビや新聞報道で」、「覚えていない」

1970 年

「テレビ、新聞で見たし、学生集会にも参加した」、「世の流れ」複数、「参加しなかった」

③ その影響のキーワード

1967 年

「影響はなかった」、回答者全員。

1968 年卒

「あまり感じなかったように思う」複数

1969 年

「わたしの在学期中はまだ大きな紛争前だったため、大きな影響はなかった」、「個人的にはなかったが、自治会の分裂したのが悲しかった」、「特にない」複数

1970 年

「ノンポリ学生だったので、社会生活への影響はなかった。」、「影響なし」、他の回答者も同じ。

以上、学園紛争については、1970 年代に入ってから全国の大学と同様に、動きがあったが、愛大では授業料値上げ問題から火が付いたので、この時期の在学中は嵐の前の静けさというかほぼ平穏であったといえる。そのため、回答者にも戸惑いがあり、1960 年代の安保闘争についてと思われる回答もあった。質問者側の発問の仕方に問題があった点お詫びしたい。ただ、1970 年代に入ってから大学の紛争はここでの回答者にとっては、卒業後のことだったが、それなりに外からの眼で客観的に回答していただけたと感謝している。「関心がなかった」、「影響がなかった」という回答が多いのはそのような環境のせいだとも考えている。

(7) 同窓会とのつながり

次に、卒業生を中心にした組織である同窓会についてのアンケートの回答である。愛知大学の同窓会は会員の多さと、その歴史の長さと、東亜同文書院同窓会との合流もあり、自主的でユニークな組織でもある。各界での卒業生の活躍を擁し、その柔軟なまともりは東海地方ではトップクラスであり、今後のさらなる発展が期待されている一方、会費納入の地域差の克服など、その在り方の議論も活発である。

まず、同窓会への参加状況の頻度別回答を表 2-E-7 に示した。それによると、無回答者 1 人を除くと、時々以上は参加していることがわかるが、そのうちでは「時々参加」が 60%以上を占めている。そして「よく参加している」以上の回答は、30%以上を占めていて、これらの同窓会会員が会を実質的に盛り上げ、サポートしているということであろう。

そこで①参加理由、②同窓会の魅力アップ方法、などについての回答をしてみる。

①同窓会への参加理由についての回答

1967 年

「1 学年上に同じ高校の先輩がおり、同輩 7 人が同じクラスにいた」、「おなじような職種の間と情報交換」、「10 年前まで名古屋支部会長を務めた」、「全国大会 2 回、地方大会 1 回参加したのみ。後輩とのつながりなし。ゼミの同級生との同窓会が中心」、「参加できないのは、転勤、魅力不足、知人がいないため」

1968 年

「組織の一員だから」、「職場に同窓生が 10 人いたため」、「参加のチャンスはなかったが、表彰はされた」

1969 年

「尾張支部ができた時のみ参加」、「ゼミやサークルの仲間との付き合いが中心」、「同級生との付き合いが中心」、「関心がない」複数

1970 年

「最近はコロナで参加できなかったが、開催されたら参加したい」、「関心がない」

②同窓会の魅力アップについての回答

1967 年

「同じゼミで研究した仲間たちとの交流会を契機に、良さを見つけていきたい」、「特にない」

1968 年

「社会的に運動する必要あり」、「コロナ終了後、再度 PR して野球、柔道などのベストファイブを作り強化したい」

1969 年

「社会の成功者や有名になった人ばかりの広報、報道ではなく、地域や職場で地道に努力している人にも光を。それが本学の誇りだ」、「特にない」

1970 年

「特にない」

(8) 大学への要望、提案

愛知大学卒業生としては、これまでのアンケートでも、母校意識が強く、母校を愛するがゆえに、強くあるいは遠慮がちにその熱い思いを抱いてきたように見える。今回のこのアンケートでもその思いを伝えてもらうべく回答を期待した。以下、を紹介する。

1967 年

「国家試験合格者多数を出し、全国的に名前を知らしめていると思う。また、名古屋駅近くにキャンパスができて、通学に至便となったため、今後学生数が増加すると思う。」、「豊橋校舎を大切にしてほしい。大学の雰囲気は十分ある」、「自分の大学時代に比べ、ややスマート化した感がある」、「愛大の記事とかフェイスブックの愛大記事が気になる」、「立派になったと思う」、「卒業から半世紀、2 学部新設、法学部に司法と行政コースが置かれ、女子学生も増え、施設充実、海外に同窓会支部の発足などなど、建学の精神は不変だけど、時代の流れを感じます」、「発展を遂げていると思います」

1968 年

「発展していると思う。私大では一番」、「書きづらいが、学究は伸びたが、勉学、広い心、体、スポーツなど翼が欲しい」

1969 年

「時代は移るので大学の評価も変わる。本学の伝統である「中国」の研究を進めてほしい。今や東大や慶大の方が目立ちます」、「優秀な学生が多い」

1970 年

「愛大の存在感が感じられない。他大学は名古屋市役所の北側やナゴヤドームの北側の広い敷地に次々と新しいキャンパスを築いている。X 大は文系理系の拡充をはかっているし、Y 大は薬学創設を図っている中で、愛大の立ち位置はあいまいだ。入学当時は Z 大の次あたりのレベルだったのに、今や他大学などに追い越されそう。そんな他大学とは違う都心中心に広がる地区からの優秀な生徒をターゲットにすべきだ」、「名古屋駅付近のキャンパスは立派だけれど、豊橋校舎のような哲学の道や緑地がない」

(9) 後輩の学生たちへ伝えたいこと

今回の卒業生の多くは、仕事中心の社会生活を終え、これまでの人生を振り返ることの立場にある。それだけに、後輩たちへの伝授したいことも多いと思う。ここではそれを開陳してもらった。

1967 年

「最終的には自己判断だ」、「自分は愛大で学びました」と気楽に切り出せるようにしてほしい」、「よく勉強して誇りを持てる人に」、「女性が社会進出する時代。女子学生が増えました。愛大生のより広い分野での活躍を期待しています」

「中庸のバランスを大切に進んでほし

い」

1968 年

「社会でいっぱい活躍している愛大卒生がいます」、「努力あるのみ」、「地方公共団体（愛知県、名古屋市など）での愛大卒生が沢山います。誇りを持ってください」、「人間性豊かに、変化に対応できるように自分を磨く」

1969 年

「理論的に、事実をもとに、平和、独立心、など」、「実力をつけること」

1970 年卒

「去年、コロナ禍に絡んで、給付金詐欺を後輩が起こした。マスメディアはこぞって、愛大生、愛大生と報道した。恥ずかしいこと。昨今、幼稚さが蔓延、大学は学生に良し悪しを教えるべきだ」、「「知を愛すること」をベースに、学業と自分を大切に」

以上。卒業生の眼は愛大を愛するがゆえに、厳しい目もある。そこが卒業生の良いところである。

(10) 愛知大学から得たもの

最後に、愛知大学から得たものは何であったかについての回答である。年次別に示す。

1967 年

「自由」、「クラブ活動。後悔無し」、「仲間との共同研究の必要性」「座右の銘：根性」、「知識」、「人生塞翁が馬」、「原論の自由」、「「愛知大学」という名称がよい」、「曲学阿世（真理をねじ曲げて世間や時勢にこびへつらい、人気を得ようとする）人にはなりたくない」、「大学教

育を通して社会や世界の事柄に目を向けてもらったと思っています。座右の銘は「有言実行」

1968 年

「努力は天才に勝つ」、「多くの大先生、大先輩との出会い」「物事の見方、考えかた」

1969 年

「幅広い視野から地道に努めること」、「団結、団結とは相手をおもいやることが原点」、「真の法知を愛する」、「法学的なものの考えかた」

1970 年

「今でも飲み会で集まれる仲間が 10 人近くいること」、「自由」、「不良債権の回収」については企業内で講師をとめたが、これも愛大で法学を学んだことでかなえられた」

(1 1) 刊行物など

1967 年

榊原剛『マイヒストリー わが人生の「クォーター」』(B5 版、251 ページ、自費出版)

1968 年

仙石明『NPO 法人にて、愛知万博協賛 (モリゾーキッコロの名刺)。大会事務局長全国入選者』刊行発刊。

1969 年

加藤憲『僕の青春生協運動』

(1 2) 人生の満足度と愛大卒業との関係

今回のアンケートの最後は、人生の満足度と、愛大卒業生との関係を問うたものである。これについては、卒業生のあくまで

個々の主観であり、そのまま客観化できるものではないが、その自己判断をしていただいた。

まず表 2-E-14 は、「人生を振り返って」として、大雑把に 5 段階に分けた。回答者全員が回答してくれた。それによると「まずまず満足以上」が全体の 80% を占めており、回答者のほとんどがほぼ 70 年の人生に満足感を得たといえる。70 年間には様々なことが有ったに違いないが、それらの経験や体験を吸収し、それらを乗り越えての達成感がにじみ出ていると受け取りたい。「少し不満」の方もおられるが、まだやり残したことがあるということであろう。まだ人生が終わったわけではありません。

次いで表 2-E-15 は、それらの達成感と愛大卒業生としての関係についての回答である。それも 5 段階に分けた。それによると、「多少関係がある」以上とする関係が全体のほぼ 50% である。「普通」とする段階が最も多く 30% 台をしめ、大卒の資格取得を目指したということであろう。全体としてはまずまずであろうが、一方、関係性がないという回答は「あまり関係がない」というレベルの 2 名の回答にとどまった。それがなぜであるかは不明であるが、愛大が今後大学の在り方を検討する際には、少し考慮する点でもあろう。

(1 3) 愛大時代の思い出

(次ページ参照)

名古屋校舎「法経学部 法学科」 (13) 思い出

〈思い出〉

1967

弁論活動（サークル活動）

クラブ活動につきま
す。（二番目はゼミ
合宿）

中学校、高校、愛大
と同級生であった友人
と普通列車で日本
列島を一周したことが
思い出に残っている。
彼は裁判所退職後大
学で教鞭をとり、公
立小中学校勤務後大
学で教鞭をとった。
機会があれば互いを
語り合いたと思うが、
馬齢を重ね、身体
の自由もきかなくな
った今日では難しく
なりました。

やくし岳そうなん。
小学校6年のときの
同級生が亡くなった
こと。
特になし（但し、最
も残念なことの一つ
は、校歌を歌う機
会もなく、結局は覚
えることもなく卒業
してしまった。故に
なつかしさ全くな
い。）

車道の教室に通った4
年間の全てが私の大
切な思い出です。建
て替え前の…。

1968

豊橋の学食は50円均
一でカレーライスと
ハヤシライスと定食
（アジフライかちく
わの揚げ物）でし
た。豊橋駅前にマル
ブツ百貨店があっ
た。名鉄のパノラマ
カーで通学した記憶
がなつかしいです。

友人が良い関係を
作ってくれた。

せんえつですが、愛
知同窓会犬山市部創
設の発起人。一部二
部合わせても卒業生
300名余、愛知県の
テッペンの大山支部
が出来た。今になっ
て困難にぶつかって
〇〇感心していま
す。

76才になると漢字が
書けない！

1969

何よりもゼミナール
が少人数で教授との
ふれあいの深かった
こと。今もゼミ生の
つきあいがある。

愛大（名）生協の設
立運動

あまりに遠い昔にな
り、ほとんど思い出
せない。スミマセン

他大学の同級生（4
人）と旅行したり、
ボーリング、パチン
コ、映画等して楽し
かった。

グランドもない校舎
（豊橋校舎と異な
り）で過ごしたが、
ゼミでは大いに学習
し、討議する技術を
学んだ。一方、社交
ダンスクラブでは、
マネジャー的立場か
ら、マネジメントを
身につけた。

・4年生の時に卒業論
文を集中的に取り組
み、論文のまとめ
方、書き方が社会人
になってからの投稿
論文に役立ちまし
た。・ドイツ語は1年
間楽しく学びました
が、ドイツに行きド
イツ語だけで市庁舎
で会話しました。英
語と共に得意とする
外国語を学生時代に
学んでおくべきだと
思います。

1970

友達と海へ行った
り、スキーに行っ
たり、我が市のスケ
ートリンクで滑っ
たり、放課後に（授業
中にも）頻繁に麻雀
をやったりしたこと
が楽しい思い出とし
て残っている。（勉
強を懸命に行った記
憶はなし）（座右の
銘：天網恢恢疎にし
て漏らさず）

表 2 系

A-1

法経学部法学科 名古屋校舎（昭和42～45年卒）

卒業年 出生	S42 1967	S43 1968	S44 1969	S45 1970
昭和15年				
昭和16年				
昭和17年	2			
昭和18年			1	
昭和19年	5	1		
昭和20年	2	5		
昭和21年				
昭和22年			5	3
昭和23年				1
昭和24年				
昭和25年				
未回答				
計	9	6	6	4

A-9・10

授業料・生活費の工面 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	20	25
2. 親戚・縁者から		
3. 奨学金から	4	1
4. アルバイトから	5	6
5. 給料から		
5. ほか	1	
合計	30	32

A-5 本学を知った理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数	内訳
大学案内、進学資料	2	パンフ、学校案内
先輩	2	高校の先輩（愛大OB）
兄	1	兄が卒業した大学
中学・高校教員	3	先生の推薦、すすめ
高校	3	高校の資料、高校からの案内、進路指導部の冊子
地元	2	以前から知っていた。自宅より近い大学を探していた時に知った。
各種情報	1	自分で

A-7 入学理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

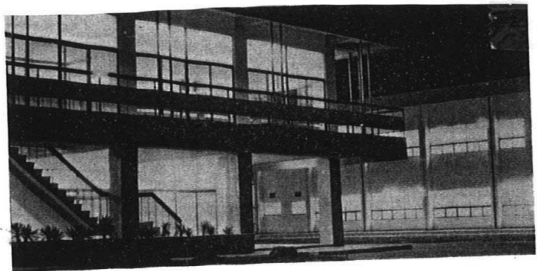
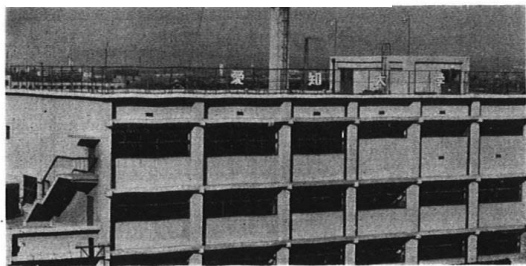
	人数	内訳
自宅通学が可能、通学に便利	7	家庭事情で下宿ダメ、地元
他私大より学費が安い	8	
大学受験の失敗、学力不足	5	スベリ止め、国公立学力不足、数学苦手
地元ではレベルが高い	2	南山の次
自由な校風	2	
文系だから	2	
法律を学びたい	3	
法学部の名門	2	法学の有名な先生が多い
東亜同文書院がルーツ	2	
伝統がある	1	
中国語を学ぶ	1	
教育内容の広さ	1	
合格したから	1	
特になし	1	

表 2 系

A-2
出身地

三河	刈谷	1
	三好町	1
尾張	名古屋	9
	一宮	2
	小牧	1
	大口町	1
	旭町	1
知多	武豊町	1
岐阜	岐阜	1
	瑞浪	1
三重	鈴鹿	2
	四日市	1
	川越町	1
	楠木町	1
その他	滋賀県	1
	合計	25

名古屋校舎（車道）



A-3
出身高校

三河	愛知県立刈谷	1
	愛知県立豊田西	1
名古屋	愛知県立熱田	1
	愛知県立中村	1
	愛知県立明和	1
	愛知	2
	名古屋工業	1
	名古屋第一工業	1
	名古屋女子大学付属	1
尾張	愛知県立一宮商業	1
	愛知県立木曽川	1
	愛知県立小牧	1
	愛知県立尾西	1
	愛知県立瀬戸	1
知多	愛知県立半田	1
岐阜県	岐阜県立瑞浪	1
	岐阜東	1
三重県	三重県立神戸	2
	三重県立桑名	1
	三重県立津	1
	海星	1
その他	滋賀県立虎姫	1
	未回答	1
	合計	25

表 2 系

B-1
学業の位置

	人数
学業が主	10
どちらかといえば学業	5
学業はまずまず	7
学業は従	3

B-2
興味 ※複数回答

	人数
ゼミ（黒木）	3

民法	6
憲法	2
政治学	1
国際法	1
行政法	1
日本政治史	1
日本政治思想史	1
国文学（久曾神）	1
世界史（池上）	1
日本史	1

中国語	1
語学	1

体育	1
----	---

商業六法から興味がわいた	1
世界の動き	1

B-8
在学中の満足度

	人数
大いに満足	7
まずまず満足	14
まあまあ	3
あまり満足していない	1

B-3
印象に残った先生 ※複数回答

	人数
黒木三郎（民法、家族法）	5
山中（民法）	3
鈴木正四	3
浜田（濱田）稔（民法）	2
柳沢（国際政治）	2
酒井（憲法）	2
夏目	1
勝部元	1
小幡	1
藤城	1
宮崎鎮雄	1
かげ山	1
債権法の先生	1
英語の先生	1
特になし	1

B-4
ゼミ

	人数
黒木三郎（民法、家族法）	6
夏目（刑法）	3
山中（民法、債権）	3
宮崎（労働法）	2
鈴木正四（日本史）	2
柳沢	1
大林（行政法）	1
川崎（国際法）	1
酒井	1
神谷（国際法）	1
濱田（民法）	1
憲法	1

B-9
学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	11
まずまず	8
まあまあ	4
あまり	2

表 2 系

C-1

参加していたクラブ・サークル名 ※複数回答あり

	人数
ダンス部	1
社交ダンスクラブ	1
剣道部	1
バトミントン部	1
ワンダーフォーゲル部	1
馬術部	1
卓球部	1

新聞会	2
ギター	1
ブルースターズ	1
美術部	1
雄弁会	1

法学研究会	1
-------	---

C-2

クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	4
まずまず	6
あまり参加しなかった	4
無回答	11

C-4

クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	4
まずまず	4
まあまあ	1
あまりなかった	4
無回答	12

表 2 系

D-1

卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	2
やや積極的	4
普通に	11
あまりしない	4
全くしない	4
無回答	0

D-2

卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	7
やや厳しい	5
普通	10
あまり厳しくない	2
全く厳しくない	1
無回答	0

D-4

希望した分野への就職

	人数
はい	12
なんとか	5
意識せず	3
意に反して	4
無回答	1

D-6

就職でお世話になった人 ※複数回答あり

	人数
大学就職課	8
愛大卒業生	3
知人、友人	2
自力	13
就職先（地元の人が在職）	1
ほか（高校恩師、親など）	3
無回答	2

D-7

愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	12
少し	2
特になし	10
無回答	1

D-5 ①

就職先

名称	所在地	(人)
名古屋相互銀行	名古屋市	2
三幸（サンコウ）株式会社	東京都中央区	1
岐阜プラスチック工業（株）	岐阜県各務原市	1
重機商工（株）	名古屋市千種区	1
三菱自販（株）	名古屋市中村区	1
伊藤忠	東京	1
ブリジストンタイヤ名古屋支店	名古屋	1
愛知タイヤ	名古屋市	1
永島観光開発（株）	三重県長島町	1
濃飛西濃運輸	岐阜県関市	1

D-5 ②

就職先

名称	所在地	(人)
三重県庁	三重県津市	2
名古屋市役所	名古屋市	1
刈谷市役所	刈谷市	1
小牧市役所	小牧市	1
武豊町役場	武豊町	1
愛知県小中学校教員	愛知県尾張旭市	1
日本福祉大学	美浜町	1
愛大（名）生協	名古屋市	1
文化施設「聖アンデレセンター」	三重県四日市市	1

表 2 系

D-8

転職 (各1)

名称	業種	所在地
大徳工業（株）	総務	豊田市
四日市市役所	専門官（青少年育成）	四日市市
朋和技研工業（株）	建設（設備）業	名古屋市
東海建設（株）	総務事務	名古屋市
真柄建設（株）	建設	名古屋市
ユニー	食品部	西尾市
三重県	事務吏員	津市
東海労働金庫	金融業	名古屋市
三和シャッター工業（株）	シャッター・ドア製造販売	名古屋市
松井工業（株）	建設（設備）業	岐阜県大垣市
太平産業（株）	土木建設	名古屋市
コープあいち	食品販売	長久手市
特別養護老人ホーム	介護福祉施設	三重県

D-9

再就職 (各1)

名称	業種	所在地
私立幼稚園（園長）、 私立・公立大学（常勤講師他）	私立・公立大学（常勤講師他）	
岐阜県トラック協会濃飛支部		関市
加藤茂税理士事務所	会計事務	豊田市
四日市市文化振興財団	企画アドバイザー	四日市市
松井工業（株）にて定年延長	建設（設備）業	岐阜県大垣市
	測量会社	名古屋市
加納病院	医療	名古屋市
ワーカーズコープあいち	事務局長	長久手市
セコムジャスティック	警備業	名古屋市
荻谷商工会議所	管理職	刈谷市
名古屋市消防局西消防署	消防行政	名古屋市
大口町シルバー人材センター	雑役	大口町
成田病院	医療	名古屋市中区

表 2 系

E-2

東亜同文書院

	人数
よく知っている	2
少し知っている	20
知らない	2
無回答	1

E-3

愛大事件

	人数
よく知っている	4
少し知っている	12
知らない	8
無回答	1

E-4

母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	10
多少関心	12
普通	3
あまり関心ない	0
無回答	0

E-10

同窓会に参加しているか

	人数
はい	3
よく	5
時々	16
いいえ	0
無回答	1

E-5

愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	10
2. 大学のホームページ	3
3. 「愛大通信」	5
4. さまざまな会合	0
5. 受験雑誌	1
6. 同窓生	2
7. 同窓会報	16
8. 愛大新聞（名・豊）	1
ほか	0
無回答	0

E-14

人生をふりかえって

	人数
大いに満足	7
まずまず満足	13
普通	3
少し不満	2
大変不満	0
無回答	0

E-15

満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	5
多少関係	7
普通	9
あまり関係ない	2
全くない	0
無回答	2

第3章 豊橋校舎「法経学部 経済学科」卒業生の場合

本章は、豊橋校舎における法経学部経済学科の1967年から1970年までの卒業生たちの回答である。豊橋校舎の経済学科は、開学時の旧制愛知大学、そしてのちの新生愛知大学の研究や学生の勉学およびクラブ活動の中心核となった学科であり、最も多くの入学生を迎え、最も多くの卒業生を社会へ送り出した。名古屋校舎側の経済学科の受け入れはこの時期の前までは教養課程を主とした1、2年生のみが主で、専門課程は法学科も含め、豊橋校舎で行われた。そのあと名古屋校舎にも専門課程が置かれるが、すでに豊橋校舎で学んでいた学生たちは豊橋校舎で引き続き勉学を続けるケースが多かった。

今回のアンケートでも回答数は、この豊橋校舎の経済学科が最多であった。しかし、卒業生の高齢化は進み、70歳代の後半となり、亡くなる卒業生も多く、また病気など健康を害していた卒業生も多く、さらに卒業後の高度経済成長期に転勤や移住で卒業生名簿に多くの不備が増え、回収率は多くなかった。それでも今回のアンケートの回答には学科としては最多の90名の回答を得た。回答は、きちんと丁寧に記入しており、ご協力に深く感謝を申し上げたい。

A. 生年、卒業年、出身校など

(1) 生年、卒業年、出身校

表3-A-1は、今回のアンケートの回答者たちの生年と卒業年を示した。生年は1941年（昭和16年）の83歳を最高齢とし、最も若い1948年（昭和23年）の76歳まで幅がある。卒業年は1967年（昭和42年）以降

毎年20人余りが回答してくれた。珍しく偏りはほとんどない。

回答者の入学生の出身地を見ると、表3-A-2のようになる。地元東三河、西三河、名古屋、尾張を主とし、静岡、岐阜、三重の東海地方が多いが、同時に、北陸、近畿、山陽、九州など西日本各地から、また一部東北からの入学生も多い。上海の東亜同文書院大学の引揚げ校、旧制大学としての設立、寮の存在など、愛知大学誕生の歴史が注目されたものと思われる。

表3-A-3は、入学生の具体的な出身校の一覧である。のちに進学校となる高校のほか幅は広い。特に各地の商業高校からの入学も目立ち、経済学部の受け皿にもなっている。戦前、東亜同文書院は入学が府県費生募集であったため入試は激戦であったが、各地の旧制中学以外に商業学校がかなり健闘しており、商業や起業を目指す優れた入学生も集めていた。その伝統を引き継いだ愛知大学に商業高校からの志願者があったということのように思われる。実際、実現しなかったが、戦後、愛知大学の法経学部の誕生直後、本間学長は文科省にさらに「商学部」を申請している。東亜同文書院の商務科や東亜同文書院大学の商学部との継承を図ろうとしたからである。しかし、空襲で焼跡の施設は不十分で却下された。

表3-A-5は、愛知大学を知った理由の回答である。最も多いのは、地元の、またこの地域の大学としてすでに知っていたことで当然と思われるが、それに並び、出身高校からの情報が多い。あとは親戚、友人などの本人以外の関係者、雑誌などの広報誌、歴史や

授業料などの大学の特性情報などが並ぶ。

そのうえで、入学した理由の回答は、大筋は前表と同じだが、さらに詳細に大学情報を検討していることがわかる。うち、のちに文部大臣になった永井道夫が来訪し、取材した「大学の庭」というアサヒジャーナルに掲載された愛大記事に触発された回答が見られるが、他の回答にも散見され、しかも全国からの入学生にみられ、影響は大きかったと思われる。

表3-A-9・10は、こうして入学した愛大への授業料と生活費の工面である。まず、授業料であるが、多くは親の支援である一方、アルバイトや奨学金にも頼っており、当時の愛大の授業料は、戦時、戦後の家庭環境下、勤労学生への配慮もあって全国的にもかなり安い方であったが、それでも自力で頑張った回答者も多い。また、生活費についてもほぼ同様で、自力で工面した回答者も多かった。日本経済は成長期に入ったとはいえ、それは就職時には恩恵を受けることになるが、在学中の学費、生活費問題は学生たちにとって基本的問題であったように思われる。なお、入学後の住まいについて見る

と、「自宅」が61名と60%以上を占め、自宅通学生が多い。次いで「下宿」生が12名、「アパート」が3名を数えるが、豊橋は戦時中、市街地の8割以上が空襲で消失したため、この回答者では7名が入居できている。下宿やアパートの物件を手に入れるのはまだ大変だったと思われる。中には飯田線沿いの町や村に下宿したという例も見られた。一方、キャンパス内の旧兵舎後の「寮」については、寮費も安く、食堂も安価な食事を提供し、収用人数は多かったが、希望者も多く、希望通りというわけにはいかなかった。

なお、「寮」については、寮祭も行われ、全国各地から入学した愛大生による寮文化の華が咲き、1968年（昭和43年）に公開された石原裕次郎、三船敏郎主演の映画「黒部の太陽」では、旧豊川海軍工廠跡に進出した熊谷組の敷地にダムトンネルが作られ、工事作業員として寮の1、2年生の多くが動員出演し、クライマックスのトンネル工事現場の大出水のシーンでは臨場感あふれる熱演を見せた。



映画「黒部の太陽」ロケ：石原裕次郎、三船敏郎らと翠嵐寮生（当時の愛大の寮）

ところで、若干の編入生も入学しているが、その理由についてみると、「東京には住みたくなかった」、「下宿先は経済学科生ばかりで気に入った」、「就職したが気に入らなくて編入」、「下宿で落ち着いて勉強しなかった」、「下宿先が気に入らなくて、他大学から」、「教員免許取得のため」、「専門課程に入る前に豊橋校舎へ編入して落ち着いて勉強した 58%を占めた」、「大学らしい雰囲気求めて車道から豊橋校舎へ編入」とあり、他大学から、あるいは学内移動での編入であった。

B. 学生生活と満足度

(1) 学業のウェイト

表 3-B-1 は、そのウェイトへの回答。それによれば、「①学業が主」、「②どちらかと言えば学業」の両方で約 60%を占め、うち①だけで 43%を占めている、またさらに「まずまず派」も含むと 70%に達するから、総じていえば、多くの回答者は学業に前向きであったといえる。そこでその理由を①と②について年次別にその興味分野とともにみてみる。

1967 年

①「学業が主」

「無理を言って大学へ行かせてもらったから」(計量経済学、以下近経)、

「4 年で必ず卒業する」(近代経済学、日本経済)、「教職に就くためテスト勉強に集中」(近経)、「写真研以外は勉強」(高桑先生の哲学)、「大学生であるから」(英語、仏語)、「会社勤務の後入学、エネルギー転換期、不況下故勉学」(マルクス経済学、近経社会の現状分析)

②「どちらかと言えば学業」

「故郷を離れ、貧乏学生としては勉学中心。高校よりも勉学(マル経、経済原論、経済学史)」、「3 年間で単位取得、4 年はゼミと証券会社でバイト」(中国語、ドラッガーの経営論)、「昼は学校中心。夜は家庭教師」

1968 年

①「学業が主」

「学生本来の在り方として」(近経、ドイツ語)、「大学で実力をつけるため」(大石教授の経営学総論、面白かった)、「大石ゼミで学業に励み、研究会にも入った」(経営学分野)、「教員になるため。司書などの資格も取得。剣道も」(部活と授業中心。教員免許も)、「豊橋は物価も下宿代も安く、時間を勉学に充てた」(玉木一教授の経済史とゼミ)、「親から授業料、生活費を贈られ、勉学中心に」(財政学、近経)

②「どちらかと言えば学業」

「クラブ活動に力入れた」(安藤ゼミ)、(無記あり) 複数

1969 年

①「学業が主」

「専攻科目の先生にひかれた」(中国語、内モンゴルの砂漠緑化ボランティア)、「最高学府で真の学問を学び、資質を高めたい」(貨幣論)、「入学時 2 歳年上なので頑張った」

②「どちらかと言えば学業」

「生活費のためアルバイトもやったから」(経営・会計関係)、(空白複数)

1970 年

①「学業が主」

「中国語の習得を目指した」(国語、中国語関係)、「親からの仕送りがあり、ギ

- 「チャンプルはせずに勉学中心」(中小企業の存続、企業形態と成長の可能性を視野に入れた経済政策)、「母親のおかげで勉学に集中できた」(不動産経営)、「友人との交流も積極的、同時に学業も」(経済地理学、現地での実態調査)、「通学時間が片道 3 時間近くあったので、勉学」(近経、宗教学)、(空白複数)
- ②「どちらかと言えば学業」
- 「卓球マネジャーでがんばった」、(空白複数)

以上①と②を中心にとりあげたが、それぞれの環境のもと、自らに意思で強い勉学の意思を突き進んだことがわかる。ただし、この評価は主観であり、遠慮がちな回答者はどうもランクを下げて自己評価した雰囲気もある。③や④の回答者にそれぞれの理由が多様に回答されている。

それぞれの個別事情もあるが、全体としてみると、クラブへの傾倒がその大きな理由になっているケースが多い。しかし、そこで身に着けたノウハウもその後の人生に役立ったといえる。しかも、みな学問の関心分野を挙げており、勉学の意識は高かったといえる。

(2) 印象に残った先生たちや講義、ゼミ

そこで次は表 3-B-2、B-3、B-4 にそれぞれの興味を持った分野、印象に残った先生たち、そして所属ゼミの回答を示した。

表 3-B-2 は、「興味を持った分野」を一覧した。科目だけでなくゼミも記入した回答者がいたので参考までに合わせて示した。経済学分野だけではなく、教養科目も選ばれており、幅広く関心が広がっていた。

学科の本流では、近経とマル経が折半されてバランスよく関心を持っていたことがわかる。それに、のちに学科へ昇格する経営学関係の科目も加わっており、変化に富んだ形で履修されていたことがわかる。

表 3-B-3 は、「印象に残った先生たち」で、この時期日本経済の成長が広く認識されはじめ、上位は近代経済学や計量経済学、地域経済学、財政学、経営計画の担当教授らが注目され、伝統的なマル経科目担当の教授陣を少しリードした感が見られる。そして併せて教養科目と語学の教授たちも国文学専門(文学部)のユーモアに富んだ久曾神教授のように多くの印象を残している。

表 3-B-3 にみられる傾向は、表 3-B-4 の選択されたゼミにもその傾向が反映しているようにも見える。従来の経済学を担ったマル経の論理や歴史的価値観が、戦後復興とさらなる経済成長が実感され始めた中での、新たに登場した近経の論理とそれを計量化で説明しようとする近経にも関心を呼び起こしたということであろう。金子教授に続き、新任で着任した木村、村上、吉尾各助教授の着任は、そのような動きをささえ、「数少ない若手の学者先生であつた」と回答者の一人は付記しており、期待感も大きかったようである。

(3) 卒業論文

以上のような環境の中で、どのような卒業論が誕生したのであろうか。以下、回答者が示した卒論のテーマを年次別に示した。

1967 年

「軽量モデルの作成」、「インフレーション会計の焦点」、「国債発行と日本経済」、「道路交通の現状と問題点」、「企業

間信用について」(日本経済の将来について大いに関心があったため)、「(マルクス関係)」、「(市場調査に関するテーマ)」、「人間関係論」

1968 年

「常滑の産業革命」(近代日本の地場産業の実態)、「(テーマを忘れた)」、「フランス計画経済」(計画経済がフランスでも成功していたから)、「価値分析」(大石ゼミ)、「(社会学的内容)」、「問屋製家内工業発達史」、「統計による日本経済発達史」、「日本金融の 2 重構造」、「計画経済」、「当期業績主義と包括主義」
「(会計学ゼミ)」、「(忘れた)」、「(福祉関係)」

1969 年

「費用収益対応の原則」(就職後に関係)、「中国の砂漠」、「福祉国家論」、「三河地区経済の現状と今後について」、「流通機構と一商品の貨幣価値」、「資本論の意義」、「寡占企業間の価値決定理論の一考察」

1970 年

「テイラーの科学的生産管理システム」、「地方商業の現状と問題点」、「中部経済と政治情勢」、「中国経済と政治情勢」(この時期文化大革命中)、「中小企業のこれからの成長及び存続、戦略と方法」、「遠州地区福田における織物業」、「遠州織物の実態調査—製造と販売の仕組み」、「行動科学」、「企業会計原則の位置考察」(努力賞)

(4) 先生との交流

1967 年

「卒業後も恵生会として先生が関係し

た学生(早稲田、中央)との交流」、「晩年まで OB 会で交流」、「ゼミのみ」複数、「学問以外を語る会」、「OB 会を昭和時代に数回」、「体育会所属のコーチと」、「愛大の大島ゼミと青学の大島ゼミと伊豆合宿」、「2 泊 3 日のゼミ研修合宿と」箱根ゼミ合宿、「卒業後 10 年間は交流あり。先生の退職後はなし」

1968 年

「常滑合宿」、「副ゼミ長として先生には公私ともお世話になり、結婚時の仲人もお願いし、卒業後も交流」、「年 1 回の懇親会」(山田先生が小田原在)、「飲み会、旅行、卒業生たちとの交流も」、「部活の先生と(剣道、阿部師範)」、「経済史で知多研修。暖房のある教授の部屋でのゼミも」、「OB 会と年賀状」、「先生の別荘で先輩と勉強」、「良い交流。自宅に訪問。卒業後も」、「研究会で長野木崎子、浜名湖などで合宿」、「あり。会合数回」、「私がいた養護施設に先生に来ていただき、園長と面談。福祉関係へ進みたいので東京都庁副支部長を紹介してくれました」、「クラブ顧問の内田先生とは食事をし、ジャズ喫茶で話をよくした」、「女性の先生で、あまりなかった」、「個人的にも色々教えていただき、先生の自宅へもお邪魔した」、「雑談」、「知多でのゼミ合宿」、「事前の予備学習、発表しあう。少しの経験だが有意義であった」、「親しくしていただき、結婚式の仲人」

1970 年

「亡くなられるまで連絡しあいました」、「卒業後もあり」、「社会人になってから、中国情報の報告に行きました」、

「先生は私たちの発表を討論され、途中指針を説明され有意義でした」、「ジャズクラブで内田武彦先生とよく話をし、京都、東京旅行も」、「クラブの先生と交流」、「山本先生は経済学研究会（マル経）の顧問。安藤先生は他の大学の学長になられ、同窓会で話を聞いた」、「ゼミ終了後は先生との食事会を時々持った」、「あり」、「研究室へよく行き交流をした」、「卒業後はない」、「大いにあり」

以上、回答者の多くは、かなり先生と交流があったことがわかる。先生たちも学生、卒業生も積極的に受け入れ、強い絆で結ばれていたことがわかる。全体として「愛大ゼミ塾」「愛大経済塾」とでもいうような雰囲気があったようにうかがわれる。

(5) 図書館利用

1967 年

「授業の合間に利用」、「時々」、「あまり利用しない」複数、「講義のない時は図書館を利用した」、「マル経とケインズ経済に関する図書を勉強した。就職試験用も」、「趣味関係本を」

1968 年

「必要に応じて」、「大いに利用した。日刊紙、雑誌、学術書などを乱読し、あとになってこれが役だった」、「司書、司書教諭の勉強に」、「ゼミの下調べ、読書のため、冬は暖房で快適であった」、「翠嵐寮生（豊橋校舎）の勉学の間として」、「外国語テープの活用」、「卒論作成時によく使用した」、「卒業時、絵の個展の間として利用」、「新聞を読んだ」

1969 年

「国家試験勉学の間として」、「毎年の中国語研修のため」、「あまり利用しなかった」複数多数

1970 年

「利用は少なかった」、「経済図書の比較検討をおこなった」、「4 年次の半分は学生運動で閉鎖され、十分には利用出来なかった」、「全国ゼミ大会参加のため、仲間たちとよく図書館を利用した」、「講義のない時に」

以上、図書館の利用については、全体に回答者の利用は低調のように思われるが、逆に利用した回答者は徹底的に利用した姿も浮かんてくる。当時は図書館も充実していく直前であり、回答にもあるように、学園紛争期には閉鎖されていたという状況も影響したと思われる。

(6) 在学中の満足度

以上のような、回答を踏まえ、「在学中の満足度」について、①大いに満足、②まずまず満足、③まあまあ、④あまり満足していないの 4 区分で回答をしてもらった。それを年次別にもまとめると、その集計は次のようになった。

年次	①	②	③	④
1967年	5	10	5	0
1968年	7	12	2	2
1969年	5	12	5	0
1970年	5	7	6	1
合計	22	41	18	3

(人)

※無回答は除く

毎年の回答数にはあまり差がないから、そのまま比較できそうである。それによる

と各年とも、②の絶対値が最も多く、1967年から1969年までは毎年同様のパターンを示している。しかし、1970年については、②は最も多いとはいえ、減少し、①から③までの差は僅少である。このことはこの年の満足度がやや低下したことがうかがえる。1970年は、愛知大学でも全国的な学園紛争の波が打ち寄せてきた時期であり、その影響が学園生活にも影響を与えてきたのではないと思われる。そこで以下、それぞれの理由について年次別にみしてみる。

1967年

①大いに満足

「友人ができた」、「友人に恵まれた」、「社会生活上大いに役立った」、「学業、遊びに充実」

②まずまず満足

「研究会、ゼミを通じて多くの友人に恵まれた」、「自由な校風を満喫した」、「マル経、近経両方を学べた。遊ぶ場がなく勉学に励めた」、「クラブ活動が十分できた（フォークダンス）」、「無事に就職できた」

③まあまあ

「大教室の授業が多く、教授や学生間のふれあいがなかった」

1968年

①大いに満足

「自由に自分中心に活動できた。授業欠席もゆるかった」、「他の大学のようにゼミにも参加できないような大学とは違い、学生数も少なく、ゆっくりした学生生活を送れた」、「部活」、「多くの友人、仲間ができた」、「学業、研究会を通じて多くの友人ができた。以来50年、大いに役立つ」、「寮生活、クラブ活動も

充実。豊橋市民も学生に良くてくれた」

②まずまず満足

「ゼミ、研究会で深く研究できたこと、その人たちとの交流」、「学内は自由、女子短との交流も」、「楽しく過ごせた」

1969年

①大いに満足

「応援団に所属し、授業には必ず出席することが決まり、幅広い人脈ができた」、「主要な専門科目はよく勉強できた」、「クラブ活動が良好で、友人が多くできた」

②まずまず満足

「学業、アルバイト、国家試験受験などいろいろやれた」、「新規にクラブを立ち上げ、文芸連に参加できた」、「友人ができた」、「地方出身の多くの友人ができ、多くのサークルにも参加し、楽しい大学生活だった」、「自由な環境」

③まあまあ

「ノンポリだったが学風は好きだった」、「大いに学び、大いに遊ぶ」、「寮生活はあまり勉強していない。自分もそうだった」

1970年

①大いに満足

「授業料は安くのびのびと勉強できた」、「文武両道、自然の緑の環境のなか、楽しい学生生活でした」、「自分としては一番勉強した4年間でした」

②まずまず満足

「自分の知らない知識、不可思議な問題点をやや解明、および興味を持つことができた」、「学問の自由さがあり、東海、北陸、西日本の多くの人と交流でき

た。建学の精神が良い」、「友人ができた」、「クラブ活動に没頭できた」

④あまり満足していない

「2年次に学業に身が入らず、満足感がない」、「4年次はほとんど授業が受けられなかった」

以上、回答された理由を紹介した。理由の無記もあり、そのすべてではないが、それぞれのレベルで学業、クラブに頑張り、それぞれが最高の宝物といえる友人を確保したということが大きい。ただ、最後の年次は学園紛争の波の影響が表れた片鱗が読み取れ、次期以降にも続くことになる課題となる。

(7) 人生への影響

では以上のような愛大での大学生活が、その後の人生にどのように影響したかである。選択肢は、①大いに影響、②まずまず、③まあまあ、④あまりの4レベルを設定し、その理由も回答してもらった。以下はその結果である。

年次	①	②	③	④
1967年	5	9	2	3
1968年	4	9	5	5
1969年	4	6	8	4
1970年	2	6	4	10
合計	15	30	19	22

(人)

※無回答は除く

次は年次別レベル別その理由内容である。

1967 年

①大いに満足

「卒業論文への取り組みが自信になった。就職時に評価され、社会人として胸を張って生活できた」、「積極性」、「社会

変化を分析し、人間関係もスムーズに対応できた。60 歳で公務員を退職し、引き続き厚労省の佐賀経済局、市役所、地元の自治会長を務める」、「学業の成績はわるかったが、昭和 39 年東京オリンピック後の大不況により、就職がうまくいかず、なさけなかった」、「思草寮の4年間、少林寺拳法4年間で人間関係と生き方を学んだ」

②まずまず

「就職時に評価され、社会人として胸を張って生きてきた」、「真面目に勤めあげたこと。だがしかし、真面目だけでは社会生活は難しかったこと」、「積極性」、「会社の営業活動、特に販売促進にて。受容、販売予測にて」

④まあまあ

「専攻学科と就職先の不一致」、「学び方自体は影響があったし、生き方には良い影響があったが、学んだことは参考にならない」

1968 年

①大いに満足

「イッパツ合格がはやかった。学芸大のイッパツ目の人と同等」、「人間関係の対応に私法など社会人としてのモラル、マナーなど会得できた」、「入社時経理配属で大学、高校で学んだことが即戦力になった。以降 38 年経理知識のあることが仕事を楽しく、安易にできた」、「寮生活が人生に大きな影響を与えた。」

②まずまず

「高卒で1年間社会人。大卒で改めて社会人、4年間の学業、大学生活が自信につながったこと感謝しています。あ

りがとうございました」、「銀行に就職して、企業分析、特に融資系の時に大いに役立った」、「学生生活に集中できたことは、何事にも集中して考える習性となり、就職後の仕事の判断、考え方の基礎になったように思われる。他大学のように、ゼミもなく大教室で4年間を過ごした生活ではなかった」、「岐阜県内の銀行に就職して定年まで勤務できたこと。またその後も銀行取引先のお世話になったこと」、「マルクス資本論」

③まあまあ

「部活などの経験が就職、人間関係に役立った」、「勉強の仕方を習得できた」、「学業はあまり成果はないが経験が役に立った」、「社会に出てからの勉強と経験」

1969年

①大いに満足

「学生時代の頑張りが就職(新聞社)につながり、資金稼ぎのアルバイトの塾講師が人前で話す度胸につながりました」

②まずまず

「国家試験に役立った」、「社会人になっても、色々な人との出会いと会話の中で対応できた」、「知識経験が生かせた部門に修職できた。」

③まあまあ

「もっと部活をすればよかったと思う」
「寮を出て下宿生活の2年間は教職課程に懸命であった」、「砂漠研究」、「学業はあまり成果はないが、いろいろな経験が役に立った」

1970年

①大いに満足

「粘り強く考え、答えを抽出する努力。リーダーシップ、折衝力」、「人との交わりで、積極的に動くことができており、前向きになっていた」

②まずまず

「中国との仕事に関係したため、語学力が役立った」、「とことん仕事に打ち込むことが出来た。37歳で取締役になることができた」、「在学中の人間関係、広く考えることの重要性、大学卒業後の社会貢献」、「転職をくりかえしながら、自分の得手がみつからず、家族からも社会性がないといわれたが、愛大で学んだ少しの知識から資格にはほとんど合格でき、仕事に活かして良かった」

以上からみると、各レベルの内容をみると、いずれも前向きに頑張ったといえる。

C. クラブ、サークル活動

表3-C-1は、参加、加入していたクラブ、サークル名である。経済学科は学生数も多く、それゆえスポーツの武道系から球技系、ダンス系、音楽系、人文社会学系までとその幅の広さもわかる。この時期になると新たなクラブなどの設立は一段落し、各クラブやサークルが活動の深化発展を目指す時期に入ったように見える。それは表3-C-2の「参加状況」から見てもわかる。「よく参加」は63%を占め、それに「まずまず」を加えると72%にも達する。それらの①「部活内容」、②「部活理由」、③「人生への影響」の回答を見してみる。

まず、愛大では著名な「応援団」について1969年卒生は①「関係や礼節、挨拶をとこ

とんおしえられた。合宿も連日連夜厳しかった」、②「辛いことを耐え、忍耐力がみについた」③「何事にも恐れず、積極的に行動でき、良い結果を残すことができた」

また、「少林寺拳法」について、1967 年卒生は、「個人プレイでの修行でしたので、4 年間 1 日も休まず修行。4 年制では副将で部員数はブームに乗り 80 名以上、組織について勉強しました。4 年後の郷里の米子で山陰地区一番の道場を作り、人を育てました」。

愛大の代表的な「硬式野球部」について 1968 年生卒は、①「ほとんど毎日練習。試合時は授業の出席よりも部活優先」、②「仲間を作れたこと」、③「同じ目的、目標」、

「ワンゲル」について 1967 年卒生は、①「渡り鳥のように、屋久島、北海道、上高地キャンプの山行。登山とスキーも」②「友人ができたこと、これがなければ学生生活に意味はなかったと」③体力への自信、頑張る力」

「フォークダンス、社交ダンス」について 1967 年生は、①「フォークは、1 年少し、社交は 2 年半活動。少し習っていたので本を見ながら指導した。学内に練習場がないので、豊橋ダンスセンターで週 1 練習。部員 50 名（男 30、女 20）②「ダンスブームでダンスパーティーにも参加でき、部員は喜んだ。女子短の森国太郎先生の社交ダンスに助手として参加」③「同窓会岡崎支部で自分の指導で大ダンスパーティーを 2 回開催、大盛況。収益金が活動費に」

「自動車部」1967 年卒生①「フィギアレースやラリー②「卒業後も交流」③「仕事上も信頼関係あり」、「ギターアンサンブル」1968 年卒生①「演奏会」②「友人ができ、今も交流」③「同輩、後輩とはいまも」

「モダンジャズ研究会」1968 年卒①「プロになったのもいる。実力あり、各支部で演奏会、ダンスパーティーも」②「趣味として一生楽しめる」③「寮生活により、上、下、同僚との必要なつきあいかたを学んだ」

「ボート部」1969 年卒生①「中川辺、庄内川、日進町、渥美で合宿。②「人間関係の大切さ」

「吹奏楽部」1970 年卒①「大阪経済大、関西学院大と合同演奏会などの演奏会」②「今も友達で 40 歳以上で忘年会や旅行をたのしむ」③「無二の親友ができた」

「国際問題研究会」「経済学研究会」1970 年卒①「北門から入った木造のサークル棟にあり」②「ゼミ、サークル活動を通して、全国ゼミ（経済学）に参加し、3 年次には自力で愛大大会を開催した。全国 90～100 の大学が愛大に集まり、研究発表をした。豊橋公会堂も利用した。名古屋校舎も利用した」③「現在も人間関係のつながりがある」

「経済学研究会、証券研究会」1968 年卒①「一冊の本をもとにして話し合い。個々にテーマをもち、話し合い、発表し、討論。他校との交流、討論、発表。②「他校の様子がわかり、研究人生に幅ができた」③進路が違い、直接には関係なかったが、研究する計画、態度などを学んだ」

「学園祭「寮」行事に積極的に活動」

①1967 年卒生「豊橋校舎の学生寮に入寮していたので、寮行事の参加。3 年次には学寮食堂委員会の委員長として食堂の運営をおこなった②「学生寮委員会は寮生のみならず、一般学生も利用するので 3 食のメニュー、一食の価格、栄養管理、栄養士、調理師の採用の他、年間の収支決算報告などを学寮全員総会で了承を得ていた」③「学寮の集

団生活の秩序を維持し、寮生並びに一般学生の食生活の安全を支えることができた」。

(なお、学生寮の活動は、寮生間のコミュニケーション、交友、行事など多方面にわたっていて、興味深く、学外の活動に参加できる時間はなかった。勉学の時間に多くをつかったことも、クラブ、サークル活動にあてられなかった理由でもある)

また、これらのクラブサークルは、学内だけでなく、学外の地方大会や全国大会などにも積極的に参加している回答が多い。また「社会参加」についても社会貢献、帰郷して郷里の高専にクラブや道場を開いたり、自治会長、公民館館長、小学校そのほかのボランティア活動、地域組織のリーダーなどにも取り組んでいる回答が多く、クラブ、サークルの経験が随所で生かされている。

D. 就業状況と人生

ここからは就職状況についての回答である。最初に、回答を大きくまとめて表に示した。表 3-D-1 は、「卒業時の就職活動」についてである。全体としては、前述の法学科とほぼ同様に「積極的」というよりは活動をほとんどしなかった状況であった。全体には経済成長の状況であったが、1967 年はそんな中の不況感もあった。

そんな中で積極的に取り組んだのは、「公務員志望者」と「簡単に大企業へ入社できる」と思っていたが不況もあり、慌てて就職課だけにたよらず行動した」という回答者である。「ふつう」、「あまりしない」、「ほとんどしない」派は、「会社の求人票で受験。当時は学生が会社訪問することはありえなかった」、「教員試験は独学で」、「公務員も」、

「学校推薦が多かった」、「長男で家業を継ぐためには他人の飯を食って来いという父親の考えで就職。東亜同文書院卒の社長のところで 3 年間」。

1968 年では、「積極的」派は「入学時から就職質へ通った」、「教員になるためやれることはやった」、「会社内容をよく勉強した」、学校推薦をもらうため勉強」。

一方、「普通派」は「とりあえず家業と違う職場を経験したかった」、「就職課に任せられた良い時代」、「ゼミ生は先生が紹介してくれた」、「教育公務員になるため」、「会社の先輩が決ってくれた」、「就職先は決まっていた」、「自営か福祉かのんびりしていた」、「いとこの会社から」、「親の」、「一社のみを決めていた」、「家業を継ぐ」、「希望した企業が募集せず」、「銀行の知り合いからさそわれた」。

1969 年では、「積極派」は、「良い企業をねらった」、「新聞記者になりたいくて」。

一方、「普通、消極派」は、「すぐ決定したから」、「縁故。アルバイトの延長で」、「当時自分がよくわからなくて」、「合格したが、見学してすぐやめ、他社へ」、「大石ゼミの先輩の世話で」、「野球関係者のおかげ」、「就職課の案内」、「希望無」、「教員試験に集中」、「サラリーマンか経営者かの迷い」、「希望を目指す」など。

1970 年では、「積極派」は、「自分の性格、長所、短所がわからなくなったため」、「2 年生から企業へ手紙を出し、学内選考は不合格だったが、企業の推薦をもらい、ビクターへ」。

一方、「普通派」は、「進路の決着つかず」、「家業継承」、「優決定」、「知人から紹介」、「クラブ活動から」、「地元企業へ」、「大学

情報のみ」、「職種目標無し」、「早々内定」、「3年次に国家公務員中級職に合格、上級職、高校教員目指す」、「先輩の会社へ」、「バイト先へ」。

表 3-D-2 は、「卒業時の就職環境について」の回答を示した。

それによると、「普通」が最多で、「やや厳しい」、「あまり厳しくない」が続く。それは、前表と対応関係にある。まず、「厳しい」「やや厳しい」派は回答が多い。それから見ると、1967 年では、「父を継いで金融を」、「観光業を」、「決めてない」、「憧れの出版業界へ」、「憧れの職種を決めていた」複数、「まずは大学院へ」、「地元優先」、「流通、物流」、「卒業前から就職先へ出入り」、「国家公務員になりたい」、「不況下選択する余裕なし」

1968 年では、「印刷会社に決定」、「決めていた」、「会社内容重視」、「部活先輩の紹介」、「銀行決定」、「情報産業と金融へ」、「金融へ」

一方、「普通」「厳しくない」派は、「安定した営業職を」、「分野決まらず」、「教職になりたい」複数、「家業を継ぐ」、「決めていない」複数、「地元岡山へ帰る」、「たまたま」、「富士市から」、「銀行に決めていた」、「未決」、「小売」、「食品」。

次に、1969 年では、「積極派」は「商社は高級で、海外でも仕事ができそうだから」、「親の勧めで決めていた」、「営業関係」など。

一方、「普通」あるいは「厳しくない」派は、「人に好かれる小売り」、「公務員」、「会計事務所へ」、「トヨタ系」、「アルバイト先へ決定」、「金融系東京本社」、「金融関係へ」複数、「東京本社」、「社会人野球を求めている会社へ」、「先輩のいる会社から」、「大石

ゼミの紹介」、「知識の生かせる経理財務分野へ」、「中央での新聞記者」、「故郷鳥取に本社のある会社」など。

1970 年では、「積極派」は少なく、「地方公務員を」、「地元企業を」だけである。

「普通」あるいは「厳しくない」派は、「教職も考えたが一般会社を経験しようと」、「大学で学んだことの活用」、「営業職なら無難」、「会社の評判と内容の良さから」、「「大府市役所」、未決」、「安定した製造業」、「資本主義は物流」、「建築工務を支えるオフィス、パソコンを」、「地元の信用金庫」、「金銭関係の仕事」、「農林業」、「公務員」、その他に「食品」「新聞記者」「バイトの仕事が自分に合っている」など。

表 3-D-4 は、「希望した分野へ就職できたか」についての回答者である。それによると、無回答 9 名を除くと、全体の半数は「希望通り」で、「なんとか」の 14 名を加えると、68%がほぼ希望通りに就職できたといえる。「意識せず」は 19 名の回答だが、その多くは、縁故、ゼミ紹介、バイト先からの自然的な流れの回答が多い。「意に反して」は 7 名を数えるが、理由を回答したのは 1 名で、「倍率が 60~70 倍で、学業不足を感じた」と回答している。

なお、「希望通り」では、「戦後、東亜同文書院から京大へ編入し、この会社の常務になった書院卒生のおかげで入社できたと、退職後、書院卒生から聞いた」とある。当時、書院生からの引きがあったということで、他にもこのようなケースはあった。あと、「自力での努力」、その他「普通の入社試験に合格した」、「大企業の面接で評価された」、「選考基準にマッチしたと担当常務が教えてくれた（独立心旺盛な変人を選んでくれ

たのかも)」。当時の愛大のバンカラ意識も評価されたのではないと思われる。あとゼミの先生の紹介、先輩の引き、学校推薦、知人紹介、友人情報、などの恩恵も受けたようだ。しかし、中でもやっぱり、自分の努力が大きい。

表 3-D-6 は「就職でお世話になった人など」についての回答である。最も多いのは「自力」が全体の約 3 分の 1 を占めており、自らの努力で就職したことがわかる。次いで大学就職課、知人、友人、卒業生とあまり差はなく続くが、当時多かった「縁故」については多様であり、それら縁故者も合わせると 2 番目の多さになる。この時期大学の就職課はあまり目立つ存在ではなかったようだが、次第に学生に照準をあわせ、業務の中に取り組むようになって来たことがうかがわれる。そして従来からの伝統的な「縁故」はなお健在であり、それが就職戦線を和らげていたようである。当時は色々なネットワークが就職をめぐる存在し、展開していたといえる。

なお、このような就職活動時に、「愛大卒」を意識したかというのが表 3-D-7 の回答である。無回答は 7 名で、これを外すと、「はい」が 42% 「少し意識した」を加えると 70% になる。その一方「意識しない」は 30% を占め、独立的に活動を行ったこともわかる。

以下、大きく「意識する派」と「意識しない派」に分けた、年次別に追ってみる。

まずは「意識する派」である。

1967 年

「24 名の同期入社は、いわゆる有名大が多かったから」、「大卒卒の採用だったから」、「多くの先輩がいてよい意味

の学閥を作っていたから」、「地域貢献のため堂々と日々精進する」、「知を愛する大学を卒業したのだから」、「先輩が 2 人いたから」、「愛大の名誉を高めるため努力。ただし、職場では個人の能力が重視された」、「大卒社員はほとんどいなかったから」、「愛大卒は会社で粘り強い」、「社長が愛大前身の東亜同文書院卒」、「縁故就職のとき、一流大学でないと、といわれたとき」

1968 年

「就職先に愛大卒生が多数いた」、「全国区の企業に愛大生として挑戦」、「多くの仲間を作りたかった」、「就職先は国立大が多かったため」、「赤系の大学と言われていたので母校に迷惑をかけないように、また後輩の手本になるようにがんばった」、「教員免許では学閥を感じた」、「紹介いただいた先輩に迷惑をかけないように」、「愛大卒の先輩が多数、しかも頑張っていた」5 件、「先輩の重役がいた」、「有名大の卒生が多かった」、「愛大に誇りがあった」

1969 年

「愛大の先輩が多かった」4 件、「国公立大や早慶が多く、地方出身が少なかったから」、「愛大に誇りを持っていたから」

1970 年

「大卒ということで仕事に熱意を持った」、「役場で最初の大卒の採用であったから」、「愛大卒の上司や同期が数名おり、私学では優秀と評価」、「愛大を誇りに思った」、「愛大先輩が多数いた」6 件、「就職課長から初入社して、後輩のためにも頑張ってもらいたい」、「学生運

動が気になった」、「同期に他大学生が1人いた」、「愛知県庁には、愛大卒生の中に上級、初級、その他などの派があった」

以上、「愛大卒生の愛大意識あり」について年次ごとに追った。共通項は、この時期に就職した職場には愛大の先輩がどんどん増えていたという状況が伝わってくる。愛大生卒の拡大期といえそうである。しかも、はじめに愛大や後輩に迷惑をかけないように頑張るという親心が見える。

次に「意識しない派」について試みる。

1967 年

「文系新卒入社第 1 号であったためか手厚く対応してもらったので」、「愛大はあまり有名ではなかったから」、「教職では愛教大が主流になっていた。」

1968 年

「会社訪問の時、担当者からは学閥ではなく、実力主義の会社だといわれた」

1969 年

「学歴は気にせず、会社に貢献できてこそ思っていた」、「自力で行動していたから」、「取材や記事作成に出身大学が影響することはありません」(大手新聞記者)

1970 年

(なし)

以上のような環境、条件の中で、決定した就職先の回答は以下の表のようになる。対象年度を一括して示した。

表 3-D-5 は、決定した就職先の一覧である。メーカー中心の一般企業、公務員関係、金融関係とグルーピング化して示した。就職地は地元愛知を中心に東海地方が多いが、

かなり全国にも広がっており、愛大生の発展機運は広がっているとも言えそうである、

表 3-D-8 は、転職分を示した。高度経済成長期に入っていた日本経済は景気変動や業種転換などの動きもみられ、回答者についていえば、当初の半分ほどの卒業生が転職し、時代の変化の中で交通運輸などが増えている。

また表 3-D-9 は、多くは定年後の再就職先の状況を示した。高齢化もあり、第 3 次産業、サービス業への就職が目立つ。時代の変化に対応した流れだということができる。

ところで、以上の就職活動やその後の経過の中で、愛大生は他の大学生と比べてどのように評価されたのか、またそこから浮かび上がる愛大生の特徴はあるのかについて年次別に回答から追った。

まずは、「愛大生は他の大学生と比べてどのように評価されたのか」について

1967 年

「真面目、質実剛健」、「時に応じて、自信のある人は強い」、「真面目で粘り強い。控えめなところも」、「後輩たちは可成り優秀」、「営業分野は前向き、積極的」、「岐阜市消防本部内では高い評価」、「大学は関係なく、本人の努力次第」、「教職では教育系大学に比べ専門科目で努力必要」、「先輩、後輩に愛大卒がいないのでわからない」2 件、「文系のため、比較したことなし」、「やや良」、「わからない」

1968 年

「中京地区では知名度もあり、評価されている」、「先輩がいなかったのですべて挑戦だったが、評価されてきた」、「個人差もあるので一概には言えない。

かつては野性味があったが、今は小さくまとまりすぎている」、「仲間としては、よく付(つ)いてきてくれた」、「堅実、総じて比較的地味」2件(うち1件は銀行員)、「考えたことはないが、自分は愛大卒として自信をもって人生を生きている」、「後輩は指向が安定している。ただ一部勉強不足も」、「良い方だ」、「常識的」、「真面目」、「大量の学生を入学させている大学の卒業生は無気力で、意欲がない」、「特に意識せず」3件

1969年

「良い方」、「大いに評価できる」、「真面目さ」、「地道に着実に活躍している人が多い」、「勤勉で忍耐力あり」、「よく頑張っていると思う」、「社会へ出てからの努力が大事だ」、「優秀であろう?」、「中程度の上」、「人物本位の企業で、出身大学とは関係なしで評価されている」、「学閥とは無関係に、本人の力量で評価されていた時代でした」、「全国で活動するには、地方出身者はやはりハンディがありました」、「できるとは思わない。入社して彼勉強した。他大学のゼミや研修に参加した」、「とくにない」3件

1970年

「自分のまわりは、真面目で実直」、「重要なポストに着任している先輩が多い」、「優れている点が多く、仕事熱心と評価できる」、「地味ではあるが、ある程度素養があり、良いと思う」、「謙虚で人付き合いに優れ、管理者向きの人間が多い」、「大変高く評価されました」、「地道に努力する」、「普通以上」、「もっと自信を持ってほしい。毎年1名は入組者

を、個性がほしい」、「あまり意識せず」

「普通」など4件

次に、「愛大卒生の特徴」について

1967年

「仕事に常に真剣」、「名門、伝統ある大学と競い合う精神有」、「真面目に努力するタイプ」、「よく言えば「おとなしい」、悪くいえば、「覇気に欠ける」、「あまり自己主張せず、協調性あり」、「前向き、明るい学風」、「他大学卒業生の九大、熊大、同志社大、立命大、慶大、明大、早大らといっしょだったが、大学に起因する特徴というよりも個人に起因する特徴が目立ち、その人の進む方向を示していた」、「私大は大体同じレベル」、「とくになし」、「わからない」など6件

1968年

「東京の勤務先では薬師岳遭難大学として知られていた」、「入社した世界企業は同一のスタートなので、愛大卒のガッツでがんばるのみ」、「まじめ、紳士的」、「度量が大きく、心のまま動く自由闊達な人物が多い」、「文系大量合格者を出した大学の卒業生は無気力、意欲ない社員が多い」、「地味」「型にはまらない人が多い」、「活動力、言動力賀強い」、「どちらかと言えば、真面目」、「良しにつけ、悪しきにつけ「骨」(信念)あり」、「特になし」8件

1969年

「学業ができる」、「学業に真面目」、「真面目」、「控えめだが、粘り強い、そして人間性が良い」、「ややのんびりタイプが多い」、「優秀な諸先輩が数多く見えた」、「比較できなかった」「特になし」

など 6 件

1970 年

「自分の主義主張をはっきり言える人が多いと思う」、「地元に着いており、諸先輩方も他大学にくらべ、貢献している」、「後輩が数多く入社し、優秀な方々が多く、やはり愛知県では優れている」、「素朴」、「心の範囲が広い」、「派手さがない」、「わからない」、「とくになし」、「不明」など 3 件。

以上、愛大生の社会へ出てからの評価、特徴の回答を紹介したが、少しかぶさる内容であり、答えにくかった面もあったかと思う。そのような中、この時期の愛大卒生の基調とその上での多様性を持つようになった特性をうかがい知ることができる。開学からほぼ 20 年、大学設立期に 450 人もの編入東亜同文書院生の他、外地から帰国した引揚げ学生たちが作った学生生活とその精神は、その後国内の各地域からの入学生も受け入れる中で、内外ともに激動の歴史の中で、どのように変容し、変容しなかったかという点は興味深い。今回の対象時期は、愛大精神がどのように継承されどのように展開してきたかの基礎部分が形成された時期であるといえると思われるが、この後もう一つ、全国の大学紛争が愛大にも影響を与えるその直前の時期に直面する。それがその後の愛大生にどのように影響したかは、この時期をベースとして検討する課題にしたい。

E. 愛知大学の卒業生として

(1) 愛大設立趣旨の回答者への影響

まずは、「世界平和と日本文化への寄与を

ベースに国際人の養成と、地域文化への貢献」を、「自由受難」とともに「知を愛す真理の探究」により目指すという「愛大設立主旨」の理解とそれへの対応についてである。

1967 年

「勤め先や地域社会で自分の意見をはっきりいえる」、「仕事中の根底で役立った」、「戦後、地方都市に誕生した大学の凄さ」、「まじめに努力、自由な生き方の尊重、学歴をひけらかさない」、「地域社会への貢献」、「人生のバックボーンとして」、「ハローワークでの職業指導、鳥栖市の自治会長として地域貢献」、「自ら学び、真理を子供たちに伝えるべく努力してきたつもり」、「学生時代自由に過ごせた」、「学生時代は無縁だったが同窓会へ出るようになって考えるようになった」、「わからない」5 件

1968 年

「主旨、理念は今も反映しているが、愛大そのものが相対的に委縮しているように見える」、「先生や先輩とこれについて話す機会が多く、多少実践できた」、設立趣旨は学生歌に。卒業後 50 年たっても人生の生き方としている「設立趣旨通り生きてきた」、「そのためにはクリエイティブに生きることを社会生活でも目指してきた」、「母校への誇り」、「中国関係に強い」、「リベラルな考え方」、「人を扱う時は平等、公平を貫いてきた」、「海外事業に着手し、外国人と友人になれた」、「福祉活動に中心を置き、日本レクリエーション協会インストラクターの資格を取り、県のボランティア登録し、ワールドラグビーやオリンピックに協力してきた」、「自由ゆえ、自

分で責任をもって行動してきた」、「知を愛する研究心を受け継いでいる。マルクス研究も継続中」、「特にはなし」5件

1969年

「地域社会への貢献を実践している」、「困ったときに多くの先輩に相談してもらえる」、「地域差破壊への貢献。わが町の発展に貢献したい」、「大変高邁な思想」、「町内、地域へ貢献。少年のスポーツ、文化へ」、「なかなかむづかしい」、「豊橋の「自由、受難の鐘」ととても懐かしい。建学の精神が長く続いてほしい」、「大きな人間になりたいと思ったが、余裕がなくて・・・」、「特には考えなかった」5件

1970年

「韓国、中国の人達と交流ができた」、「会社でも、地域社会でも設定した目標は遂行。努力してきた」、「協働の理念を探究し、農業振興に寄与したい」、「我々の時代の卒業生は、ある程度影響している」、「自然を愛し、普通を心掛け、友人、先輩、後輩を大切にしてきた」、「地域社会文化に貢献できた」、「受験勉強から解放され、色々な本を自由にランダムに読んできた自由がうれしかった」、「自分の人生に似ている」、「特にはなし」4件

以上、愛大の設立趣旨、建学の精神に対する卒業生の受け取りの回答を見た。ほぼ20年後の卒業生の各年次とも半数近くが趣旨と精神を理解し、実践もしていたことが明らかになった。そこに愛大精神が流れているのだなと実感できたし、特に実践も自然

体でやっていることにも感銘を受けた。国立大ではまずこのようなことはないし、私学でも宗教系の学部以外では見られないかもしれない。愛大のまさに誇るべき設立精神と学生及び卒業生魂だと思われる。この点こそもっと広く知られてよい点であろう。

1970年は全国の流れの中で愛大もその先走りの学園紛争が生じた。そんな中で、この大学設立の趣旨はつぶされたり、無視されたりしないか気になった。しかし、その心配はとりあえず杞憂に終わった。卒業生たちは、愛大精神を胸の中で育てていた。

(2) 東亜同文書院の認知について

愛大設立趣旨にも多少絡むところがあるが、愛大の前身校ともいえる「東亜同文書院」の認知レベルの回答である。前述もしたように、愛大はまさに東亜同文書院の存在がなければ誕生できなかった。戦後、東亜同文書院は富山県の呉羽校舎の分校で書院を永らえたが、近衛文麿公の自殺で経営基盤がなくなり、消失の運命にさらされた。その時、上海にいた東亜同文書院大学最後の学長である本間学長からの、「すぐに新キャンパスを探せ」との指令で、呉羽分校の神谷教授が、豊橋の旧陸軍15師団（のち、陸軍予備士官学校）跡を確保し、分校教授会の新大学構想と帰国してきた本間学長一行が、豊橋市の歓迎を受けて準備計画した「愛知大学」を設立するにいたった。文部省も外地から引き揚げてくる学生たちの収容が早急に必要だったのである。こうして当時の6大都市以外にできた初めての旧制大学としての「愛知大学」が豊橋の地に誕生したのである。中部地方では最初の法文系旧制大学となった。東亜同文書院からは450人の学生

が、各学年合計 6 学年に分かれて編入してきた。何と一度に予科 3 年、学部 3 年の 6 学年が一斉にオープンしたのである。珍しいことであった。

早速 1947 年には開講となり、書院から編入した最高学年の学部 3 年生がリードし、同年 5 月には、「豊橋市民との文化交流祭」が実質書院生中心の手によって企画され、1 週間の祭りに、まだ焼け野原の残る市街地から沢山の市民が会場となった愛大キャンパスと空襲を免れた豊橋公会堂へ押しかけた。その最終日、一昨年、NHK の朝ドラ「エール」の主人公であった古閑裕二とコロンビアオーケストラによる「愛大音楽祭」が開催され、最後に公会堂最上段の階段から挨拶した、のちの外国大使を担った小崎昌業学生自治会長は、市民へのこの挨拶時に、公会堂前に数千人の市民が集まってくれたという。書院生の実行力に皆敬服した。

書院生は、こうして愛大と豊橋市民とのつながりを実現し、愛大学生を早くも軌道に乗せ、書院生以外ばらばらに入学してきた愛大学生たちをまとめ上げた。

これは当然、愛大史の中でも語り草になったし、多くの市民も愛大に注目することになった。では、それから 20 年後、愛大学生にどの程度書院生たちの記憶が伝えられていたのだろうか。

表 3-E-2 はそれをまとめて示したものである。それによれば、何らかの形で知っているのは、回答者の 87% を占めており、「よく知っている」も 30% を占めている。全体としては愛大を開いた書院生たちをほとんどの回答者が認知していたということがわかる。

以下、認知レベルごとに認知理由を示す。

①「よく知っている」

1967 年

「現地訪問」、「入学後の教授の話」、「父から」、「愛大予科から九大へ入学卒業され、九大教養部の教授になった先輩から」、「同窓会への出席から」、「先輩から」

1968 年

「愛大越知先輩から」、「愛大同窓会、クラブあいちから」、「先生や先輩、図書館資料から」、「OB 会、記念センター訪問」、「記念センター訪問」、「実兄の大学」、「古書出書院史を読んだ」、「愛大史を読んで」、「寮での話」

1969 年

「同窓会活動を通して」、「山岳遭難を通して」

1970 年

「叔父が豊橋校舎に住んでいた」、「寮生でした」、「恩師がその関係者」、「創業誌」、「同窓会活動で」、「先輩からの話」

②「少し知っている」

1967 年

「学生時代にハルピン学院出身の父およびその同級生（当時愛大職員）」、「先輩とマスコミ情報」、「雑誌など」、「大学の機関誌」、「パンフと書物」、「卒業後の大学同窓会報」、「豊橋の歴史から」、「入学後の教授の話」、「友人及び友人から」、「卒業生の活躍」、「書面から」

1968 年

「先輩や先生方から」、「新聞、広報誌」、「父親から」、「岡山支部の後輩からの史料送付から」、「入学案内から」、「大学で」、「ゼミと男声合唱団の合宿で」

1969 年

「同窓会で」、「学内広報で」、「図書館資料から」「大学案内から」2件、「愛大広報から」、「入社した会社で」、「入学してから」、「「北帰行」の歌にその面影がある」、「生まれた年と愛大誕生が同じ年なので愛大に愛着。資料から」、「高校の先生から」、「卒業生及び文献から」、「叔父が入っていた戦時中の豊橋予備士官学校にご縁で（叔父は中尉として戦死）」、「同窓会と愛大史」

1970 年

「中学の時から愛大を進学先に決めていたので情報入手」「先輩から」「父親から」、「在学中の同窓会の役員をしていたから」、「愛大先輩の兄から」、「記念センターを見学して」、「入学時のガイダンス」、「書物」、「先輩より」

以上のように①、②レベルとも卒業生が、かなり好奇心を以て情報にアクセスして書院の認知を得ていたことがわかる。

（3）愛大事件の認知について

以上のような、東亜同文書院の伝統も吸収しつつ、愛知大学は物資不足の時代ながら順調にすすみ始めたが、1952年にいわゆる「愛大事件」が発生した。この件はすでに前述したので、繰り返ささないが、本間学長は警察を信用せず、最後まで学生を擁護し、無罪とし、学生たちからの信頼を得た。愛知大学にとっては色々な面で県警捜査に足止めされた事件であった。

ここで対象とした卒業生たちはこの「愛大事件」から20年近く後になる。ここで対象とした卒業生たちはこの「愛大事件」をどのように認知していたかが、ここでのテー

マである。その認知レベルでまとめると、表3-E-3のようになる。「少し以上知っている」レベルは75%も占めており、高い認知率を示している。しかし、そのうちさらに「よく知っている」というレベルは、18%にとどまっており、「知らない」卒業生は22%を占め、風化の始まりをも予想させる。以下、①と②のレベルごとにその反応を見てみる。

①「よく知っている」

1967 年

「自由に対する姿勢」、「時代背景から当然では」「警察官との構内でのトラブル?」、「同窓会活動で、当時学生であった諸先輩も多くみえ、話も聞き、愛大史を知るうえで知っている」

1968 年

「適切な対応、評価もされて、誇りに思っている」、「大学の自由、自治を侵害されることは防ぐべきと感じた」、「愛大の自由、闊達な思想がまだ受け入れられない時代だったかな?」

1969 年

「本間学長の学生に対するも気合が素晴らしい。真の教育者だと思う」、「大学自治の大切さと勉学の大切さを感じた」

1970 年

「寮生だったので伝聞している」、「愛大の自由受難の意思に、学長の学生を思う忍耐と希望を感じた」、「大学は赤だという感じ」、「学長が学生を守る。日大の例を見ても愛大は立派である」

②「少し知っている」

1967 年

「本間学長の考えに敬服」、「学生時代に教えられた」、「自学の学生を心から守るという姿勢に感動していた」、「学

長が最後まで頑張ったことのみ記憶している」、「いやなレッテルをはられた」、「世間の評判は良くなかった」、「本間学長の対応」、「寮の落書きにびっくりした」、「警察はマークしていたのでは」

1968 年

「先輩や先生方から聞いた」、「真理を貫き、学生を弁護し続けた先生に敬服」、「本間学長に部全体がついていった」、「気概」、「当時は多くの他大学でもあったことなので不思議ではなかった」、「窃盗犯の偶然の事件から学生運動、暴力事件に発展。就職難」、「その時代の反映」、「少数の革マル思想に影響されたが、意味はなかった」

1969 年

「学長は大変頑張ったので大変だったと思う頭が下がる」、「学校側は、学生、学校を大切にしていると感じた」、「1952 年 5 月の警察によるキャンパス侵入に対し、学生が徹底抵抗した」、「本間学長の名声は知っているものの、事件の内容は知らなかった」、「地域の新聞、左翼活動と思われた」、「学校愛を感じる」、「有名な話として何度も聞いていた。学校の姿勢は立派だ」、「聞いた事が有っただけ」

1970 年

「若い純な気持ちと、正義感が必要」、「学問の自由は守るべき」、「最近では当然のような事案が当時は厳しく扱われていたようだ」、「少し聞いた覚えがある」、「大学の自治は必要」、「学生が浅はかではなかったか?」、「当時としては一般的」

以上、「愛大事件」後、ほぼ 20 年の卒業生の「愛大事件」に対する認知状況を見た。戦後 7 年目に発生したこの事件は、東西冷戦下の国際状況の中、直前に生じた東大がポロ事件や同様なタイプの事件がほかの大学でもでも生じた。しかし、東大は大事件とはならず、愛大を見せしめに使ったような感がある。なぜなら、愛大は書院をベースとしたとはいえ、誕生したばかりの地方の大学であり、簡単につぶせると踏んだのだろう。しかし、これを事件化した当局に誤算が生じたのは、戦後の最高裁事務総長をつとめ、愛大へ戻ってきたばかりの本間学長を相手にすることになったことであった。まずは学生を信じ、大学を守った本間学長の態度は、本間学長が常々モットーとしてきた「正義」そして「真理」を貫くものであった。また、この事件の発生をまだ戦前の臭いの残る警察やメディアが過激に報道し、愛大に一方的な色付けをし、地域へも影響を与えたことに、当時の学生たちやそれを伝承した多くの卒業生たちは同調しなかった。事件の事実の場の展開を目の前で見て、さらに本間学長の対応を肌で感じたからである。回答の多くはそれらを伝え、にじませている。

この、戦後の誕生間もない愛知大学を揺らした大事件を、風化させず、今後とも正しくどう伝えていくかは、愛知大学の大きな課題でもある。

しかし、本間学長はこのあとに発生した薬師岳遭難事故で、その責任を取って辞任し、本間学長が計画しつつあった農学部、水産学部、医学部、附属高校設立の新設を目指した愛知大学発展構想も泡と化した面もあった。

(4) 母校愛大への関心とその理由

では、まず、「母校愛大」への関心度はどの程度であるかについて関心レベル別に示した。それが表 3-E-4 である。それによると、4 レベルの内、①「最も関心がある」は全体の 35%を占め、それに②「多少関心あり」を加えると 85%と圧倒的な高さになる。③「普通」は 15%、④「関心なし」は 1 名となっている。

以下、それらの理由を年次別にみてみる。

①「大変関心」派

1967 年

「愛大で培った人間関係、知識が人生で役に立っている」、「地方出発展する大学の雄だから」、「出身大学の存続は卒業生として喜ばしい」、「職場に後輩が入ってきて、一緒に仕事できたから」、「一つ寂しいのは豊橋の学部減少。やはり農学部を設立してほしい」、「卒業後、同窓会活動でおおくの先輩に接したこと」、「少林寺拳法を大きなクラブにしたいから」

1968 年

「入学当時より相対的に評価が下がっていること、大いに心配だ」、「娘もお世話になり、出版の 2 冊も女性、同窓会奨励賞を受け、切っても切れない縁をかんじている」、「成長してほしい」、「後輩がさらに良い環境で学び、社会へ雄飛してほしい」、「母校愛」、「今日、私があるのは、4 年間愛大でのすべての経験があったから」、「戦後の歴史、愛大事件、マッカーサー、全共闘」、「〇〇学園といった創設者の名前のつかないところがよい。みんなの大学というニュアンス」、「青春の豊橋時代。多くの友人を

得たから、今の学生はどうしているかと」、「理事がしっかりしている。学生を大切にし、教授会、同窓会、府警、ネット界が学校を作っている」、「愛知という名が好き」

1969 年

「設立趣意書がいい」、「青春時代の心燃やした時代、場所だから」、「今後の大学の方向性に関心」、「母校である」、「中国との動静見ると愛大の存在は大きい」、「愛情がある」

1970 年

「後輩の卒業生が社会で活躍しているのがたのしい」、「少子化の中でどう存続していくか」、「卒業した大学だから」2 件

②「多少関心」派

1967 年

「母校だから、卒業生だから」2 件、「豊橋校舎を大切にしてほしい」、「スポーツでの後輩の活躍を」、「叔父さんの出身地」、「当時私大は、南山と愛大時代だった」、「名古屋の愛大」

1968 年

「建学の歴史」、「愛大の卒業生、そして母校だから」3 件、「4 年間、翠嵐寮にお世話になった。大石巖先生、小幡清金先生、佐野エンネ先生の授業を受けた」、「OB に関心」

1969 年

「かなりのレベルの卒業生が多い」、「会社に多数の後輩が来たから」、「新聞紙上に乗る数々の愛大の名前」、「先輩後輩、弁護士登録」、「母校だから」2 件、「少しでも皆様に良い大学ですねと思ってもらいたい」

1970 年

「卒業生としていつまでも変わらずにいてほしい」、「愛大で中国関係の催しがあると必ず参加する」、「愛大のレベルアップに関心」、「地元であり、良い情報に接するとうれしい」、「地域の経済社会へさらなる活躍に期待」、「卒業生として応援します」、「就職時に優遇されました」、「名古屋に本部が移り、親しみがなくなりました」

以上、いずれの卒業生も、レベルを超えて、愛大の発展とレベルアップを強く期待していることと、それを支えるベースにある母校愛が伝わってくる。

(5) 愛大情報の入手源

では、愛大情報の入手源はなになのかの回答である。表 3-E-5 はそれをまとめて示した。それによると、同窓会が発行している年 1 回の「同窓会報」で、次いで大学が発行している年 4 回の「愛大通信」となっている。しかし、大学が常時提供している「大学のホームページ」利用は少ない。これにはパソコンやスマホが必要で、この世代ではまだ不慣れな手段かと思われる。大学外の情報源では「テレビ、新聞」が第 3 位を占める「同窓生同士」、つまり友人同士の情報も第 4 位を示し、重要な情報源となっている。

ところで従来のこの回答では、「愛大新聞」は常時低位である。かつては書店などでも売られ、市民などにも読まれていたが、いまは学内の学生用で、内容的には豊橋と名古屋で方針が多分に異なっている。豊橋校舎の「愛大新聞」は開学以来の歴史をもち、学

生新聞として優れ、今日でも愛大史を検討する際、かつての記事を歴史的な情報として取り上げる価値は十分ある。かつての「愛大新聞」に負けない独立的な組織の確立とそこでの優れた人材の要請もできるように、その発展を期待したい。

その際、どのような情報を期待するかの回答も寄せられたので、それらを挙げる。

1967 年

「いつも地味なので、もっとメディアを使ったらどうか」、「卒業生の活躍ニュース」3 件、「在籍学生情報」

1968 年

「司法試験合格情報」、「教員の研究状況」、「政財界、企業での愛大卒生の活躍情報」、「中国語の活用」、「北陸での愛大のランクは下がっている。もとの姿にアップを」、「スポーツの活躍情報を」

1969 年

「とにかくレベルアップを」、「時代を見据えた感覚を」、「社会に貢献している学生の貢献をもっとアピール」、「今後の方向性と関東地区へのアピールを」、「スポーツ、特に野球と柔道情報を」、「現状、設備計画、出身校情報」、「政治をもっと学びの中へ」、「学生生活動や、教員の研究活動を広く情報発信して一般人にも伝わるように」

1970 年

「地域と一体化連携情報、就職情報」、「大学の近況と就職情報」、「もっと産学協同を積極的に進め、その情報を」、「有名人の講演記録を」、「OB にも利益参考になる情報を」

尚、今のままでよいという意見も複数見

られたが、大学への要望はレベルアップ化を軸に多面的に要望がみられ、卒業生の大学への関心は強く大きいといえる。

(6) 大学紛争について

「大学紛争」については、前章のうち、豊橋校舎法学科で状況説明を行ったので、ここでは、①「紛争契機」、②「紛争把握」、③「その影響」について年次別に回答を示す。

①「紛争契機」

1967 年

「大学紛争は卒業後なので契機は不明」

「1963 年～1967 年は、学内の紛争はなかった。ただ授業料値上げの話はあった」、「授業料値上げ・・・か」5 件、「時代の流れ」(変革、都会から地方へ、佐々木全学連副委員長の力) 4 件、「関心なし」2 件、「よくわからなかった」2 件、「忘却」、「目的わからず」、「代々木系と反代々木系の主導権争い。早く収まってほしいと」

1968 年

「よくわからない」5 件、「流れ」2 件、「当時他大学も同じだった」、「他大学の左翼系分子の介入」、「授業料値上げ」(早稲田が委員長、愛大が副委員長) 3 件、「社会構造ではなく、思想の違いとと思っていた」、「1963 年当時、本館裏に各マル派の看板があり覚えているが、紛争には無関心」、「流れ」2 件、「委員長など一部の人たち」、「国家が教育に介入し、学問の自由が損なわれるから」、「学校の秩序化のために、寮生は学生運動を止めに行ったように思う」

1969 年

「わからない」6 件(興味なし、ノンポ

リ、世の風潮か)、「授業料値上げ」、「安保反対」2 件、「大学自治への干渉」、「同級生で、立命や同支社の連中が卒業できるかどうか心配していた」

1970 年

「学費値上げ問題が学内で浮上していたように思い出す」4 件、「授業料値上げ。革マルのプロパガンだ」、「教員が学生、社会へ関心を持った結果の運動であった。安保、ベトナム専反対、学費、学問の自由」、「エンタープライズの寄港問題も」、「世界的、全国的な雰囲気」2 件、「わからない」2 件、「学生にとって自由であったことは大きい」、「授業料値上げ。大学の管理運営がらみ」、「授業料値上げ」、「全国的な反政府運動のはたらきかけ」、「学生は浅はかだ」、「大学紛争をどう把握」

②「紛争把握」

1967 年

「把握せず。興味なし」9 件、「一部学生赤あぶれ」、「一部学生の暴発」、「自治会の一部」、「麻疹のようなもの」2 件、「部活重視で関心なし」2 件、「紛争は権力闘争のようで、関心なし」

1968 年

「無関心」、「わからない」8 件、「貧乏学生な私は授業料値上げには反対し、政治闘争には不参加」、「紛争を手段化してよいか」、「部活動の一員として参加」、「暴力だけは反対」、「反体制派の友人からの情報」、「集会は何回も繰り返され、当時の大学はどこでも同じであった」、「民青と全共闘各マルからの要請。私学助成金」、「時代の反映」、「流れで参加した」、「学費値上げには関心が

あり参加したが、全共闘と民青の闘争に疑問を持ち、離れた」

1969 年

「授業料値上げ」2 件、(寮生の中にも)、「安保反対」、「大学自治への干渉」、「無関心」4 件、「入学時には下火」、「1、2 年は学生運動に参加したが、3 年のゼミに入ったら機運は消えた」、「授業が突然中止、迷惑だった」、「時の流れ」、「レッドパージということで「赤」とか反主流とか決めたこと。愛大へも偏見」、「寮生の中にも運動家がいたが、近づかなかった」

1970 年

「日常的風景であり、時には集会へ参加」、「少し横を向いていた」、「学内の立看、大学封鎖、少林寺の 5〜6 人で立看板を壊したり、封鎖された校舎の封鎖破りを行なった」、「時に友人に誘われデモへ」、「他の大学に追隨していた感もあったが、セクトの数が増えると、物々しさと、行動しすぎの感あり」、「社会に対して大きな迷惑をかけずに済み良かったと思う」、「ノンポリ、中核、革マル、民青など多くの意見や考え方が存在した結果だと思う。理論と行動はどの時代でも必要だと思う」、「興味はあったが、第三者的立場で対応」、「できるだけ関心を持ちたい」、「体育会系として、大学側を支援した。紛争は、周囲に迷惑をかけず、対話と議論で解決を」、「友人から」、「無関心」4 件

③「その影響」

1967 年

「友人からかなり影響。第 2 希望の就職へ」、「一切なし」10 件、「面接者と言

い争いになりました」

1968 年

「なし」16 件、「寮が 62 年の老朽化で、建て替え検討の時、寮が学生運動の巣窟となっていて廃止となり、建て替えができなくなったと聞いた時、私たちは、学生運動をつぶしに行ったのに、寮での人間形成ができなくて残念でした」、「当時、愛大は赤だといわれました」、「ベトナム戦争反対、授業料値上げ阻止で、就職府下となった」、「特に気にはならなかったが、愛大は赤だといわれたことが有る」、「寮生は学校秩序を乱す学生運動を止めに行っていたように思う」

1969 年

「影響なし」12 件、「社会人になったときに、人との出会いの中で、出身校を聞かれた時に、愛知大学は盛んでしたね、といわれた」、「運動部は学校側の考えだった」、「なぜ学生運動をやるのか不思議だった」、「在学中はまだ紛争までには至っていなかった。左翼学生のことは知っていた」、「愛大は赤か。でも自分は愛大で野球をやりたいかった」、「マル経に参加していた女学生が入水自殺した。結果、興味を失った」

1970 年

「影響なし」14 件、「学生として意思表示できたことは、社会での意思表示主張につながっている」、「物事をまっすぐに見る訓練をした」、「就職面接で紛争について聞かれたことはある」、「友人は就職に影響したと」

以上、1970 年代の大学紛争期の初期にお

ける愛大生の活動と対応についての回答を紹介した。今日から見れば、すでに 50 年前のことであるが、変動期であり、記憶に生々しく残されてきたものを吐き出していただいた感がある。このような記録は、多分他ではないように思われる。それだけにこの記録は、貴重な歴史の素材としての証人になるように思われ、愛大史の中でも特筆される価値を持っているように思われる。今後の研究テーマの素材としてもこの直後に続く時期調査分と他校舎各学部分と合わせて検討していくことができるだろう。

(7) 同窓会とのつながり

次は、同窓会とのつながりについての回答である。愛大の同窓生は 15 万人を超え、物故者などを除くと、ほぼ 10 万人が同窓会の会員である。各支部の多くは東北などの遠隔地は広域のところもあるが、都府県単位に分けられ、校舎のある東海地方では市町村単位のかきめ細かさで支部が設けられ、支部活動も行われている。その活動は東海地方の国公立の大学の中では、歴史も古く、活動も知恵を生み出しつつ活発である。

まずは、表 3-E-10 は、同窓会への支部活動も踏まえた回答である。それによると「時々」以上の参加レベルは、全体の半数に達しており、活動も含めた出席状況から、まずは活発に行われているといえる。その積極的に出席する「はい」の活発な回答者のグループの理由を年次別にみると次の通りとなる。

1967 年

「ゼミ、クラブ、地域でのつながりがある」、「現役で勤務していたころは複億の支部長を経験していたので出席。退

任後は欠席」、「愛大の門をくぐった人が、年度こそ違っても親睦を深めることができる団体はいいものです。何度か会うと、どんなことでも相談できるようになり、同級会とは違う魅力があります」

1968 年

「懇親会中心。持ち回りで幹事をしたことが有る」、「総会に出て情報交換をして広く人脈を作れる」、「ゼミ、クラブ愛知、クラブ OB 会活動で年中忙しいです」、「西尾幡豆会の一員として参加」、「学部長などがこられ、大学の現状などを聞き、良い方向に発展しているように感じた」、「年代を超えてのお付き合いはたのしい」、「入学時の仲間で 39 の会に参加。最近ではコロナで開かれていない」、「寮にいた人も多く、知らない先輩、後輩であっても学校の話をするれば懐かしい」

1969 年

「クラブの仲間」、「大いにありました。人生の生きがい。人とのつながりの大切さを実感しています」、「近くに先輩がいなくて、仕事もつながりがなく、そのつながりを求めて参加した。すこしはあったが、現役時代はあまりメリットはなかった」、「役員として参加している」、「年 1~2 回参加（千葉県）」

1970 年

「同窓生と億知り合えたこと」、「同士として腕を組んでいきたい」、「地元の先輩諸氏と交流。異業種との交流で大いに役立つ」

次は参加に「いいえ」の回答である。

1967 年

「必要がなかった」、「卒業後数年は参加していたが、昔話に興味がないので」

1968 年

「現在はコロナで中止しているが、毎年サークルの OB 会をひらいている」、「1〜2 度出席。＜提案＞学生時代から支部活動に参画していたら以後続くのかな」

1969 年

「東京の時代は組織があったが、札幌にはない」、「知人がいないのと、昔の思い出ばかりがつまらない」、「興味なし（東京に就職する同期生は少ない）」、「仕事で地元を離れ、また日比野生活に忙殺されて、余裕がなく、先輩、後輩、同期の人たちと全くつながりがありません」、「部活動で少々」

1970 年

「親しい友人がいないため」、「話題が違うので」、「後輩の集まりにはよく参加したが、」同窓会には参加しなかった」、「今まで 2 回参加。クラブのつながりが主です」、「活動の内容がわからない」、「サークルの OG 会しか親しみがない」

以上「はい」と「いいえ」のみ示した。「はい」の方は積極的に会を楽しんでいるようだ。「いいえ」の方は全くつながりを持っていないわけではなく、クラブなどとのつながりもある。また同窓会の内容がわからないとか、会が地元にないということもある。同窓会が情報を積極的に出し、他の地方からの出張時にも歓迎といった方法で、同窓会のない地区の同窓生の来訪を歓迎するシステムも作ったらどうだろうか。

次に「同窓会の魅力アップ」の方法の回答である。多くの回答をいただいた。

1967 年

「若い世代の参加を」、「九州大学においても同窓会に出席する方は現役で働いている方が多いようです」、「やはり、卒業後 10 年以内の若手に積極的に参加を」、「魅力の PR は難しいです。同窓会の魅力は入会して活動に参加するうちにわかります。入会するまでのハードルは年齢差（20〜80 代）です。若い人は躊躇してしまうのです」

1968 年

「視点を変えて、例えば論文を載せるとか」、「中日やマスコミに早急にアップを」、「若い人たちをどう集めるか」、「卒業生に卒業後の支部入会をすすめてもらう」、「もう少し、活発に知らせてほしい」、「学生時代に戻って若返ったような気分になりますよ」、「地域支部情報を積極的に機関誌で紹介したらどうか」、「支部活動に学生を無料で招待したら。お金は社会人がもつ」、「若い人は安い料金で参加を」

1969 年

「会員の関心事をテーマにした講演会も」、「これからの人生に付き合う人として」、「母校の教員、学生が頑張っている姿を伝える」、「時代の交流を通じてつながりを持ち、相互に助け合えるように組織化を。特に関東地区で」、「後輩に託したい思いを」、「定期的な情報収集。同期や上、下の情報も。参加しやすい環境も」、「社会貢献している同窓の人たちを、只の自慢話にせず、紹介を。サークルの輪の拡大を」、「全国的に学

術でも協議でも評判の高い人を呼べばそれにより一体感が高まり、参加者も増えるのでは」

1970 年

「小グループの会もよいとおもわれる」、
「コロナで中断中、残念」、「大きくなりすぎて、参加しがたい雰囲気です」、「非常に難しい時代にはいっているとおもいます」、「小グループによるイベントなどへのお手伝い、現役学生とのささやかな交流、愛大祭への参加など」

以上、色々な提案が出されています。それらも考慮し、発展していけばと思います。

(8) 大学への要望、提案

次は本体の愛大への見方、要望、提案を回答いただいた。次に紹介する。

1967 年

「自由な校風のまま進めばいい。運動部を強くして愛校心を奮い立たせてほしい」、「スポーツ、文化とも元気がない」、「こぢんまりとした一地方大学になってしまった。カステラの人間が多いのでは」、「名古屋中心となり、少々離れてしまう」、「豊橋の再整備、学生増を望んでいる」、「X 大は AI、Y 大は情報工学、愛大は数理ファイナンス・・・」、
「我々の時代よりは相当にレベルアップしていると思う」、「かなり◎◎(ママ、読めない)している」、「やはり、身近に感じ、愛着があります」、「司法試験の合格率や公務員の合格者数を見ると、レベルの高い大学になっていると思います。東京では青学あたり、愛知県内では某大学の評価が高いとききますが・・・」、

「私にとっては素晴らしい大学で、誇りに思っています。大学に入学し、考え方が実に勉強になりました」、「九州では愛知大学の情報は会報のみでしか知りえませんが、学生の部活動情報が会報に掲載されれば、卒業生としても生の現状を知ることができて、親近感を持続できるのではないかと思います」

1968 年

「近年愛大の偏差値が下がってきており、どこまで下がるか危惧して入ります」、「他の大学に比べ、アピールが少ないと思う」、「もう少し愛大の良さをアピールした方が良い」、「社会で役立つ優秀な人材を育てて、産業界へ送り込み、活躍してもらう(後輩のためにも)」、「豊橋校舎の充実と発展を望みます」、「攻めの大学運営を。良いアイデアを生かして」、「よく頑張っているが、もう少し部活に力を入れてほしい」、「笹島をもっと前面に」、「中部地区私学のナンバーワン」、「某大学では、新聞でも報道されているように、理事会が権限を集中して、問題になっています。あくまで教授と学生の大学であってほしい」、
「私の学生時代は石川県から毎年 20 人ほどが愛大へ入学し、富山からも多く、さらに北海道、九州、四国の出身者も多数在学していました。今、石川ではかつて愛大へ来ていた高校はみな Q 大へ行くケースが多く、愛大へは見当たりません。地方にも力を入れてほしいです」、「私立大の中で愛大はどのレベルにあるか知りたいです」、「愛大には理系の新学部を作ること、総合大学に

することが必要だ」

1969 年

「少し元気がないが、名古屋校舎は立派」、「特徴がもう少し欲しい」、「大学経営に対し、絶えず消極的、中途半端だ。同窓生を含め外部の意見を聞くべきだ」、「重点が東海地方だけにあり、他の地方への展開が弱い。PR 活動も弱い」、「質量ともに進化、拡大してほしい。一層の内部充実を期待します」、「もっと自由を。大学の方が見えない」、「諸先輩方の中で、活躍してこられた方々の話を聞く会があればよい」、「もともとの仕事柄新聞はじめニュースには関心がありますが、愛知大学のニュースはあまり目にしません。「発信心」を高めてください」、「全国的に地方出身者を優遇するが、愛大は中部 3〜4 県が大部分である。入学者がいなくなるから、地方同窓会もなくなるのでは」、「中部地方の基幹大学として、今後も活躍してほしい」、「笹島のキャンパスは素晴らしい。見学にも行った」、「大変頑張っているなあ」

1970 年

「豊橋から主要学部が移転してしまったことは残念」、「普通の大学になってしまった感がある。建学の精神は流れていますか」、「知名度が低くなった。全国から学生が集まらない」、「名古屋の 1 等地に立地したものの、世間の評価は高くなっていない」、「地道にレベルアップを図り、周囲が推薦する学校を目指してほしい」、「地域に根差した活動を多くしてほしい」、「豊橋の校舎が、本当の勉学の間になればよい」、「豊橋キ

ャンパスを大事にし、地域の皆さんとの交流を増やしてほしい」、「工学部の設立、総合大学化を期待したい」、「知名度の上昇、質の良い学生を輩出して、ますます学業の実績と社会貢献度が上昇していると思っている」、「自分が在学した頃と比較すると、学生の学力は上昇したとみている」、「中堅大学の地位を獲得し、信頼を得ている。地域社会との連携を」

以上、かなり厳しい意見や提案も含め、多数の回答をいただいた。これまでのアンケート調査で、最も多くの御意見と提案を回答していただいた。確かに、コロナ前から、愛大を見る眼には厳しいところがあり、愛大に檄を飛ばしてくれた卒業生は多い。かつてはこの地域のリーダーであった愛大が、すっかり目立たなくなってしまったという卒業生からの反応である。十分考慮していく問題であり、こういう声を上げて向けてくれる愛大の歴史的な層の厚さとそれを愛してくれる卒業生たちの信頼の強さを改めて認識している。

(9) 後輩の学生たちへ伝えたいこと

愛知大学を卒業し、50 年、半世紀を実社会で生きてきた今回の卒業生は、国内経済だけでもバブル期やオイルショック、さらなるバブル期、そして長期化したデフレ期と、ダイナミックな変動の中で対応しつつ生き抜いてきた。多くの経験を積み、それを後輩たちへ伝えともらおうという「回答」である。

1967 年

「卒業してからの努力が大切です」、

「愛大卒の誇りを胸に。しかし、決して大卒の学歴をひけらかさないように」、「何事も他大学に勝るように。自分たちは写真部で他大学をリードしてきた」、「素晴らしい環境での学生生活を満喫してほしい」、「大学の PR をしてほしい」、「責任のある行動を」、「学生時代にしかできないこと、たとえば、海外留学、特に外を見ること」、「自分の努力で成し遂げることはとても立派ですが、人間関係、人脈も重要です。その一つとして同じ門をくぐった卒業生が組織している同窓会に参加してください」、「若い時は、名古屋で」

1968 年

「「ピンチがチャンスだ」といつも心がけています。コロナの今こそチャンスです」、「4 年は長いようで短い」、「日々を大切に」、「知を愛する探究を目指してほしい」、「バイトもいいが、もっと学生生活を充実してほしい」、「愛大の卒業生であることに誇りを持つこと」、「名声を高めて」、「やればやれる。学業、サークルに集中。愛知大学の魅力を自分のものとし、4 年間で燃焼してほしい」、「小さくまとまらず、大きく活躍してほしい」、「小生は就職してから 42 年間働かせていただいた。何でも努力してほしい」、「なんでもチャレンジ。失敗を恐れるな。グローバル思考を」、「文武両道」、「社会で大いに活躍してほしい」、「多様化するこれからの社会。強い信念。何事もやり遂げる精神力。人脈を作る」、「国内外に多くの友人を持つ」、「コロナ下で難しいとは思いますが、まず、仲間づくりと地域を好きになることだ

と思います」、「東亜同文書院は大阪大学ほどの学力があったと聞いています、伝統もあり、健全経営の学校であり、誇りをもって学んで活躍してください」、「知と自由を学んでほしい」

1969 年

「中国の実態をよく学ぶ」、「こちんまりにならないように」、「未経験のことに積極的にチャレンジし、自らの可能性を見極めてほしい」、「関東、関西への進出を進めてほしい」、「北海道 OB の組織化ができればうれしい」、「もっと、勉学にスポーツに励めよ。給付金で悪いことをするなよ」、「プライドと向学精神をやしなう」、「他大学には負けない気質を持つ」、「先輩たちを利用するように（先陣を切って一流企業に入社できたのに、後輩を入社させることができず、申し訳ない）」、「何か一つ頑張つて」、「自分が最も興味を示した分野には一層深くまで追究してほしい」、「努力は大切です」

1970 年

「愛大と自信をもって行動してほしい」、「地域政策学部が設立した未来塾に参加した。地域政策学部の学生を受け入れたい。旧制大学である愛知大学の歴史を自負して頑張つてほしい」、「「主体性の確立」を特に身につけてもらいたい」数多くの友人を作る努力を惜しまずに精進ください。女性の友人も大切です」、「自主独立」

以上、それぞれの卒業生が長い人生を経ながらの、珠玉の言葉です。それぞれの卒業生の人生がつまっております、ドラマもあった

はずです。それだけにその普遍性にも触れながら卒業生の人生も構想し、在校生には参考にしてほしいです。

(10) 愛知大学から得たもの

まず、表 3-E-14 は、「人生をふりかえった時の満足度」の回答をまとめたものである。それによると、「大いに満足」は約 25%、「まずまず満足」を加えると約 75%が満足していると回答している。「不満だ」とする回答者は 4 人で 5%ほどである。

では、次に、表 3-E-15 で、その満足度と「愛大卒業生である」こととの関係を見ると、「大いに関係」あり、は人生の満足度と同じ 25%、「多少関係あり」とする回答も加えると、52%となり、ほぼ半数は「愛大卒」と関係があると評価している。一方、「関係があまりない」に「全く関係ない」を加えると、約 20%を占める。完全に違う分野へ向かい、その中で自力でがんばった、などの人生であったということであろう。

全体としては、人生にほぼ満足し、うち半分は愛大卒に満足しているということになる。

では、「愛知大学」から得たもの、そして座右の銘があればその回答の回答を年次別にみてみる。

1967 年

「ゼミ活動」、「近代経済学に対する知識」座右の銘「我事に於いて後悔せず」、「旧帝大をおもわせる緑豊かで木造校舎との調和。教授陣は旧帝大出身者が大半。そして女子短大があり、男女共学のような学風。そういった下でクラブ活動に没頭し、学問を厳かにして最高学府の称号をいただいた。恥ずかしい

限りで得たものは？よくわかりません」、「温厚な人間関係かな。人の嫌がることはしない」、「日々是好日。感謝」、「自由」、「人の悪口は言わない」、「学生寮の集団生活」「学生食堂の運営」「教職員の皆様の思いやり」、「自由な生き方の大切さ」座右の銘「愛大生よ、鈍重な「おの」であれ」、「自由と仏事に対する興味」、「座右銘「鶏口となるも牛後となるなかれ」、「良い先生に出会えたこと。現在も交流」、「自分の信じたことに向かって努力」、「人間関係、前身」

1968 年

「4年間友人もでき、すべてに集中できたこと。その環境が大学「にはあった」、「座右銘「忍耐、努力、精神、そして人生は楽園なり」、「質素、質実剛健」、「寮生活で学んだ。上は建てる、下はかわいがる、で、上は引きあげてくれる。下は支えてくれる、「知と自由」、「このようにアンケートを書く悦びと絆です。ピンチがチャンス」、「OB 会との絆」、「謙譲の美」、「授業料も他大学より安く、勉強に努めることができた」、「自由な勉強と発想。探究心と死ぬまでの勉強」、「優秀な先輩の存在と友達」、「一期一会」、「絵画クラブで仲間と趣味を継続」、「直な心と今を大切にすること」

1969 年

「人とのつながり。座右銘「誠心誠意」、「寮生活の仲間。19 人会を作り、年 1 回集まっている」、「人とのつながり」、「継続性。知を愛する」、「筆と書」、「知を愛する。いくつになっても勉強。人との付き合い」、「やればできる」、「人生の良き友を得た」、「思いやりを持った人

偏形成」、「人間関係の大切さ」、「学生時代の頑張りがその後の人生を支えてくれたように思う。—「大悲無倦常照我」（親鸞の「正信偈」の一部）」、「常に正義を愛し、何事も実践出来得る人間に」、「友人」、「スクラップ アンド ビルド」、「友達が良かった。多くの良い友達」

1970 年

「自由の大切さ」、「主体性の確立」座右銘「今が旬」、「平等の精神」、「クラブと授業で忙しく楽しい 4 年間でした。道着姿で授業に出席し、学生食堂でカレーライスを食べ、隣の床屋で丸刈りにしたり（東海リーグで負けた時）。そのすべてを思い出として得たものです。座右銘「青春は良き哉」、「県庁の採用試験で高校から名大法学部へ進学した同級生が、「採用試験受かるのは・・・」と言った。彼は不合格で、自分は合格したこと」、「恩師との関係は大切に」、「4 年生の時、「日本学生経済ゼミナール」の大会が愛大で行われ、私は実行委員として活動しました。この大会を迎えるにあたり、第 15 回大会が福岡大学で行われ下見もしましたし、中部地区大会もあったように思います」、「誠意」、「学生生活は人生の中で一番楽しかった」、「常に学ぼうとする心を持つこと」、「個性豊かな友達と接することができ、自分の世界が広がりました」

以上、回答者の多くが、学生時代に多くのものを得、こよなく愛大生活を愛していたことが浮かび上がってきます。

(1 1) 刊行物など

1967 年

太田昌利：「ただいま自分史作成中」
安田守彦：「月間経済史へ寄稿（相続対策）」

1968 年

加古文雄：「幡豆町（現西尾市）の戦後史」、「年表でたどる一色町（現西尾市）」、「吉良家 800 年・元禄事件の真相・創作され続けた忠臣蔵」
土屋和夫：「不動産仮差押の活用、法的回収の色々」
藤岡延也：「12 年前から愛大 OB の仲間と絵画サークル展を開催。」「あいび展」、愛知大学 OB、「OG 絵画展」

1969 年

菊池 等：「茨木健時代の業界誌の編纂と新潟東ロータリーでの地域社会への貢献」

(1 2) 愛大時代の思い出

(次ページ参照)



豊橋校舎「法経学部 経済学科」(12) 思い出

1967

アルバイトでろうあ者の中学生の家庭教師をした事があり、人に教える事の難しさを知りました。従って、教師には絶対にならない、なれない事を悟りました。

ゼミナール中心。その中にアルバイト(家庭教師)タイプアップして。

夏期、北アルプス単独全山縦走(テント泊、17泊)に成功! ※S38年山岳部の冬山・薬師岳遭難事件のことを終始意識しながら、安全登山で完登しました。

試験(本、辞書持込可)でカンニングと認定され、必死で無実を証明した事です。入学式で学長が愛知大学は愛知県にあるからではなく、暫(知)を愛する大学であると。かつ愛大生はカステラの人生ではない活動を!! 豊橋校舎でのサッカーリーグ戦に、応援団がエールをおくってくれた事(当時の応援団は野球部が柔道部への応援が主?)。

下宿生活と昔の陸上の教官が近くにいました。戦死したおじさんの話と写真を見せて涙してくれました。

学祭。

学生食堂の利用は寮生のみならず、大学の近くに住む下宿の学生、平日は通学の学生なども利用していましたが、食堂の運営にあたって、価格の決定、衛生管理、栄養管理等について大学の職員の方にご指導いただいたことを忘れることができません。

下宿先での自由な時間、仲間とのふれあい、楽しい。

ゼミナールで屋外で勉強したこと。他校(名古屋市立大学)へ訪問したこと。

自動車部で、1・2年はいつも洗濯当番、スクールバスの車掌。友人として今でも交流があります。4名。

3年生になった春、フォークダンスクラブの顧問の森岡太郎先生に呼ばれ、今年から女子短人の体育の授業で社交ダンスをすることになったので私の助手として授業に出てほしいと頼まれ2年間授業に出た。学生から私の事を知らないの先生と言われたのには悪い気はしなかった。(当時はフォークダンス部員で唯一、私が社交ダンスを少々踊れた関係。)その後、女子短大生より社交ダンスクラブを作って欲しいと要望があり愛好会として発足した。

東祭、学園祭。先輩、同輩、後輩との人間関係を勉強させて頂いた。御苦労様でございます。ありがとうございます。

1968

勉強をしない不良学生であったが、それでも卒業証書をくれたことは、今となれば大変ありがたいことです。これまでもまず生きてこれたのも愛大あってこそだと思う。

理論経済学のゼミで中部学生ゼミ大会で発表したこと。

愛大祭で仮装して市中をパレードしたこと。経済学研究会で、全国経済学研究大会(横浜)へ行ったこと。県内の大学の証券研究会で発表したこと。ゼミ生で卒業旅行したこと。学術研究連合会の委員長になり、愛大祭、研究会対抗ソフトボール大会、総会(研究会への予算割り当てなど)行ったこと。

泊りがけのゼミ、研究会。各ゼミ生宅を泊まり歩いたこと(全国)。

部活動で、仲間が多いにできた。協力もあった。

寮生活について。入学時一年生は全員、夜中に起こされ、グラウンド横の地面に正座させられ、高校迄出て、人に対する挨拶、言葉遣い、礼儀がなっていないと長時間脱教され、グラウンドに向かって大声で挨拶の練習をさせられた。次の日からは先輩と会う毎に1日何百回と挨拶をする生活が始まりました。又、無礼講という日がたまに有り、その日は先輩は寮に寄り付かなかった。寮は自治寮であり、食事

「全共同運動」を横目で見ていたが、参加していればよかったと後悔しています。

卒業の年、東北大学にて全国サークル活動発表会があり、経済学史サークルにて参加したこと。発表は3学年の方が中心になって行って頂いたが、ここに愛知大学在りの様な発表会となった。

良くも悪くも空手部での四年間。

当地方の大学をみてても地味な大学である。それが為にも小生も42年間の長期に渡り働くことができた。実兄、私と2代に渡り学ぶことが出来、現在に亘ることは愛大卒であり感謝しております。

クラブはユースホステル部で全国を旅したことです。

学園祭、ESSディベートコンテスト。

現在の様にアルバイトもなく、自分で収入を得ることは難しく、親の仕送りを大事に生活をしたと思う。

寮(思春寮)での集団生活。今でも便りを交換している。

授業には積極的に参加しませんでした。田舎者の私は愛大豊橋校舎の雰囲気が好きでした。いつまでも残したいですね。

1969

野球で北海道へ試合に行ったこと。

国家試験の初めの科目が合格でき、社会人としてのスタートが幸先よく始まった。

先輩・同輩の恩。

3年暮、全国大会に出場（硬式野球部）。

4年間の応援団生活。特に一年時、最初の暮合宿。厳しい部活環境の精で、社会の中で力強く、逞しく生きてこられた。

新規にクラブを立ち上げ、4年間で文芸連への加入をした事。演劇会を定期的に開催し、豊橋公会堂で演劇会も思い出である。ただ残念なのは、豊橋校舎が分散し、現在部会が存在すらもあぶない上、活動が報じられないのは残念。

自由な学問の研鑽と、裕次郎の映画（黒部の太陽）とNHKドラマ（旅路）のエキストラ出演は一生の思い出！？です。

今も現役で活躍されている大垣日大野球部の阪口監督。そして愛大野球部時代の故原田監督。見知らぬ地方高校からの私を、陰からよく見て下さいました。そして現役当時、全国大会にまで導いて頂いた。野球というスポーツを通じて、以後の社会生活の中で、私の学んだ全てであると思います。

部活動に「愛知大学男声合唱団」に入部して、事あるごとに大学祭歌を歌って、豊橋の街を“かっぽ”したことが思い出として残っています。自分なりに努力はして来たと思いますが、大企業に就職出来た事が現在人並みの生活が送れている原点でもあり、大学の野球部関係者の方々のご助力があったからこそ感謝しております。

やはり詩吟部の活動。勉強をもう少しやりたかった。

ノンポリだったが今思うと想い出になることを経験しておけば良かった。学園祭。大学一豊橋駅までのミコンパレード。何というでも、「思春寮生活」2年間の思い出。寮祭、極めて安価で運営されていた「寮食堂」。ほんとうに「金」の少ないものばかりが楽しく、そして先輩、後輩の封建的な上下関係まであったりと、今思うととても社会常識とはかけ離れたのがよい思い出となったこと。

女子短大生の乗馬姿や弓道の練習に精を出す学生の姿が、貧乏な学生になんと眩しく写ったことか。2年生から移った豊橋キャンパスで見た光景です。

授業ボイコットはつらかった。社会人としては、愛大の卒業生に大変世話になりました。

たくさん場所に出かける事が出来た（クラブ活動にて）。ほぼ日本中。

1970

馬術部の人達のスポーツクラブとしては全く上下関係にこだわらない自由さと親しさ。

4年間愛大のキャンパスにいられた事に感謝。

ゼミの仲間と研修旅行した時。ゼミの仲間と山田教授と酒（ビール）を飲み談話したこと。早や先生は先に天国に逝かれましたが、私もそろそろの体調になってまいりました。どこの世かで先生ともう一度ビールをゼミ仲間と飲みたいものです。

特にない。

とても自由でのびのびとした学生生活を送れ、時には部活の意を閉め切って何日も読書三昧の日々を送れた。

同窓会のメンバーが高齢化し次世代への引き継ぎが心配。同窓会費の入金は入学時に取り、活動費を作るのが良いのではないかと。OBが社会で活躍している事を示すのが愛大の評価を高めるので活動をPRすべき。理論経済学系のゼミ全国発表会があり、友人が発表の機会を得て、仲間とともに発表資料を手伝い、福岡大学まで発表に同行したこと。

浜松に実態調査に行き、ゼミの仲間とひと時を過ごしたことも。

弓道部に入部したS41年秋期リーグ戦で優勝が途絶えた為、部員一同坊主頭になる（伝統ある弓道部を離れていく決意を新たにす）。豊橋駅前から愛大まで自動車部管理のバスで、構内で運賃として10円を渡した。「学内紛争」時に、大教室で体育会各代表者と共に最前列で学校側と連座し対抗した。

友を得た事。

中国の文化大革命。細迫先生の講義で月曜日の1時間目のこと。他の学生は1人もなく、私1人だけだったが細迫先生は最後まで講義をしてくれた。

16に関連。県庁採用者の内訳は国立大、関関同立、東京六大学クラス。愛大で学んで採用された。それが自慢(?)である。

定期演劇会は今も続いていると思いますが（コロナで?）、第1回の実行委員長だったこと。京都府会、大阪厚生年金会館などで演劇会を催したこと。ほとんどサークル活動です。

自由な学園風土。

豊橋校舎「法経学部 経済学科」1968 年卒業生

(12) 思い出

寮生活について

入学時一年生は全員、夜中に起こされ、グラウンド横の地面に正座させられ、高校迄出て、人に対する挨拶、言葉遣い、礼儀がなっていないと長時間説教され、グラウンドに向かって大声で挨拶の練習をさせられた。次の日からは先輩と会う毎に1日何百回と挨拶をする生活が始まりました。又、無礼講という日がたまに有り、その日は先輩は寮に寄り付かなかった。寮は自治寮であり、食堂におばさんを雇い、食券代を決め、寮食堂を運営していた。麦めし、赤だし、とおかずが付いた食事で、私達の頃は一食45円、又25円出せば別のおかずが追加出来ました。当時は学食が平均70円位で、夜食等外食すれば100円位だった。寮費は月500円で、親が年額6000円を先払いしていたので、1万円有れば、寮での生活が出来ました。寮は元士官候補生の宿舎で一つの寮で25室位両側に有り、入口は前面に二つ、左右の一つずつ有りました。部屋は二人部屋で天井が高く、10畳以上あって左右にロッカー、ベッド、本棚と机が有り、大きな窓が一つ付いていました。寮の規律は厳しく、寮祭、寮運動会（全国ブロック別対抗）、小旅行等が行なわれ、マラソン等の同好会も作られていました。全寮長、寮長、各係が選出され、厳格に運営されていました。勉強する人は部屋にこもっていたが、武道部（空手、〇武道、剣道、少林寺拳法等）の人も多く、寮生はバンカラで、近くに柔道部合宿所（一年中）も有り、大声で挨拶し、着物等で居たりするので、女子学生は北門から入って来なかった。寮での共同生活、規律は社会に出て大いに役立ったと思いますし、一生の友人とも出会いました。

クラブ活動について

昭和38年、39年に豊橋校舎で軽音楽部（ロック、プレチャーズ）とモダンジャズ研究会（ジャム、グルービーズ）が同好会として発足しました。当時、コカコーラ主催で、全国大学対抗バンド合戦というのが行なわれており、関東、関西、中部で予選が行なわれ、各地区でベスト8が公開演奏により、中からベスト5が決まり、決勝大会となり、優勝、準優勝チームが全国優勝を決めるものでした。昭和41年の中部地区大会に、（各々天才が居て）二つのバンド共にベスト5に入り、プレチャーズは準優勝し、全国大会でも優秀バンドとして日本一の学生ロックバンドとなりました。この事が有ったので、昭和42年12月23日（土）ブルースターズ、ジャズオーケストラを加え、金沢で愛大軽音学部演奏会を開催しました。当時ロックは不良の音楽とみなされる事も有り、金沢市の観光会館（24人収容）では演奏禁止となっていました。しかし日本一のロックバンドがメインである為、ブルースターズをバックに付け、間奏や合いの手を入れてもらい、無事終了しました。会場には千人近く入れる事が出来ました。名古屋から普通タイヤのバスで雪の降り始めた、福井の峠を越えて来たと聞いてビックリしました。モダンジャズ研究会では、ダンスパーティ、演奏会等がよく有りましたが、昭和41年の夏休み1ヶ月間は、島原市の南風楼ホテルの海に面した庭園のビアガーデンで演奏するアルバイトが入り、6人で行きました。ギャラは部に入りましたが、ホテルの大部屋で素泊まり、食事もなく、夕方から3時間演奏するだけで、日中は客が帰った後、夕方入る迄合宿練習が出来、途中名古屋で演奏会が有った時は、旅費を出してもらい、又部員の誕生会もしてもらい、日曜日は観光に連れて行ってもらったりして、夢のような楽しい生活を体験しました。卒業後、当時のクラブのメンバーとは、豊橋のジャズバーで同窓会を行い演奏をして来ました。寮、クラブの人達とは、年賀状、電話、同窓会等で交流が続いています。

表 3 系

A-1

法経学部経済学科 豊橋校舎（昭和42～45年卒）

卒業年 生年	S42 1967	S43 1968	S44 1969	S45 1970
昭和16年	1			
昭和17年	1			
昭和18年				
昭和19年	15	4		
昭和20年	3	18	1	1
昭和21年		1	14	3
昭和22年			7	12
昭和23年				7
未回答			1	1
計	20	23	23	24

A-9・10

授業料・生活費の工面 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	82	82
2. 親戚・縁者から	1	1
3. 奨学金から	7	8
4. アルバイトから	19	32
5. 給料から	0	0
合計	109	123

A-5

本学を知った理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
地元、以前から知っていた	19
自宅や高校に近い	3
唯一通学可能な大学	1
親	2
兄	5
従兄弟	1
おじ	1
親戚	1
友人	2
知人	1
地元の同級生が受験するから	1
先輩	3
高校教員	13
高校	10
大学案内、進学資料	6
雑誌、本	6
永井道雄の全国の大学に関する著作	1
新聞	3
私大見学会	2
県内大学を調べた	1
入学金、授業料が安い	1
二次試験があるから	1
歴史のある大学だから	1

内訳

地域、地域住民、入学前より承知、地元大学、愛知県在住
近くの大学

兄の勧め、実兄が愛大卒
在学中

担任の紹介、学校からの紹介、高校のすすめ

学校、高校内、高校の情報

高校へ来ていた入学案内、全国大学案内、募集案内、私大一覧
大学受験雑誌、大学案内雑誌、受験本、蛍雪時代

スポーツ欄（愛知大学野球）

読売新聞社主催、名古屋の私大ツアー

表 3 系

A-2

出身地

東三河	豊橋	15
	豊川	1
	田原	3
	渥美町	1
	蒲郡	2
	新城	1
	設楽町	1
西三河	豊田	6
	小原村	1
	西尾	3
	一色町	1
	岡崎	1
	刈谷	1
	安城	1
尾張・知多	碧南	1
	名古屋	7
	一宮	2
	犬山	1
	大府	1
半田	半田	1
	袋井	2
静岡県	浜北	1
	磐田	1
	天竜	1
	三ヶ日町	1
岐阜県	岐阜	3
	大垣	2
	関	1
	輪之内町	2
	垂井町	1
三重県	津	1
	四日市	1
	桑名	1
	尾鷲	1
	明和町	1
その他	石川県	4
	岡山県	2
	鳥取県	2
	北海道	1
	福島県	1
	富山県	1
	福井県	1
	滋賀県	1
	兵庫県	1
	島根県	1
	広島県	1
	山口県	1
	福岡県	1
	徳島県	1
	合計	90

A-3 ①

出身高校

東三河	成章	4
	桜丘	4
	時習館	2
	豊橋東	2
	豊丘	1
	豊橋商業	1
	豊橋工業	1
	新城	2
	国府	2
	蒲郡	2
西三河	豊田西	4
	西尾	3
	一色	1
	岡崎北	1
	刈谷	1
	刈谷商業家庭	1
	安城	1
	碧南	1
尾張・知多	中村	2
	名古屋西	1
	明和	1
	市立中央	1
	東邦	1
	享栄商業	1
	大同工業	1
	一宮商業	1
	犬山	1
	滝	1
静岡県	大府	1
	半田商業	1
静岡県	袋井商業	2
	磐田商業	1
	浜松北	1
	浜松南	1
岐阜県	長良	3
	大垣南	2
	岐阜商業	1
	羽島	1
	不破	1
	岐阜県立高校	1
三重県	桑名	1
	四日市商業	1
	松阪	1
	尾鷲	1
	高田	1

A-3 ②

出身高校

その他	金沢（石川）	2
	金沢二水（石川）	1
	実践商業（石川）	1
	新見（岡山）	1
	天城（岡山）	1
	鳥取東（鳥取）	1
	米子西（鳥取）	1
	旭川北（北海道）	1
	福島（福島）	1
	新湊（富山）	1
	武生（福井）	1
	虎姫（滋賀）	1
	市立琴ヶ丘（兵庫）	1
	大社（島根）	1
	神辺（広島）	1
	柳井（山口）	1
	大牟田南（福岡）	1
	徳島商業（徳島）	1
	未回答	5
	合計	90

表 3 系

A-7

入学理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
受験に合格	8
受験に失敗	8
二次試験があったから	1
地方受験ができたから	1
自宅通学が可能、通学に便利	15
学費が安い、経済的理由	16
親戚が大学の近くに住んでいた	1
地元だから	9
高校教員	6
先輩	4
同級生、友人	2
父	2
兄	2
従兄弟	1
身内	1
愛大に家族や同級生が勤務	2
経済学に興味	3
経営学に興味	1
中国語に興味	1
英語の修得	1
教職課程	2
設立趣意書、建学の精神	3
環境、緑の多いキャンパス	2
自由な校風	1
教授と学生だけで設立し運営されている	1
個性のある教授陣	1
スポーツ、学生生活	3
入りたい学部があったから	1
大卒の資格が欲しかったから	1
編入希望	1
地元で働きたかったから	1
学業と家業が両立できる	1
私学では比較的有名	1
永井道雄の著書に記載	1
県名がついた大学	1
安定、信用がある	1
父がハルピン学院卒	1
家族から書院のことを聞いて	1
旧制大学	1
父が衛生兵として豊橋勤務	1
なんとなく	1

自由受難の鐘



表 3 系

B-1
学業の位置

	人数
学業が主	39
どちらかといえば学業	13
学業はまずまず	30
学業は従	6
どちらかといえば、まずまず	1
無回答	1

B-8
在学中の満足度

	人数
大いに満足	21
まずまず満足	44
まあまあ	19
あまり満足していない	4
無回答	2

B-9
学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	13
まずまず	31
まあまあ	19
あまり	23
無回答	4

豊橋校舎学生寮

豊橋キャンパスには、旧陸軍の兵舎を転用するかたちで設けられた学生寮『思草寮』、『翠嵐寮』があった。老朽化により、1987（昭和 62）年閉鎖され、1988 年には取り壊された。現在、跡地には記念碑が建てられている。



表 3 系

B-2

興味	※複数回答
	人数
ゼミ (花村)	3
ゼミ (木村)	2
ゼミ (村上)	2
ゼミ (安藤)	1
ゼミ (紺野)	1
ゼミ (山田)	1

近代経済学	8
マルクス経済学	8
経済原論、経済原論2部	5
経営学	4
金融論	3
経済史	3
財政学、財政論	3
貨幣論	2
経済政策	2
経済地理学	2
計量経済学	2
ロシア経済論	2
アメリカ経済論	1
会计学	1
経営学概論	1
経営学総論	1
経営理論	1
計画経済	1
経済学史	1
交通経済学	1
中国経済	1
統計学	1
日本経済	1
理論経済学	1

中国語	6
英語、英語会話、英文科	4
ドイツ語、ドイツ文学科	3
フランス語	2
ロシア語	2

哲学	3
文学、文学一部	2
自然科学概論	1
社会学	1
宗教学	1
物理学	1
倫理学	1

B-3

印象に残った先生	※複数回答
	人数
木村憲二	9
村上雅子	7
大石岩雄	5
久曾神昇	5
内田 (内田良平の兄)	4
花村芳樹	4
山本二三丸	4
安藤万寿男	3
今泉潤太郎	3
金子敬生	3
佐野エンネ	3
鈴木拓郎	3
細迫朝夫	3
山田文雄	3
吉尾	3
大島国雄	2
胡麻本	2
高桑幹夫	2
野間清	2
堀井	2
山田 (経済政策)	2
ロシア語の先生	2
池上貞一	1
歌川	1
大内	1
岡崎	1
小木曽	1
小此木	1
門屋	1
桑島	1
紺野	1
玉城肇	1
張禄沢	1
富岡裕	1
中西	1
西田耕三	1
野崎	1
野村	1
林要	1
藤田	1
本間喜一	1
松木	1
松村一隆	1
山下	1
若江	1
英語の先生	1
近代経済学の先生	1

B-4

ゼミ	※複数回答
	人数
村上 (近代経済学、ケインズ経済学)	6
山田 (福祉国家論)	5
紺野 (会計学、財務会計)	4
安藤 (経済地理、地域経済)	3
金子 (計量経済学、近代経済学)	3
木村 (近代経済学、理論経済学)	3
花村 (商業学)	3
山本 (資本論)	3
吉尾 (金融論、金融理論)	3
大石 (経営計画)	2
大島 (ソ連経済学)	2
小幡 (財政学)	2
木村 (日本福祉国家論)	1
玉城 (経済史)	2
林 (金融資本論)	2
山田 (経済原論、経済政策)	2
一条、花村 (現代の経済学)	1
今泉 (中国語の発音)	1
富岡 (社会主義経済論)	1
野崎 (中国の生産管理システム)	1
野間 (中国経済)	1
野村	1
正木 (国際貿易)	1
村松 (日本経済論)	1
村長 (農業経済)	1
山下 (統計学)	1
原2の先生	1
能楽に詳しい初老の先生 (観光論)	1
(社会主義経済学)	1
(税務)	1
(ソビエト経済)	1
(地元商業の調査)	1
(理論経済)	1

表 3 系

C-1 参加していたクラブ・サークル名 ※複数回答あり

	人数
応援団	1
剣道部	1
弓道部	1
空手部	1
少林寺拳法部	4

サッカー部	2
硬式野球部	2
準硬式野球部	1
野球部	1
バレーボール部	1

硬式テニス部	1
卓球部	1
ゴルフ部	1

ワンダーフォーゲル部	2
フォークダンス (F.O.C)	3
社交ダンス部	1
ダンス部	1
馬術部	1
ボート部	1
自動車部	1

軽音楽部	2
ギターアンサンブル	2
モダンジャズ研究会	2
ジャム グルービーズ	2
男声合唱団 (グリークラブ)	2
詩吟部	2
ユースホステルクラブ	2
写真研究会	1
吹奏楽部	1
邦楽研究会	1
絵画クラブ	1
将棋クラブ	1
E.S.S.	1

会計学研究会	4
金融理論研究会・サークル	3
経済学研究会	2
理論経済学研究会	2
広告研究会	2
中国語会話同好会・クラブ	2
経営学研究会	1
経営学史研究会	1
金融資本研究会	1
証券研究会	1
国際問題研究会	1
文学研究会	1
聖書研究会	1
ハワイアン研究会	1

C-2

クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	57
まずまず	8
あまり参加しなかった	5
無回答	20

C-4

クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	29
まずまず	25
まあまあ	7
あまりなかった	5
無回答	24



表 3 系

D-1

卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	8
やや積極的	7
普通に	39
あまりしない	22
全くしない	12
無回答	2

D-2

卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	8
やや厳しい	22
普通	36
あまり厳しくない	16
全く厳しくない	4
無回答	4

D-4

希望した分野への就職

	人数
はい	41
なんとか	14
意識せず	19
意に反して	7
無回答	9

D-7

愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	35
少し	23
特になし	25
無回答	7

D-6

就職でお世話になった人

※複数回答あり

	人数
大学就職課	16
愛大卒業生	11
知人、友人	12
自力	31
就職先	5
ほか（親、身内、教授、野球部関係者、取引先、試験、なし）	17
無回答	9

表 3 系

D-5 ①

就職先

名称	所在地	(人)
アイホン	名古屋市	1
アサノボール	東京都	1
アトラスピアノ	浜松市	1
石原ニット	豊橋市	1
大塚製菓	東京都	1
小原建設	岡崎市	1
加藤建設	蟹江町	1
岐阜トラック	岐阜（本社）、東京都	1
キャタピラー三菱	相模原市	1
協豊製作所	豊田市	1
啓明交易	東京都	1
酒井会計事務所	名古屋市	1
三工商事	名古屋市	1
三乗工業	岡山県総社市	1
三友工業	小牧市	1
三洋電機空調	群馬（本社）、名古屋（支店）	1
三和化学研究所	名古屋市	1
スズキ	浜松市	1
総合開発機構	東京都（本社）	1
第一パッケージング	東京都	1
ダイエー	神戸市（本社）、東京都	1
大日本印刷	東京都	1
高木産業	富士市	1
中京コカコーラ	名古屋市	1
津田工業	刈谷市	1
東海テレビ事業	名古屋市	1
東京スリーバンド	八王子市	1
トビー工業	東京都	1
豊橋グランドホテル	豊橋市	1
豊橋□□	豊橋市	1
中日本印刷	名古屋市	1
長□虎紡績	羽島市	1
日産サニー岐阜販売	岐阜市、大垣市	1
日産自動車関係		1
日本オリベッティ	東京（本社）、名古屋（支社）	1
日本コロムビア	東京都、名古屋市	1
日本事務器	名古屋市	1
日本新□運輸	東京都	1
パロマ	名古屋市	1
姫路□□□□	姫路市	1
福田勘産業	富山市	1
プラス 日立事業部	東京都	1
ホイテクノ物流	蒲郡市	1
ほていや	名古屋市	1
ホーユ	名古屋市	1
松下電機	蒲郡市	1
郵船トラベル	東京都	1
読売新聞	東京都	1
ワンビシ産業	東京都	1

D-5 ②

就職先

名称	所在地	(人)
警視庁	東京都	1
静岡県警察	静岡県	1
岐阜県庁	岐阜市	1
豊橋市役所	豊橋市	2
大府市役所	大府市	1
豊川市役所	豊川市	1
豊田市役所	豊田市	1
地元役場		1

愛知県教育委員会	名古屋市	4
田原市教育委員会（小学校）	田原市	1
滋賀県小中学校	滋賀県	1
桜丘高等学校	豊橋市	1
九州大学事務局	福岡市	1

中央信託銀行	東京都	1
東海銀行	名古屋市	1
岐阜相互銀行	岐阜市	1
十六銀行	岐阜市	1
北國銀行	金沢市	1
碧海信用金庫	安城市	2
浜松信用金庫	浜松市	1
興亜火災海上保険	東京都	1
JA共済愛知	名古屋市	1
日本生命保険相互会社	東京都	1
三菱UFJ証券	東京都	1
金融業	山口県柳井市	1

表 3 系

D-8

転職 (各1)		
名称	業種	所在地
旭商工社	専門商社	横浜市
アベックス	自販機オペレーター	大府市
カツデン	建築資材製造	東京都
菊水化学工業	製造業	大山市
菊吉運輸	運輸業	犬山市
共豊エポック	建築・不動産	豊橋市
グンゼ産業	貿易業	東京都
GEコンシューマーファイナンス	金融	大阪、東京
篠田	建設	岐阜市
繊維工業	繊維	大阪府
第一パッケージング	牛乳キャップほか	東京都
大洋商事	商社	大阪市
中経計算センター	コンピュータ	名古屋市
中部ガス	都市ガス	豊橋市
中部ガス不動産	不動産業務	豊橋市
東京海上日動	保険	名古屋市
東京ファブリック工業	工業用ゴム	東京都
新見ガス	ガス販売	岡山県新見市
西美濃農業協同組合	農協事業全般	大垣市
ニッシンハウス工業	建設業	東京都
日成ビルド工業	建設業	金沢市
日本音楽出版	映像音響システム販売	名古屋市
日本聖印	営業	名古屋市
野村不動産パートナーズ	建物、ビル、学校管理	
兵庫県貿易	日中貿易専業	神戸市
平和コンクリート工業	製造部	四日市市
北海道航空	航空運送業	札幌市
三重造船	造船	四日市市
ヤナゲン百貨店	小売業	大垣市
山丸	物流業	東京都
アマダ	機械	神奈川県
(家業)	旅館ほか	鳥取県米子市
(自由業)	運送	豊橋市
公正取引委員会本庁事務局		東京都
公正取引委員会福岡地方事務所		福岡市
愛知県警察	警察	名古屋市
岐阜市消防本部	消防	岐阜市
岐阜市役所	公務員	岐阜市

D-9

再就職 (各1)		
名称	業種	所在地
愛知大学東京事務所		東京都
アイテック	建設	岡市
アベックス	自販機オペレーター	大府市
MH1保険サービス	保険	東京都
大府市鉄工団地	工業	大府市
カーマホームセンター	(渉外担当)	愛知県
亀屋商事	配合飼料の生産販売	岐阜町
共豊エポック	建築・不動産	豊橋市
三友工業	建築資材製造	栃木県足利市
三友トラベル	旅行業	小牧市
タナベ塗装	自動車部品塗装	豊田市
馬井	駐輪場管理	豊橋市
東海ファシリティーサービス	ビル管理ほか	名古屋市
東京海上日動	保険	名古屋市
都日テクノパーク	事務一般	浜松市
西美濃農業協同組合	(役員)	大垣市
北國ジェイシーピーカード	カード会社	金沢市
八千代病院	医療	安城市
リそな銀行	アドバイザー	
(自営)	建設業	
名称	業種	所在地
横浜家裁	司法	横浜市
簡易裁判所		千葉県
自警会	警視庁職員家族の支援など	東京都
鳥栖公共職業安定所	職業相談員	佐賀県鳥栖市
雇用安定センター	求人開拓推進員	佐賀県鳥栖市
自治会長		佐賀県鳥栖市
豊田市役所	行政職	豊田市
教育委員会委員長	教育公務員	東栄町
名古屋市役所住宅供給公社	名古屋市団地	名古屋市
岐阜観光コンベンション協会	観光業	岐阜市
(館長)		西尾市

表 3 系

E-2

東亜同文書院

	人数
よく知っている	27
少し知っている	51
知らない	11
無回答	1

E-3

愛大事件

	人数
よく知っている	16
少し知っている	51
知らない	20
無回答	3

E-4

母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	32
多少関心	44
普通	13
あまり関心ない	1

E-10

同窓会に参加しているか

	人数
はい	21
よく	4
時々	17
いいえ	41
はい、よく	1
無回答	6

E-5

愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	28
2. 大学のホームページ	10
3. 「愛大通信」	39
4. さまざまな会合	5
5. 受験雑誌	3
6. 同窓生	18
7. 愛大新聞（名・豊）	47
8. ほか（ネット、サークルOB会、ほぼ皆無、実兄が愛大卒）	7
無回答	6

E-14

人生をふりかえって

	人数
大いに満足	22
まずまず満足	49
普通	14
少し不満	2
大変不満	2
無回答	1

E-15

満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	22
多少関係	28
普通	15
あまり関係ない	17
全くない	2
多少関係、普通	1
無回答	5

第4章 名古屋校舎「法経学部 経済学科」卒業生の場合

はじめに

この章は経済学科名古屋校舎（車道校舎）の場合。前章でもふれたように当初、専門課程はすべて豊橋校舎で行われていたが、名古屋校舎での開設要求もあり、名古屋校舎にも専門課程が設けられた。しかし、この時期も豊橋校舎の専門課程で従来通り経済学を学ぶ学生は多かった。以下、回答について順にみていくことにする。組織の外接については、前章の豊橋校舎の場合を参考にされたい。

A. 生年、卒業年、出身校など

表4-A-1は、名古屋校舎経済学科への入学生の生年（縦軸）と同学科の卒業年（横軸）をしめした。それによると、生年は昭和18年（1943）から昭和23年（1948）の戦争末期から終戦直後にかけての時期で、卒業年は、昭和42年（1967）から昭和45年（1970）で、戦後の経済成長がはじまりかけたころである。回答数は40名である。この時期豊橋校舎が90名の回答があったので、その半数ほどの回答である。すでに高齢化により、亡くなられた卒業生や体調不良の方、そして卒業後の転居などがあり、郵送方式では住所不明が多かった。それゆえ、この実施時期が10年遅かったと反省している。しかし、回答をお寄せいただいた方々は丁寧にご返事をいただき、ありがたくお礼申し上げます。

表4-A-2は、出身地の回答を示した。当然、地元名古屋地区が最も多く、岐阜や三重の隣接県にも広がっている。全体としてはほぼ通学圏域である。したがって、出身高校

もそれに対応している。名古屋校舎は戦後の焼け跡地で学問を渴望していた勤労青年への学びを提供する夜間部がベースになっており、授業料も安くして、教育の拡大に寄与する目的であった。出身高校にもその特徴が見られ、実業系の高校からも入学が見られる。まだいわゆる受験戦争を引き起こすベビーブーム世代の前であり、本来学びたい学生が進学、入学してくる時期で、この時代でも、上海にあった旧制の東亜同文書院大学をベースとし、戦後の旧制大学として設立された愛知大学への希望者は多かった。

表4-A-5は、愛知大学を知った理由の回答で、「蛍雪時代」などの受験雑誌、大学案内誌などが最も多いが、高校教員や高校指導室、そしてすでに愛大を卒業し、社会人になっていた卒業生からの情報、そして地元だからとあるという回答である。

では、実際に入学した理由は表4-A-7に回答がある。それによると、通学の利便性、学費の安さなど、生活派が多いが、次いで学びたい学問や、大学の教授陣などの質がその理由に挙げられている学究派が多い。生活派と学究派が入学したことがわかる。

こうして入学して、授業料や生活費はどのように工面したかである。表4-A-9、10それをまとめて示した。それによると、両方とも親が工面したケースが75%を占め、アルバイトや奨学金で工面したのは、授業料で27%、生活費では33%を占める。約3割の入学生は自力で工面していたことがわかる。それだけに愛大の安い授業料は、学びたい学生には価値があったといえる。

B. 学生生活と満足度

(1) 学業のウェイト

では、こうして入学した愛大での学業生活と満足度はどうであったか。①学業が主、②どちらかと言えば学業、③学業はまずまず、④学業は従のレベルに従い、それをまとめてみると、表4-B-1のようになる。その回答内容を、以下に年次別にみてる。

1967年

①学業が主 5名

「卒業後の進路を考えると学業中心にならざるを得ない」、「優を20以上取りたかったから」、「専門知識の吸収と就職先の決定に有利。4年の時1科目で卒業できることになり、アルバイトもやった」

②どちらかと言えば学業 3名

「自宅から通学のため、家の仕事も手伝った」、「はっきりわからない」

③学業はまずまず 1名

「学費をアルバイトで稼ぐため」、「アルバイトをしないと学業が続かない」

1968年

①学業が主 4名

「学生はまず学業が大切」

②どちらかと言えば学業 2名

「学生の本文と授業料の入手」、「旅行及びアルバイト」

④学業は従 3名

「クラブ活動で活躍」、「アルバイトが主」、「貧しかったため、学費をまかなうため」

1969年

①学業が主 7名

「学ぶことの幸せを知った」、「入学したからにはストレートの卒業を」、「知識を高めるため」

識を高めるため」

②どちらかと言えば学業 1名

「勉強により社会での基礎知識向上と自信の人間性の向上を」

③学業はまずまず 3名

④学業は従 1名

「軟式庭球部活動の時間、家事、アルバイトで生活のすべてに」

1970年

①学業が主 2名

「授業料を工面してくれた長兄と居候させてくれた次男の兄の考えによる」、「経済学全体を知りたかった」

②どちらかと言えば学業 2名

「近代経済学はゼミに入り、真剣に勉強しました。アルバイトも」、「学業のほかにアルバイトをやり、遊興費に」

③学業はまずまず 1名

「クラブ活動に比重が高かった」

(2) 印象に残った先生たちや講義、ゼミ

ではどんな学業分野に興味を持ったのかである。それを表4-B-2に示した。それによると経済学科の分野が科目とも重なる形で回答されている。経済学の当時活発であったマルクス経済学とそれに対する近代経済学がそれぞれ並び、それに会計学など経営学に関わる科目も並んで、幅が広い。また哲学、語学にも関心があったことがわかる。

次いでそれに関わる「印象に残った先生たち」をまとめたのが表4-B-3であり、さらにゼミについては表4-B-4に示した。

まず、表4-B-3では、自論の講義内容が面白いと評判であったマル経の山本二三九教授と戦後浮上してきた近経で計量経済学の岡崎教授が二分している。安藤教授は経

済地理学で現地調査(フィールドワーク)で立地や地域開発など地域経済を明らかにする新鮮さや学生たちの興味を引き付けたのであろう。伝統的なマル経に近経が加わり、計量分析など新たな領域に学生たちが食いついていった状況が伝わってくる。

また、ゼミについては、回答者のゼミであり、各ゼミに広がっている。下方の村上は村上雅子先生にまとめる必要がある。各回答者の村上評は国民所得論で丁寧で熱心という点で一致しており、人気があったように思われる。

(3) 卒業論文

1967 年

「マクロ経済学の展開」、「日本経済の現状」、「インフレーションと財政」(財政に興味)、「日中貿易」(将来の中国の成長を予想していた)、「乗数理論」(近代経済)、「資本論からレーニン」(帝国主義論) への発展」

1968 年

「マルクスの思想過程」、「戦後の私鉄経営」、「圧縮記帳についての一考察」(税務会計の仕組みを理解しようとした)、「厚生経済学」、「近代経済学」(学会賞)、「奥志摩における観光開発の実態と動向」(奥志摩への近鉄乗り入れ問題に関心)

1969 年

「新日本製鐵の公害発生による社会的費用の増大について」、「貨幣価値変動会計」(インフレと会計の表現方法に必要性を感じて)「計量経済」(経済に計画性があるか否か、に関心)、「レーニンの帝国主義論」、「(財閥関係で)」、「経済成

長と時間」

1970 年

「近代経済学」、「福井における絹織物業の生成」(出身地の経済発展を知りたい)、「貨幣供給の基礎原理」(貨幣が通貨主義から銀行主義へ移行する原理を説明したかった)

以上、回答いただいた卒業論文を年次別に示した。なぜそのようなテーマを選んだかという説明が付記されている分については、() 内に示した。また、テーマを失念したという回答もあり、それらの方々のテーマは取り上げられなかった。

(4) 先生との交流

では、学生生活のなかで、先生たちとの交流はどのようであったのか。その回答である。

1967 年

「あまりなかったが、先生の京都のお宅へ招待されたことが有りました」、「杉本教授宅(教員宿舎)にて、手作りの餃子をいただいたことあり」、「ゼミ生で、上、下の学年もあわせ、年1~2度集まりました」

1968 年

「10 年位前までお会いしていたが、今は年賀状で」、「ゼミはもちろん、合宿や先生宅での談笑有」、「先生の自宅で奥様やお子さんたちとの交流は多く、ゼミ生は世話になった」、「ゼミでは先生との交流、卒論の指導もいただいた。卒業時、努力賞をいただいた」

1969 年

「ゼミの夏合宿、飲食、麻雀」、「ゼミを

通じての交流のみです」、「人生訓です。卒業後は年に2回ほどゴルフを教えていた」、「年に数回、夜に宴会を行っていた」、「先生のゼミでは、応援団員が受講するのは初めてだということで、話をしてくれた」、「山本ゼミ、夏休みに、北アルプス登頂、4年間」、「経済学研究会長野県白馬村出毎年夏合宿」、「ゼミ先輩との交流。村上先生を囲んで懇談と飲み物会」

1970 年

「卒論の助言指導。ゼミ生先生との懇親会」、「旅行、先生宅訪問」、「卒業後、金融論先生を交えて10回ほど懇親会を行った」

以上、回答を寄せていただいた分だけであるが、バラエティーに富んでいたことがわかる。先生の方も可成り積極的に学生たちを受け入れていたことがうかがわれ、イギリスのカレッジ風な雰囲気がうかがわれる」

(5) 図書館利用

1967 年

「よく利用した。狭い書館の雰囲気を今でも思い出します。卒論の時にはフル利用」、「あまり利用しなかった」2件、「鶴舞図書館を利用した」、「県立書館を利用した」、「本が買えないのでよく利用した」、「利用できなかった」

1968 年

「利用した。調査も」、「利用せず」4件、「卒論作成時は毎日利用」、「必要な時に利用」

1969 年

「関連書物を利用した」、「あまり利用しなかった」4件、「卒論時に利用」

1970 年

「勉学、ゼミ合宿準備で」、「利用した」
「自習時間に利用」、「時々」、「利用せず」2件

以上、この時期、車道校舎では図書館の規模は小さく、利用しにくい面があったかと思われるが、それでも卒論作成には可成り利用した様子わかる。愛大全体の図書館整備は70代後半からである。

(6) 在学中の満足度

では、愛大在学中の満足度はどうであったか。①大いに満足、②まずまず満足、③まあまあ、④あまり満足していないの4レベルから選択の回答を見ると、表4-B-8のようになる。それによると、①は25%、②も加えると、87%がほぼ満足以上であった。④は1名だけであり、全体としては、愛大の生活にほぼ満足していたといえる。以下、その理由について見てみる。

1967 年

②まずまず満足

「通学が便利」、「単位制の規制を気にせず、自由に学生生活を送れた」

1968 年

①大いに満足

「クラブ活動で楽しい生活ができた」、「学友に恵まれた」、「ゼミ、クラブ友仲間と交流」

②まずまず満足

「学業と両面、満足でした」、「視野が広がった」

1969 年

①まずまず満足

「会計学と経済の流れを理解できた」、
「のびのびとした学生生活が送れた」、
「教養は1年生で全取得、専門は3年生で大半を取得できた」、「ゼミとワンゲル活動」、「体育会の部活動で得たものが大きかった。ゼミも希望通り」

④あまり満足していない

「名古屋キャンパスが狭く、本校は豊橋にあり、部活も参加できなかった」

1970年

①大いに満足

「学業に対する取り組みがしっかりしている学生が多かった」

②まずまず満足

「ゼミ生と業種を超えてお付き合いが長く続いている」

(7) 人生への影響

次に学業の成果が、これまでの人生についての影響について、その回答は表4-B-9に示した。それによれば、①大いに影響、②まずまず、③まあまあ④あまりの4レベルから選択し、その理由の回答も上げてもらった。以下、回答分を年次別、レベル別に示す。

1967年

①大いに影響

「教員採用試験に合格できたこと。力をつけていただいたと感謝」、「組織に縛られないで自由な生き方ができる素養を得た」、「卒業直後より中国問題が時代の流れをつくった」

②まずまず

「会計、簿記が得意だったので、経理課に配属され、総務、人事も経験」

④あまり

「あまりない」

1968年

①大いに影響

「学校推薦で入社。大変私にあった企業である」、「自分に自信がつき、就職した会社で役員になり、70歳まで働くことができた」、「経済の見方に役立った。ただ、社会は法律に基づいていることから、もっと法律にも力を入れたらよかったと思います」、「もっと学業に専念すべきであった」

②まずまず

「考え方が広がった」

③まあまあ

「自分というものがどれほどのものかを知りました」

④あまり

「反省。勉強しなかった。就職のときに苦労した。学校推薦が取れない。自力不足」

1969年

①大いに影響

「対人関係を保つことを学んだ」、「大学卒業後、4年弱ですが、製菓メーカーの営業を経験。その後浪人して税理士資格を取得した」

②まずまず

「資格取得に役立った」、「卒業成績は、友人の中やクラスの中でもトップだったし、まず誇りを持てた。優の数もトップクラスだった」

③まあまあ

「東海市役所への就職で、公害問題、社会的費用関係を勉強が自治体を見ることにつながった」、「所得に伸び(経済

成長との相関関係)、分配が適切か。同ゼミや学内で知り合った学生と現在も交流している」

1970 年

①大いに影響

「経済学以外の科目を意識して受講したので、得た知識分野が広がった」

②まずまず

「三重県庁に入り、農水商工部長、副知事を歴任しました」、「人間努力が大事」

以上、学業が人生に与えた影響についての回答を見ると、回答者それぞれが卒業後に様々な形で影響したことを実感として表明している。特に経済の実務部分は仕事に直結するところがあり、それらが指摘されている。併せて考え方の広がりなど人生の価値観などにも影響がありそうな効用も指摘され、もっと学ぶべきだったとの反省も見られ、新たな世界への好奇心も生み出されてされていく学業の無限さもうかがわせてくれ、愛大での学業が価値を持っていたことが伝わってくる。

C. クラブ、サークル活動

以上、すでにクラブ、サークル活動への言及もあったが、ここでは改めてその両者との関わりについての回答を紹介する。

まずは、加入参加していたクラブ、サークルの所属名である。表 4-C-1 はそれをまとめて示したものである。回答のあった分だけであり、そのすべてではないが、豊橋校舎に比べるとその種類は少ない。名古屋車道校舎の場合は、夜間部からスタートした歴史があり、特に夜間部学生にとっては、参加したくてもアルバイトなどの時間的制約が

あり、簡単ではなかったところもある。

一方、法曹界を目指す場合には、夜間に籍を置き、昼間は受験用の勉強に徹するという方法もあり、それが中間部の在籍者よりも合格者が多く出る結果にもなっていく面もあった。全体としては、回答者の分だけに限られるが、豊橋校舎の広いグラウンドや旧軍隊時代の講堂・体育場の利用に比べると、室内型で文科系のクラブ、サークルが多い。しかし、それだけに前述の回答にもあるように、そこで力を入れ、大会にも出場したり、発表会に出場したりして、活躍も見られた。

表 4-C-2 は、その「参加状況」で、無回答者は参加・加入していないとみなすと、参加率は、回答者の 40%代で、いずれも積極的な参加者とみなすことができる。

特に、熱心だったのは「ポリネシアン民俗音楽研究会」で定期演奏会、全国大学バンドコンクール出場、各大学や一般会社のダンスパーティ演奏、ハワイアン演奏などで活躍し、まだ民間では楽団も少ない時それを埋める形で、ギャラも得ていたという。また、ワングルも全国学生ワングルの東海支部代表で出席するなど、昭和 40 年代は最盛期であったとしている。また、応援団もスポーツの応援、学園祭での演舞、各種イベント、熱田神宮でのお奉納などその後の伝統を作っている。自動車部は豊橋と合同で実施した。研究会グループでは、合宿、発表を行っていて、会計学研究会や経済学研究会などが活発であった。

しかし、1970 年卒生は、大学紛争が始まったせいか、回答数は少なくなっている。

なお「部活で得たもの」は、各部とも「先輩、後輩を含め、友人を得た」が多く、「見

聞が広まった、チームワーク (ポリネシア)、他大学との交流 (会計、茶道)、衣食住を共にし、山河をとともに歩けた」(ワンゲル)、「学年の役割」(軟式庭球)、「団体運営」(ユースホステル)、「友人や社会をみる眼の広がり」(応援団)、「先輩に恵まれ、愛大への誇り」(経済学)、「体育会系でできなかったが有意義」(自動車) など。しかし、「直前に親が病気になり、自分が働くことになって、部活ができなかった。残念」という回答もみられた。

また、「部活の人生への影響」は、「信頼できる友人や多くの人との交流」がかなり共通し、「礼儀作法」(茶道)、「生き方が決まった」(新聞部)、「自信」(会計、茶会)、「マーケティングの手法、展開を職場で(広告研)」、「組織のなかの役割と事務処理」(軟式庭)、「団訓義務、責任、礼儀、誇り、節度、闘志を胸に、苦しい人生を乗り越えた(応援団)」、「指적이役立つ」などがあげられた。

さらに、「学外での活動」については「日中友好協会青年部」、「他大学との茶道連盟」、「CBC 主催で九重佑三子、田辺靖男のバックバンド、ハワイアン演奏(ポリネシア)」、「中川区消防団連絡会顧問(ワンゲル)」、「自動車ラリーや協議会に各地へ遠征(自動車)」、「連盟合同茶会、機関誌編集(茶道)」などがあげられ、部活の延長、発展活動も見られる。

また、「社会参加」としては、「原水禁世界大会(新聞部)」、「ピンポン外交での中国選手団との交流(間違ってアメリカ選手団のバスに乗車)(経済学研)」、「町内会相談役(ワンダーフォーゲル)」、「地元東海市の体育協会でテニスの振興(軟式庭)」、「社会人サークルづくり(ユースホステル)」なども

見られた。

D. 就業状況と人生

次は、いよいよ学外へ飛び立つ就職に関するアンケートへの回答である。4-表 D-1 は、卒業時の就職運動についてどのように取り組んだかである。

それによると、「普通」を最多として、積極派と消極派が大きく二分される形となっている。これは前述の豊橋校舎の経済学科とほぼ同様である。当時は戦後の経済成長期の入口であり、従来型の地縁者や関係議員、親戚などの多様なツテによる親縁故採用が多く、大学側も今日のように、入学とともに就職問題で学生に迫るということとはなかった。確かに、教員や公務員などのように資格と公募のあるところは競争があったが、一般の就職にはのんびり構える風潮が多分に残っていた。大学の就職斡旋も少し「大学推薦枠」が設定された程度で、学生はそれも選択肢の一つ程度であった。この表にみられる「普通」というレベルが最も多いのは、そのことを示している。学生も例えば大企業など、強く職種にこだわる場合は、自ら積極的に動き「自力」で対応した。

それは、表 4-D-2 の「就職環境」の状況にも対応している。やはり「普通」が最も多く、経済学部はつぶしがきくとされ、職種にこだわらない就職希望状況もあった。しかし、特定の職種を狙う積極派にとっては「きびしい」という環境になる。例えば、①かなり厳しい②やや厳しい と回答した回答者の回答を見ると、次のようになる。

1967 年

①かなり厳しい

「今後期待できる銀行志望」、「自分に

適した分野を決めていた」、「決めてないが、資本論理の強い会社または関係の薄い会社」

②やや厳しい

「高校教員へ強い志望」、「流通革命の兆しを。しかし、優秀な学生は、流通を目指さなかった」

1968 年

①かなり厳しい

「学校推薦」、「議員推薦」

②やや厳しい

「良い会社」、「大企業で親に恩返しを」、「地元企業を優先的に」

1969 年

①かなり厳しい

「外国への思いが強く、航空会社のスチュワードを」、「経済女子は少数だったので、自分で各社を回った。決める余裕なし」、「公務員か銀行を」

②やや厳しい

「自宅から通える就職先。家業も手伝える条件」

1970 年

①かなり厳しい

「早く就職先を決めたかった」

②やや厳しい

「出身地への就職をめざしたが、結果的に他県へ」

表 4-D-4 は、「希望した分野へ就職できたか」の回答である。それによると、「はい」が最も多く、「なんとか」を加えると、過半数以上はほぼ希望通りに決まったといえる。一方「意に反して」と無回答も加えると約 30%が、希望通りではないと思われる。出身地元に希望就職先が見つからなかったり、

親との意見が合わなかったりとか、大学推薦がもらえなかったり、などがその理由と思われる。

また表 4-D-6 は、就職でお世話になった人や組織を回答からまとめた。それによると、最多は自力であり、大学の就職課は 2 位。そしてそのほかは、ほとんど縁故で、それをまとめると、僅少差で第 1 位になる。当時はそういう時代であった。

こうして決定した就職先が、表 4-D-5①と表 4-D-5②である。表 4-D-5①は、民間企業で、折からの経済成長の始まりの中で、有力企業にかなり就職していることがわかる。また表 4-D-5②は、役所及び教員の公務員で、公務員は愛大の特徴にもなった。さらに、表 4-D-8 は、その後の転職先で、当初の就職先からほぼ半分の人数が転職し、自分人生設計の適性を生かせる職場へ転職したことがわかる。そして表 4-D-9 は、回答者の多くがその後定年を迎えた後の職場であり、定年後も頑張って仕事を継続している卒業生が多い。現役時代の仕事が評価され、なお体力に余裕のある卒業生の健康生活の良き人生設計の姿であると思われる。

ところで、このような職場で①愛大卒生は他大学卒生と比べ、どのように評価されたのか また、②愛大卒業生を他大学卒業生と比較してどのような特徴があるのかについての少しダブリがちなアンケートを行い、回答を得た。それを意か、年次別にみてもみる。

①愛大卒生は他大学卒業生と比べ、どのように評価されたのか について

1967 年

「比較的良かったと思う」、「社会性、学力も身に付けていると思う」、「営業面

で優秀な人材が多かった」、「当時はまずまず評価していただいていたと思う」、「比較的自己の確立した人が多い」、「当時自主性がありました。最近はわかりません」、「並」

1968 年

「大変真面目。仕事に対し真剣に向き合っている」、「粘り強い。特に強み弱みなし」、「同年代で役員になった卒業生 3 人、後輩にも現在役員がいる」

1969 年

「個人次第。私大としては上級」、「違いを感じたことなし」、「仕事に対しての積極性あり」、「中程度」、「真面目で誠実に何事にも取り組んでいる」、「関係ない。教員試験を受けるから」、「他大学に負けない能力を持っていたと思います」、「少し図々しい」、「その会社によって上級職がどの大学が多いかによって変わるが、ユニー（株）は、当時から愛大卒生が多く、進級も早かった」

1970 年

「全国の私学のトップブランドではないが、名古屋圏では優位な位置にある」、「物事への取り組み方が真面目である」、「愛大卒業生は自分一人だけ、比較の機会なし」、「堅実」、「仕事で実務はできるが、昇任試験では劣る」

②愛大卒業生を他大学卒業生と比較してどのような特徴があるのか について

1967 年

「真面目な学生、卒業生多い」、「真面目で活力あり」、「粘り強さがある」、「私の周りの卒業生は自由な生き方をしている」、「変わらない」、「わかりません」

1968 年

「浮いたところがなく、芯がしっかりしている」、「大阪、京都、兵庫などの同窓会に出たが、地方はプライドのある人が多い」、「真面目、努力家、人間味」、「特になし」

1969 年

「個人次第。クラブ活動をしていたかどうかで判断」、「自己実現、自己主張の強さが際立つ反面、従順なタイプと半々のように感じている」、「地元ですので、愛大生として仲間意識を感じました」、「普通で堅い感じ」、「私の勤務先には愛大生がほとんどいなかったの、つながりがありません」、「やはり、有名大学や国立大学の方が上級職になりやすかった」、「考えがしっかりし、大学の誇りをもって公務員就職を求める人が多かった」

1970 年

「一般に真面目な学生が多いようだ。学風だと思う」、「取扱方に差があると思う」、「開拓精神より、中庸タイプが多いか」、「よく動く方だと思っている」、「応用力があり、柔軟性がある」

E. 愛知大学卒業生として

（1）愛大設立趣旨の回答者への影響

愛知大学は、1946 年 11 月 15 日に天皇の裁可により旧制大学として、豊橋の陸軍 15 師団、豊橋予備士官学校跡に開設された。上海にあった同じく旧制の東亜同文書院大学をベースに、大陸からの引揚げ学生の受け入れ大学として出発した。それゆえその設立趣意書は、戦後の「新たな国際平和」と、「国際人の養成」、それに地方都市に初めての旧制大学開設ということで「地方文化へ

の貢献」を掲げた。戦後の日本を占領し、日本人を狭い日本列島にとじこめる政策をめざした GHQ に対して、堂々と「国際人の養成」を掲げた反骨精神は、東亜同文書院を歴史的ベースにした自信の表れであったように思われる。そして地元東海地域からの学生や空襲で焼け出された東京などの学生などの受け入れも行い、この設立趣意書をいわば愛大憲法として進めることになった。

そこで愛大入学生は、この設立趣意書の内容をどのように受け取り、自分のものにしたのかという点のアンケートを行った。その回答は以下の通り。

1967 年

「在学中、これを語る教授はいなかったが、卒業後、「愛大通信」で学んだ」、「人材養成の研修や人間形成に役立った」、「国際情勢を考えながら、地域社会へ貢献した」、「比較的自分に正直に生きることができた」、「1970 以降、中国問題が追い風になり、大変恵まれた人生だった」

1968 年

「これは自分にとっての目標でありました」、「この年齢になり、真理の探究という言葉の重みを感じます」、「入社以来、労務、人事部、そして新規事業部で働けた」、「社会における事象について深く考えることができるようになった」

1969 年

「学生生活を謳歌した。政治的活動も多くあったが」、「真実こそが正義といえる。人はそれを裏切ってはならない」、「批判的精神を常に持って、「ななめ」から見るようにしています」、「日本の安定と世界の平和を探究していく」、

「あまり考えてない」、「教員試験の時いつも思っていた」、「地域社会への貢献を強く持ちました」、「心の支えになっている。常に構成であれ」、「常に誇りに思っていた」

1970 年

「三重県勢の発展に寄与している」、「理念は良いが、当時は左寄り思想が多く自分には合わなかった」

(2) 東亜同文書院の認知について

愛大開設時には約 450 人の書院生やほかの引揚げ編入生も各学年に編入し、授業開始 2 か月後には「豊橋市民との文化交流祭」を書院生のリードの下で盛大に行い、その最終日にはコロンビアレコードの古関裕而の一行が「愛大音楽祭」を豊橋公会堂で開催した。まさに書院生が各出自の学生たちをこの行事でまとめ上げた。ではその認知度はどうか。そのレベルを表 4-E-2 に示し、その理由を次に年次別に示す。表からは、ほとんどの回答者が書院を認知していたことがわかる。

1967 年

「「愛大小史」を読んだ」、「愛大の名前を出すと、多くの人は「東亜同文書院」の話をした」、「国際的知識のある人材がかなりいた」、「愛大の沿革を書物で読んだ」、「入学後大学で習った」、「関係文書で調べた。杉本出雲先生が開学以来かかわっていたから」、「在学時代各方面から聞くことができた」

1968 年

「チラシや本で知りました」、「在学中にいろいろと」、「入学後の諸先輩や教授から、「学校の歴史として」、「卒業後

の同窓会で知る。荒尾、鐘崎三郎位の碑に年 1 回参拝。京都若王子神社へ毎年 20 人ほどが全国から参集する」、「学校案内から」、「同窓会では翌同文書院の話ができました。「北帰行」は同文書院の歌だと教えられました」、「先輩と知人から教えられた」

1969 年

「父親と恩師からききました」、「河合先生から聞いています」、「教授からの話で知った」、「同窓会へ参加することで知った」、「大学へ入学してその歴史を知った」、「学校からの新聞や先輩からの教示、学内掲示板より」

1970 年

「当時は旧制東京大学にも負けないレベルにあったと聞いている」、「本学在学中の兄（5 男）の史料から」、「大学中の史料から」、「大学からの史料」、「ゼミと会議で」、「書籍「愛知大学創世記の権蔵」から」

以上、書院の認知はかなり広がっていたといえる。

（3）「愛大事件」の認知について

「愛大事件」については、前章、前前章で触れたのでそちらを参照されたい。以下、その認知レベルについては表 4-E-3 に示した。同表からは「多少知っている」というレベル以上が 60% 代を占めるが、一方「知らない」層が 30% 台へと増えている。それについて年次別にその回答を紹介する。

1967 年

「本間学長の教育姿勢に感動した。学生第一の考え方は小生の教員生活の柱

になったように思う」、「当然の帰結だと思う。当時の学生は時の政治状況にはしっかりと対応していた。大学の自治を侵す警察官の大学への立ち入りは許してはいけない。権力の介入は、大学の設立趣旨から本間学長の弁護は肝要である。言論の自由が守られてこそ大学の存在意義がある」、「誇りに思う」

1968 年

「愛大の毅然たる態度が印象に残っている」、「行内に警察入れず、学内の自治、学生を守った学長」、「本間学長はえらい」、「愛大事件は知っていますが、本間先生が弁護したことは知りませんでした」、「あまり関心はなかった」

1969 年

「今に比べれば若者にエネルギーがあったと思う」、「本間学長が信頼した大学生を保護する姿勢、行動力を評価したい。時代が時代だっただけに大きな権力に立ち向かった学校当局の苦労がしのばれる」、「利益主義と非利益主義のバランスのとり方のむづかしさを感じた」、「事件名は記憶になるが、内容に於いては、ほとんど知らない」、「戦後の学生運動を警戒していた時期の事件。あまり事件を起こすようなことではないと感じていた」

1970 年

「個人の思想的部分もあるので、深く関心がなかったと思う」

（4）母校愛大への関心とその理由

これも年次別に回答を紹介する。

①大変関心、②多少関心、③普通、④あまり関心ない というレベルをまとめると、表 4

—E-4 のようになる。それによると「多少以上」の関心は 75% を占める。無関心は 1 名だけであり、全体としては関心ありということになる。

1967 年

①大変関心

「自分の母校だから」、「年をとるにつれ、母校への関心は深まると思う」、「自分たちを教育してくれた大学だから」、将来、卒業生がどのように変えていか期待している」、「出身大学だから」、「長男も愛知大学を卒業しました」、「やっぱり母校です。同窓生が近くにいればと思います」

②多少関心

「愛知大学が好きだから」

1968 年、1969 年

①大変関心

「就職先では、多種多様な職種の人たちの人事を担当。愛大生には一人の先輩として関心も強かった」、「最近のレベル向上。今なら入学できないと思う」、「これからも知名度と名誉ある大学であってほしい」、「卒業生として誇りをもっているため」、「校舎移転など名古屋地区へ移転」

②多少関心

「社会貢献できる学生への指導と教授の資質が良好であることを」、「理由はと言われても困るが、当時は高卒者も多かったから誇りは常にあった」

③普通

「当時、「建学の精神」「自由受難の鐘」などは豊橋校舎にあったが、名古屋校舎にこれといったものはなかった」

1970 年

①大変関心

「大学として目覚ましい発展をしている。多くの有能な人材を輩出」、「中部圏の私大としての地位が高い」、「愛知県内では歴史ある大学であり、私大の中では司法試験の合格者多いため」

②多少関心

「卒業生、愛大不動産会にかかわるものとして」、「もっと個性のある大学(学力、スポーツ等々)になってほしい」

(5) 愛大情報の入手源

以上のように愛大に関心ある卒業生の多いことがわかったが、では、卒業生は情報をどこから手に入れているかである。その回答を可能性のある選択肢の中から選んでもらった。その結果は表 4—E-5 である。それによれば、最も多いのは「同窓会報」で、次いで「愛大通信」である。「同窓会報」は年 1 回、同窓生に配布されている。故人も含め 15 万人の卒業生のうち、10 万人には配布されており、大学としても重要な情報源を同窓会とともに提供している。この 10 万人をマーケットとして考えるならば、各支部からの情報提供はもちろん、さらに同窓生側からも様々な組織や個人、グループからの情報提供が工夫されてもよいだろう。

なお、この同窓会報に希望する情報として以下のような要望があった。

1967 年

「現役生の活動状況、卒業生の進路」

1968 年

「マスコミなどへのさらなる PR」、「伝統と調和、新規分野への開拓」

1969 年

「現在得ている情報の維持」、「現在の

学科、新設学科などで、今何を学び、社会とどのように結びついているかの情報」、「卒業生の活躍情報」、「どのような分野の企業に就職し、幹部になっているかの情報」、「社会での活躍などの情報」、「今後 10 年位の大学の計画、あり方について」、「就職情報」

1970 年

「卒業生情報だけでなく、現在の大学情報も」

(6) 大学紛争について

1970 年代から愛大も他大学と同様に「大学紛争に巻き込まれてゆく。その経過は、前章などで紹介したので、そちらを参照されたい。以下 3 点のアンケートの回答をしてみる。

①その契機について

1967 年

「当時吹き荒れた大学民主化の嵐は、どの大学にも及んだ。他大学からの影響を受けたのかと思う。何を改革すべきかよくわからなかった」、「他の大学の友人たちの情報」、「学費値上げ、マスプロ教育の反対」、「授業料値上げ」(脇坂学長時代)

1968 年

「授業料の値上げ?」、「社会正義ではなかったのですか」、「よくわからない」

4 件

1969 年

「若者のエネルギー。最近の学生、若者は、欲、夢、やる気の 3 無である」、「2 年制のころ、校門は正門も裏門も閉じられ、学内は色々張り紙があったが、まったく覚えていない。当時自分として

はまた別世界ととらえていたが、その無関心さは今恥ずかしい」、「マルクス経済に偏った主張をしているように感じた」、「他大学からの影響を多大に受けたのではないかと」、「デモに参加」、「学生の考え方と違いと言動（他大学からの影響もあったのでは）」、「よくわからない」2 件、「紛争自体を知らなかった」

1970 年

「大学がロックアウトされ、休校が多かった」、「自分はクラブ活動に注力していたので、周りの紛争参加者はクラブかと堂参加者と感じた」

②その把握

1967 年

「小生はいわゆるノンポリで大学紛争とは距離を置いてきた。当時の愛大は大きな混乱もなかったと記憶している」、「高校生がよくクラブ室に出入りしていた」、「卒業後に起きた紛争であり、仕事に夢中であった」、「当時も今も表面的に理解している人が多い」、「積極的に参加」

1968 年

「立て看板を目にするていどでした」、「〇〇に対する抵抗」、「特になし、わからない」2 件

1979 年

「色々な社会を知ることに関心をもっている故の活動」、「学生の主張の仕方が礼儀正しくない。先生と対等に話し合う方法を知らないと思った」、「昭和 21 年生まれから出生数が急上昇し、大学もその影響を受けたと思う」、「自分の思想を考えると生きられるかどうか

迷った」、「デモなどの紛争に参加しているものに腹が立ってしかたがなかった」、「休講になりました。紛争には参加せず」、「学内に乱闘事件があったことを後で知った」、「人それぞれ」

1970 年

「なし」

③その影響

1967 年

「小生は関わりを持たなかったので、影響はなかった。全共闘などの主張には耳をかたむけるようになった」、「敗北感が染み付いた。就職後も何回も関わりを聞かれた。愛大卒だからチェックされたと思われる。同僚は聞かれていないようだった」、「大変良い状態になりました」

1968 年

「同僚が就職試験時に愛大は共産党かと聞かれたという」、「自治会の執行部もやった」

1969 年

「社会に対して関心を維持していること」、「就職試験では聞かれると思ったが、全くありませんでした」、「影響はなかった」、「学内ストもあり、危険もあったが、大多数は落ち着いていた」、「赤の学校だと思われたこと」、「特になし」6 件

1970 年

「会計学研究会の部室が荒らされていたことがある」、「影響はなかった」

(7) 同窓会とのつながり

次は「同窓会」との関わりである。愛大同窓会は全学挙げての同窓会で、戦後の旧制

大学開設の発展の初期、1952 年(昭和 27 年)2 月 10 日に、初代金丸和夫会長の下で発足した。すでに長い歴史を持ち、東海地方はもちろん、中部地方でも最も進んだ同窓会を展開してきた。

表 4-E-7 は、その参加状況の回答である。会への出席を通して関わりを持つ卒業生は 35%で、その多くが関わりを持っていない。その「関わりを持っていない」理由を見る。

1967 年

「地理的に参加しづらい」、「自ら出世や栄達を断った私に生き方に、組織は必要ないと思っている。私の周りの先輩も同窓会へ参加しない人が多い」、「自分は引きこもりだから」

1969 年

「仕事のつながりはあった」、「つながれるようなつながりもなかった。機会があったが参加できなかった」、「何度か自動車部の会合や部員だった人たちの葬儀で会い、お茶を飲みながら話した」

1970 年

「クラブの先輩、後輩とのつながりがあるので」

このように、個人的信条や人間環境が背景にありそうで、当時の必ずしも十分でなかった名古屋校舎の環境が、クラブ活動などのつながりを弱めていたのかもしれない。

一方、かかわりを持っている卒業生の理由は以下の通り。

1968 年

「三重中南支部の活動。上野先生のお力をお借りしていた時はよく活動も行われました。今は携帯です」、「努力して

いるが集まらない。30～76 年までの 46 年間」、「汽車通学の仲間。愛大ポッポ会結成」「入社中はいろいろな企業の人と交流が持てる。視野が広がること」

1969 年

「クラブ活動の同輩とのつながりは今でも続いています。先輩、後輩とのつながりは今はもう途絶えてしまいました。が、昭和 44 年卒から 30 年ぐらい続いていました」、「三重県と同窓会。このごろは連絡がない」、

1970 年

「仕事、遊交、67 歳、定年時まで」

以上、この回答者の場合は、各クラブ活動とか通学仲間が同窓会の役割を担っているように思われます。

では、同窓会をどのように魅力あるものにするかというお尋ねへの回答です。

1967 年

「卒業後の進路保証が卒業生や周りの人たちの関心事です。進路を PR して、力を伝えたらどうでしょう」、「卒業年ごとの開催案はどうでしょう」、「最高学府としての自覚を持つ大学生を育成する支援をしてほしい」

1968 年

「今のままでよい」、「同窓生を知らない卒業生が多い。同窓会の存在を学生時代から知らせてほしい」、同窓生の所在がわかりません。多数の同窓生が近くにいると思いますが、把握していません。まず、把握から」

1969 年

「現役の様子を映像で見ることができれば、それだけで話も盛り上がると思

います。年重ねてきた昨今では、回想法で元気ができることを実感する年齢になりました」、「色々な分野で活躍している方を報告してほしい」、「中部地区だけでなく、全国に知名度のある学校にしてほしい」、「ラインでのつながりから互いを知ればよいとおもう」、「後期高齢者になった今、体も不自由になり、余裕がなくなった」

1970 年

「仕事、各種情報プラスになること」

(8) 大学への要望、提案

では、愛大をどう見ているか、併せて愛大へはどのような要望を持っているかについての回答を見てみる。これも年次別に示した。

1967 年

「スポーツに特化した大学でもなく学び中心になっている大学だと思う」、「世界と日本を結び付けられるような大学になってほしい」、「県内の私学での知名度が低下している」、「時流に流されている。不平等な日米安保を改定する論壇の先達になってほしい」

1968 年

「笹島キャンパスで愛大のイメージアップ」2 件、「中国との関係を強くすることはできないか。わたくしたち当時の京滋支部の同窓会は、大津市のお寺に、上海の大学教授 5 人を招き、交流したことなつかしい」、「高校生の進学志望で某大学などの人気が非常に高くなっている。もっと愛大を PR したらどうか」、「中国での名を高めてほしい。笹島校舎は少子化の中でよかったとおも

う」

1969 年

「若者としての若さを発揮する講義の強化で、3 無をなくす」、「卒業生が社会の各方面で活躍していることは素晴らしい。誇りに思っています」、「立地条件は問題なし。教授が論文を多く出し、資質を高めてほしい」、「特色ある大学づくりを」、「今でも誇りに思っている、校歌はよく歌う」、「当時と比較して、授業料、入学金とも非常に高くなった。もっと安くして質の高い教育と交流を」、「一人でも優秀な人材をより多く余の中へ送り出していただきたい」

1970 年

「今の状況はよく知らない」

以上、大学への要望は、最近の状況を踏まえ、かなり大学間競争も意識して愛大への強い要望や建設的意見が出されている。愛大を愛しているが故であろう。特に 1969 年以前の卒業生に多く、1970 年の卒業生は反応が弱い。この年から大学紛争が発生し、愛大と言えども愛大を相対化してみる状況が生まれたためかと思われる。しかし、多くの卒業生は愛大を愛するがゆえに、愛大に暖かいエールを送ってくれている。それに大学がどうこたえていくかである。

(9) 後輩の学生たちへ伝えたいこと
次に「後輩たちへの伝言」である。

1967 年

「バイトはほどほどにして、学業に専念すること。資格取得、語学力をつけることが今の時代には大切です」、「私たちの先輩たちは優秀であったし、教授

たちも戦後の混乱期に尽力された」、「真面目に勉学に励むこと」、「愛知大学の創学時の先輩の苦労や歴史を知らない後輩が多くなっている」

1968 年

「自由奔放に生きよ」、「たくさん本を読むこと。ジャンルを問わず乱読するくらいがよい。知識が増え、人生観もかわる」、「なんでもよいから資格を取れ。4 年間もある」、「良く学び、よく遊ぶ」

1969 年

「夢を実現できる自分を信じて。道が開ける」、「社会勉強と仲間づくりは必要ですが、まずは勉強すること」、「もっと関東にも目を向けて活躍してもらいたい」、「誇りを持ち、今しなくてはいけないことに自信を」、「常に公明公正に、ひとを愛せ」、「なまえを汚すことなく、一人でも多く日本を引っ張っていける人材になってほしい」

1970 年

「若い時に様々な経験をすること。どんどん失敗してもチャレンジしてほしい」、「よく絆を築く絶好の場」、「とにかく勉学に励んで、知識を習得してほしい」

(10) 人生の満足度と愛大卒業との関係
最後に人生と愛知大学との関係についてのアンケートの回答を示す。

まず、表 4-E-14 自らの人生を振り返った時の満足度についての回答である。それによると、「大いに、そしてまずまず」満足の回答者が 80%を占めており、うち「大いに満足」の回答者は全体の 30%を占めている。「不満や大変不満」とする回答者はゼロ

であり、その他は「普通」だとしている。戦後の高度経済成長期とともにその大半の人生を歩んできた卒業生たちの姿であり、しかし、決して与えられたものではなく、様々な環境の中で自ら道を切り開いてきた満足であろうと思われる。大学進学率もまだ10%代の始まりの時代は経済発展と社会変容の中で、学卒者の需要は高まり、それぞれが確たる人生を実現したということであろう。

愛知大学の役割はそこにもあったと思われるが、表 4-E-15 で示した、その満足度と愛知大学卒業生であったこととの関係を見ると、「大いに関係と多少関係」の合計は、70%を示し、それなりに愛知大学とのかかわりが高い満足度に寄与しているといえるが、人生の満足度の 80%よりは 10%低い。「あまり関係ない、全く関係ない」という回答が 23%を占めており、1969 年までの各年度に数人ずつ、その回答者がいる。

一方、1970 年には大学紛争で半年近く授業に影響したが、この学年には該当者はみられず、逆になっていたように見える。安定期と不安定期の中では、安定期の学生の対応の一部のベクトルが逆になっていたように思われる。不安定期こそ学生はそれらに状況の中で工夫をしたということかもしれないし、その分が大学と強くつながっていたとも言えそうである。

では、さらに掘り下げて「愛知大学から得たもの」を挙げてもらった。そして、「座右の銘」も。その回答を次に年次別に示す。

1967 年

「大学で講義だけ出る学生も優秀でしたが、自力で生活しつつアナウンサーや勤務先を目指して頑張っている学生

に感銘した」、「もっと知識、論理力を高める。「転石苔をはえず」のころを大切にする」、「継続は力なり」、「人生、仕事の結果＝考え方×熱意×能力である。考え方はマイナス 100 からプラス 100 までである。考え方で人生が変わる。熱意はだれにも負けない努力。これは自分の意思で変えることができる（稲盛和夫）」、「人生観の基礎を作ることができたと思う」

1968 年

「生きることに對し、真摯に向き合えることができた」、「勤勉、常にチャレンジせよ」、「学ぶことの大切さをおしえられたとおもいます」、「我以外皆師なり」、「温故知新」、「一生努力」

1969 年

「友を選ばず。去る者は去れ」、「アーサーキング牧師の「私には夢がある」。私には十分夢はかなわなかったが、充実していた」、「半ばは自分のために、半ばは他人のために」、「堅実で向上心を常に持って行動すること」、「温故知新」、「会計学を勉強し、税理士試験を受けようとしたこと」、「建学の精神」、「友人を多く得たこと」、「友達です。クラブで同じ汗を流したもの同士」、「情熱」

1970 年

「二部、昼間と一緒に学んでいた同級生・先輩の学業への真剣さを直接感じたこと」、「大学 4 年間でいろいろ経験しました。人生の礎をつくってくれたと思っている」、「絆の大切さ」、「努力すること」、「4 年間のステップアップ期間。多くの経験」

以上、それぞれの人生から伝わってくる
言葉をかみしめたいくなります。ありがとう
ございました。

(1 1) 刊行物など

1969 年

和田文子「愛知の白馬、イザヤいざいざ、
の校歌」

(1 2) 愛大時代の思い出

(次ページ参照)

名古屋校舎「法経学部 経済学科」(12) 思い出

名大
ME

<思い出>
1967

思い出

中西ゼミで冬に愛大の山(津具村)で合宿。ベトナム戦争中の話題で夜遅くまで話していた。

人生、仕事の結果=考え方×熱意×能力である。考え方は-100から+100まである。考え方で人生が変わる。熱意は誰にも負けない努力。これは自分の意志で決めることができる。(稲盛和夫) このことを胸において生きてきました。名古屋校舎学食のメンチボールの味をよく思い出します。また、遅しかった岡崎不二男、近代経済学の講義を思い出します。○三通信は地理的に近くもって交流が盛んになればよいと思う。三通信の研究をされている先生がいっぱいいます。さらに交流を深め、長野県(特に南部地域)の人材が母校へ進学することを望んでいる。

スポーツクラブは友人関係を広げ、講義に出席した際やゼミなどでも学問のみで頑張る優秀な人材をみてきました。

入学前の冬山遭難事故

アルバイトに行く日が多く、学校へは余り行っていません。アルバイト先でベルトコンベア作業に従事、後家庭教師でかなり疲れました。肉体労働で体力をつけ、力仕事には自信がありました(現在、ボランティアで山林での間伐作業も行っています。又、非常勤ですが、高校へ助めています)

・自由な愛知大学の交流でありのままの人間付き合いが出来た(この頃革マルに〇〇で殺された…うわさごとびかっていた)。○応援団に便所に閉じ込められ、日本刀で脅された。その頃応援団員に所轄わず挨拶され困った(応援団二年間活動停止)。(私の対応が下部応援団員の対応になったためかな?)・【画師パーティ遭難事件】入学時に新聞紙上で報道され、ゼミの先輩が「アルバイトで冬山登山に行けなかったで、生き残った」と話してもらった。

授業料値上げが1年延期されたこと。

1968, 1969

軟派な学生であり、記入できるようなものはありません。

卒業式は豊橋校舎に行つて「学会賞」を頂いた事です。

・ゼミナールで研修旅行をしたこと。ゼミの先生と実施調査を行った事。(新日鉄の知多進出にあわせた地域個別調査)・クラブのメンバーと熊登半島徒歩旅行をしたこと。

有賀先輩には大変お世話になりました。

名古屋学生能楽連盟の活動

愛知大学ワンダーフォーゲル部(AUWV)に在籍し、東海3県で代表委員として全国的活動をしたこと。木村ゼミでの合宿、教授と飲食、麻雀

アルバイトで貯めた金で北海道旅行をしました。同部屋の自分を含め3人でほぼ北海道を一周する旅で、その頃一番安い宿の定番のユースホテルを利用して回りました。当時知床の斜里ユースホテルは電気が通っていない時代でした。夜の食事はローソクの灯で食事をするという状況。ベアレントによる夜の黒会(宿泊者全員で行う)ではスライドによる四季の紹介や知床の話などを楽しく聞きました。そして森繁久彌が作曲した知床旅情の紹介がありました。丁度私達が訪れる1年程前に森繁さんが半年位知床に滞在されて作詞作曲したとのことでした。はじめて聞いた曲でしたが自分には心に残る曲でした。それから1年前程経った頃、加藤豊紀子が唄う(デビュー曲)声の流れで、思わずあのユースホテルのベアレントが唄ってくれた曲だと解り感動した思い出は忘れられません。

車道校舎があまりに小さく、まあ勉強できればいいかと気楽に過ごすことができました。立派なところでなくても充分でした。

特になし

1970

大学時代、同じ高校から卒業した同級生と今でも交流しています。ゴルフ仲間です。良き友達です。・木村ゼミの先輩、同級生とは今も交流があります。

茶道研究会会長時代、愛知学生茶道連盟主催の合同社会を熱田神宮内敷力所の茶室で行うこととなり、愛大(松尾流)は名古屋市立女子短期大学(当時表千家)と組んで席を設けることとなり、愛大からは床に飾る掛物を、市短からは主茶碗を出すこととなった。通常、席で最も重要な「掛物」は、流派にゆかりのある先人の墨蹟などを飾るが、ここでは学生として流儀にとわれない物を飾りたいと同期と相談して、彼のゼミの先生、石井先生(?)から本間喜一先生を紹介いただき豊橋まで伺った。快くお会いいただき、当初「筆は持たん」とおっしゃっていたが、お願いに至った趣旨をお話したところ「忍 本間生」と色紙に書いていただきました。某何分にも半世紀以上も前のことなので記憶違いがあるかもしれませんが…。連盟の茶会ではなく他の重要な茶会かも

研究会の合宿

必修科目のテストで合格と思っていたところ、35点(不合格)の結果であった。納得ができなかったので担当の先生に調べてもらったところ、答案には86点と採点されていた。先生は教務課へ86点と報告したが、教務課で間違えて36点と記載したとの事でした。納得のいかない事や疑問に思った事は質問したり調べてもらったり自分で調べることが可能な事はよく調べる事の重要性を認識しました。

同級生との北海道1ヶ月旅行。

ゼミ授業の教授と学生で夜更会を行い色々なことが話し合えたこと。

応援団の4年間の生活です。この生活が社会に出てからの頑張りにつながり現在まで乗り切れた理由です。

名古屋校舎に女子学生が少なく、講義は男子ばかりに囲まれ、少しこわかったかな。「愛の血がたぎる」は今でも変わらない。ガンバレ愛大

経済学研究会にはいり、経済学の大会に参加、他国立大学生との交流

運動できる広場がなく、名古屋市内のグランド等で授業が行われていた。部活する部員も少なく、大学という環境にはほど遠かったように思う。

自分の思い描いた人生があったし、小学生から社会人になるまでの間で一番充実し、一番成長できた事(家族も高校生から大学生になって、全く180度変わった学生生活を送っていたと兄弟も言っている程、充実していた)

表 4 系

A-1

法経学部経済学科 名古屋校舎（昭和42～45年卒）

卒業年 生年	S42 1967	S43 1968	S44 1969	S45 1970
昭和15年				
昭和16年				
昭和17年				
昭和18年	2			
昭和19年	7	2		
昭和20年	2	6	2	
昭和21年		2	6	1
昭和22年			4	4
昭和23年				1
昭和24年				
昭和25年				
未回答				
計	11	10	12	6

A-9・10

授業料・生活費の工面 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	31	31
2. 親戚・縁者から	2	1
3. 奨学金から	4	3
4. アルバイトから	9	14
5. 給料から	1	1
5. ほか	1	1
合計	48	51

A-5

本学を知った理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
大学案内、進学資料	8
先輩	2
兄	2
中学・高校教員	3
高校	4
地元	5
その他	4

内訳
大学受験雑誌、情報誌、入学案内、大学案内
知り合いが卒業生
兄が卒業した大学
恩師、クラス担当教師
進学指導、進路指導室の資料
名古屋では有名、中学校の近くにあった
なんとなく、記憶にない、経済学を勉強したい、友人

A-7

入学理由 ※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
自宅通学が可能、通学に便利	9
他私大より学費が安い	9
地元の知名度、レベルが高い	5
自分に合っている	5
経済を学びたい	4
恩師の勧め	3
家族、友人の影響	3
校風	2
大学受験の失敗、学力不足	2
試験科目	1
その他	2
特になし	1

内訳
希望大学
学力のレベルに合っている、合格した
兄が在学、友人の勧め
大学のスローガン「よく学び而してよく遊べ」に共感
父が逝去、夜間から編入

表 4 系

A-2

出身地

三河	三好町	1
尾張	名古屋	14
	一宮	2
	稲沢	2
	瀬戸	2
	春日井	1
	東海	1
	尾張旭	1
	佐織町	1
	春日村	1
知多	知多	1
岐阜	岐阜	1
	恵那	1
	垂井町	1
	揖斐川町	1
三重	津	2
	亀山	2
	東員町	1
	長島町	1
その他	滋賀県	1
	福井県	1
	合計	39

A-3

出身高校

三河	愛知県立豊田西	1
名古屋	愛知県立松陰	2
	愛知県立中村	2
	愛知県立愛知商業	1
	愛知県立瑞陵	1
	愛知県立千種	1
	愛知県立熱田	3
	名古屋市立桜台	2
	名古屋市立西陵商 (定時制課程)	1
	名古屋市立北高校	1
	愛知	2
	東海	1
	尾張	1
	名古屋	1
尾張	愛知県立横須賀	2
	愛知県立瀬戸	1
	愛知県立窯業	1
	愛知県立一宮商業	1
	愛知県立津島	1
岐阜県	岐阜県立加茂	1
	岐阜県立恵那	1
	岐阜県立大垣北	1
	岐阜県立大垣南	1
三重県	三重県立亀山	2
	三重県立四日市	1
	三重県立桑名商業	1
その他	滋賀県立虎姫	1
	北陸 (福井)	1
	未回答	3
	合計	39

表 4 系

B-1

学業の位置 ※複数回答あり

	人数
学業が主	20
どちらかといえば学業	8
学業はまずまず	5
学業は従	6

B-2

興味 ※複数回答

	人数
河合ゼミ（税務）	1
安藤万寿男ゼミ	1
木村ゼミ（近経）	1

会計学	4
計量経済学	3
マルクス経済学	2
近代経済学	2
簿記	2
資本論	2
ケインズ経済学	1
金融論	1
経済原論	1
経営学	1
経済地理学	1
財政学	1
社会政策	1
政治学	1
税務会計	1
地域経済学	1
日本経済史	1
職能給	1

フランス語	1
ドイツ語	1

哲学	3
----	---

教職課程	1
世界の政治方向性	1

ゴルフ部	3
------	---

B-3

印象に残った先生 ※複数回答

	人数
山本二三丸	6
岡崎不二男（近代経済学）	5
安藤万寿男	3
河合優	2
岡崎（経済原論Ⅱ部）	2
杉本	2
村上雅子	2
木村憲二	2
高桑	2
山崎研治	1
松江	1
河合秀敏	1
久曾神	1
村上（教養経済学）	1
岩瀬	1
鈴木正四	1
浅井	1
三好	1
黒木三郎	1
村長	1
渡辺文夫（経営史）	1
副島	1
花村芳樹（英語）	1
仏語の先生	1

B-8

在学中の満足度

	人数
大いに満足	10
まずまず満足	24
まあまあ	4
あまり満足していない	1

B-4

ゼミ ※複数回答

	人数
山本二三丸（マルクス経済学）	3
河合優（税務会計）	2
河合秀敏（会計学）	2
岡崎富士男（計量経済）	2
安藤万寿男（経済地理学）	2
山田文雄（福祉国家経済）	2
杉本出雲	2
副島種典	2
木村憲二（金材経済学）	2
村長（マルクス経済学）	1
角谷	1
郡（観光論）	1
山崎研治（金融論）	1
渡辺文夫（経済史）	1
小幡清金（財政学）	1
村上（近代経済）	1
村上	1
村上雅子（マクロ経済学）	1
中西弘次（アメリカ経済史）	1
岩瀬	1

B-9

学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	11
まずまず	16
まあまあ	5
あまり	7

表 4 系

C-1

参加していたクラブ・サークル名 ※複数回答あり

	人数
ワンダーフォーゲル部	1
社交ダンスクラブ	2
自動車部	1
軟式庭球部	1
洋弓部	1

茶道研究会	2
自治会	1
新聞会	1
応援団	1
ユースホステルクラブ	1
ポリネシアン民族音楽研究会	1
映画研究会	1
能楽研究会	1
軽音楽	1
広告研究会	1

会計学研究会	2
経済学研究会	1
哲学研究会	1
岡崎ゼミ	1



愛知大学での学園紛争

1967(昭和 42)年ごろから、学生数の増加への各大学の対応に反発した学園紛争「全共闘運動」は全国に拡大し、その波は愛知大学にも押し寄せてきた。当時の社会的状況や肖像権の問題もあって、本学での学生運動を明らかにできる資料はきわめて少ない。

C-2

クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	14
まずまず	3
あまり参加しなかった	7
無回答	15

C-4

クラブ・サークル活動の影響 ※複数回答あり

	人数
大いにあった	13
まずまず	4
まあまあ	1
あまりなかった	4
無回答	18

表 4 系

D-1
卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	6
やや積極的	9
普通に	15
あまりしない	6
全くしない	3
無回答	0

D-2
卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	5
やや厳しい	7
普通	22
あまり厳しくない	3
全く厳しくない	2
無回答	0

D-4
希望した分野への就職

	人数
はい	14
なんとか	7
意識せず	7
意に反して	5
無回答	6

D-5 ①

就職先

名称	所在地	(人)
愛知日産自動車株式会社	名古屋市	1
大塚製薬 (株)	徳島県鳴門市	1
敷島製パン(株)	名古屋	1
日本電信電話公社		1
中京銀行	名古屋市	1
(株) ほていや (のちのユニー)	名古屋本社	1
協和交易 (株)	中村区	1
丸協青果	熱田区川並町	1
名古屋トヨベツト (株)	名古屋市	1
(株)竹中工務店		1
(株)エスライン	岐阜県羽島郡岐南町	1
三重県労働金庫		1
大和グラビア	名古屋市北区	1
東海染工(株)	愛知県他	1
旧：中日本海運(株)、 現在マースクジャパン支社、 デンマークの船社	名古屋支店	1
日本ケミファ(株)	東京本社ですが名古屋支店に勤務	1
日東肥料(株)	名古屋市中区	1
第一證券(株)	東京都	1
中京コカ・コーラボトラーズ	名古屋	1
モリテックスチール株式会社	大阪市	1
八千代証券	東京 日本橋	1
ユニー(株)	愛知県	1
旭テック (旧旭可鍛鉄) 株式会社	静岡県菊川市	1
(株) 毎日映像音響システム	本社：大阪 名古屋：商工会議所ビル	1
丸万証券(株)	名古屋	1
岡崎信用金庫	愛知県岡崎市	1

D-5 ②

就職先

名称	所在地	(人)
三重県庁		1
名古屋市役所		1
岩倉市役所		1
東海市役所		1
名古屋市中学校		1
岐阜県立高校教員		1
長野県立高校教諭		1

D-6

就職でお世話になった人 ※複数回答あり

	人数
大学就職課	11
愛大卒業生	1
知人、友人	6
自力	14
就職先 (地元の人が在職)	2
ほか (高校恩師、親など)	6
無回答	2

D-7

愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	16
少し	7
特になし	14
無回答	2

表 4 系

D-8

転職 (各1)

名称	業種	所在地
大府紡績		大府
豊橋市役所		豊橋市
日産部品	自動車の部品	瑞穂区滝子
凸版印刷 (株)	印刷	
新東工業 (株)	営業	名古屋市
中部〇〇ハウス	不動産	中区
(株)ロ〇ー	繊維商社	大阪、東京、名古屋
遠藤会計事務所	税務会計	名古屋市
(株)アイティーオー	事務用品卸	名古屋市中村区
三和化成	合成樹脂加工	名古屋市
谷川泰一事務所	測量登記	名古屋市
丸新舎	新聞発送	中村区名駅
(株)プラス	事務機器製造	東京都
(株)箕浦不動産	不動産	名古屋市

D-9

再就職 (各1)

名称	業種	所在地
教育事務所	教育相談員	長野県
市の運営する施設		
(株)アットイン	ウィークリーマンション	名古屋市
渡辺新聞店	新聞配達	熱田区日比野
〇〇〇〇住宅	不動産	名古屋市北区
三菱倉庫	船社代理店業務	名古屋
魚太郎／海鮮ものの販売	ちた歯科医院／歯科	愛知県南知多町
日本トーレックス	高速道路管理	横浜市
日本証券代行 (現NTTデータ)	証券事務・通信	東京都
野村不動産パートナーズ	不動産管理	東京都
(株)ライフポート西洋	不動産管理	名古屋市
岡崎信用金庫	金融業	岡崎市

表 4 系

E-2

東亜同文書院

	人数
よく知っている	13
少し知っている	20
知らない	6
無回答	0

E-3

愛大事件

	人数
よく知っている	5
少し知っている	19
知らない	14
無回答	1

E-4

母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	17
多少関心	12
普通	9
あまり関心ない	1
無回答	0

E-5

愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	8
2. 大学のホームページ	4
3. 「愛大通信」	16
4. さまざまな会合	1
5. 受験雑誌	2
6. 同窓生	2
7. 同窓会報	22
8. 愛大新聞（名・豊）	5
ほか	
無回答	1

E-10

同窓会に参加しているか

	人数
はい	3
よく	2
時々	9
いいえ	24
無回答	1

E-14

人生をふりかえって

	人数
大いに満足	11
まずまず満足	20
普通	8
少し不満	0
大変不満足	0
無回答	0

E-15

満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	9
多少関係	13
普通	7
あまり関係ない	8
全くない	1
無回答	1

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集 (4)

「愛知大学 1960 年代後半期 (1967～1970) における法経学部 法学科、経済学科
(豊橋校舎、名古屋校舎) 卒業生の在学状況とその後の軌跡 (前編)」】

4. おわりに

愛知大学名誉教授 (地理学)、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長

藤田 佳久

以上、第 4 回目となった愛知大学卒業生へのアンケート調査の紹介を終わりました。

今回は、1967 年から 1970 年の卒業生たちからの回答を得ました。対象は法経学部の法学科と経済学科の豊橋校舎と名古屋校舎分である。残念ながら法経学部内に誕生した経営学部、新生で発足した文学部、二部、大学院、専攻科についてはスペースの関係で、次号へ「後編」として詳記させていただきます。

ところで、今回のこの 4 年間のアンケートとその回答は、愛大が、愛大事件や薬師岳遭難事故で揺れ動いた後の、ようやく落ち着きを示し始めた時期であったといえそうです。1960 年代に始まる高度経済成長期のじわじわと響き始まる日本の発展の予感の中で、まだそれまでの雰囲気も持ちつつ階段をのぼりはじめ、しかし、落ち着いて学びやクラブ活動に夢中になっていった愛大生の在学時代と社会人時代の状況が伝わってきます。いわば、愛大のさらなる基礎固めの

時期にあたっていたと思われ、発展の予感に対応するように、大学側は経営学科の新設もおこないましたし、愛大生もそれに答えたと思います。

しかし、一方 1970 年は、全国的な大学紛争の初波が愛知大学へも波及し、1970 年の卒業生の回答の出方やその内容に影響をうかがわせるところもあり、今後の展開が気になるところでもあります。

最期に、今回、この調査にご協力いただいた方々には心より厚くお礼申し上げます。スペースの関係で、前回実施したアンケートを掲載できなかったことをお詫びし、御覧いただいた方々からの御意見、ご批評、ご希望などがあればお寄せくだされば幸いです。

なお、本報告の編集には当記念センターの西川直恵氏と河合京子氏にたいへんご尽力をいただいた。また、豊橋印刷社の市川幸泰氏にも最後までご協力いただいた。あわせて厚くお礼申し上げる。